
魔王の壁越え

武藤緒実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の壁越え

【Zマーク】

Z6806V

【作者名】

武藤緒実

【あらすじ】

幽遊白書の浦飯幽助がHUNTER×HUNTERの世界にトリップします。

以下注意書きです。必ずお目を通してください。BLHに関しては苦情等を受け付けません。

BLH的な露骨表現はありません。ですが、自分の萌えに従つて書きたいように書こうと思つてますので、BLH部分はなくなりませ

ん。あくまで一次小説ですので、登場人物はB.L.化するものと思つてください。（幽助がB.L.化することはない予定です。）少しでもB.L.が嫌だと感じの方は、お読みにならない方がいいかと思います。

携帯サイトで書いたものを順次こちらにアップしています。

幽遊白書連載終了後、幽助が魔界統一トーナメントで優勝したときで、HUNTER×HUNTERはハンター試験編からの原作沿いになります。

いくつか幽遊白書にはない特殊設定を加えてあります。

蔵馬×幽助が好きだったこともあり、この作品内で蔵馬は幽助にぞつこんの変態設定になっています。ただし、蔵馬は作品には名前ぐらいしか出ません。

幽助がトリップしたことによりHUNTER×HUNTERのパラレルワールドとなっています。つまり、原作沿いではあります、セリフや行動が原作とは違います。

以上の点を踏まえ、それでも構わないという方のみお楽しみください。

試験前

魔界統一トーナメントの決勝戦は、黄泉との一騎打ちになつた。連打、連撃の嵐が一週間続いている。俺にしても黄泉にしても、実力伯仲の中で一週間に及ぶ戦闘はきつい。ようやく見つけた一瞬の隙を見逃すわけがねえ！

刹那に莫大な妖氣を指先へ凝縮し、俺の靈丸^{じゅうでん}をぶつ放した。

「ぐうあツ」

黄泉は全身でガードし、押し返そうとする。負けつかよ！
さらに妖氣を込め、体中の妖氣を搾り出し、この一発に賭ける。
「つらああああツ！！」

乱れた髪がボツと伸び、体に妙な模様が浮き出た。自分でも制御できなくくらいの妖氣が溢れ出し。

最大級の靈丸は、黄泉をぶつ飛ばした。

黄泉選手ダウン

浦飯選手、優勝だアアアアツ

大歎声が沸き起つた。観客席の飛影、藏馬と田^由が合つたところまでは覚えてる。俺と黄泉の最後の攻防のせいか、空気が何やらバチバチと音を立てていた。覚えている周囲の様子はこれだけだ。倒れている黄泉もだが、俺だってギリギリで闘つたんだ。もオ立てねー。立てねーけど笑いが止まらない。

「へ、へへへ……勝つたぞおオオオオツ！！」

全力で声を上げ、闘技場のど真ん中で大の字になつて目を閉じた。

大満足の寝入りだ。

が。

おや、いつの間に来てたんだろ？
ちょっとあなた、プレート受けとつてくださいこよ。
まいっただあ、起きないや。
上半身裸だし、ズボンに付けておきますよ。
時間になつたら起きるのかなあ。
まったく、図太い方だ。

一次試験開始

何か言つてやがる。ぬせえなあ。もつひとくらじに眠らせりよ。
せつかく俺ア優勝したんだからよオ。

俺は眠り続けた。周囲に段々と人の気配が増えていく。きっと俺の優勝の祝いにでも来てくれたんだろう。悪いね。俺アまだ寝る。もうひとつ待て。おいおい、悲鳴とか聞こえんだけど。何やつてんだよ。つたく、どいつもこいつも血の気が多くていけねえよ。ま、だから魔界統一トーナメントとか開いちまうんだけだな。

周囲そっちのけで休眠していたそのとき。

ジリリリリリリリリッ

目覚まし時計のような大騒音に、ガバッと体を起こした。その途端、体からバラバラと何かが落ちた。何だ。カード? お、トランプだ。なぜこんなところに? ん? 缶ジュークまである。お供えかよ。動きやすい戦闘衣もある柔らかく、けれど頑丈な生地のズボンには、丸いプレートがつけられていた。そのプレートには、黒くデカい文字で1とかいてある。なんだこれ。

疑問を浮かべていると、周囲はさらに疑問だらけの状態だった。いかつい男がひしめき合つ岩家の中。その男たちの視線の中心は、ダンディーなヒゲの男に注がれている。

誰だアレ。あんなヤツ、魔界にいたか? つーか何だ。ここにいるヤツら、みんな人間じゃねーか?

周囲の男たちからは核じやなく心臓の音が聞こえるし、どう見ても妖力じゃなく靈力を感じる。しかも、体は屈強でもそんなに靈力は強くない。魔界のC級妖怪にすら食われちまいそうだ。何だこの集まりは。

わけのわからない状況に目を瞬いていると、皆の注目を浴びてい

るヒゲダンティーが口を開いた。いや待て、アイツ口、なくね？

「ただいまより、第287回ハンター試験を始めます。私は第一次

試験官のサトツと申します」

ヒゲダンティーはサトツさんとこづらしい。何の試験なのかよくわからないが、彼が一番靈力が強そうだ。体を上手く靈力で覆っているくらいだ。あれなら何とかB級と戦えるだろう。

「今から一次試験会場へご案内いたします。ただし、場合によっては命を落としかねない危険な試験です。覚悟のある方のみ、私についてきてください」

そう告げると、サトツさんは後ろを向いて歩きだした。

「ワオ。そいつあ楽しそうな試験じゃねえか。よし、何かわからんねーが、ついて行つてみつか。

首で跳ね起きると、ふくらはぎまである長つたらしい黒髪がバサツと体にかかる。ゲロ。そういうや黄泉と闘つたときにはいきなし髪が伸びやがって、体にわけのわからん模様が浮き出たんだっけか。

黄泉との闘いで上半身の服はボロボロで、用を為さない。ぶつちやけ残つてる部分のが少なかつたから、破いてその場に放り捨てた。自分の体を見下ろせば、さつきまであつた体の模様は消えていた。どうこうときにアレ出んだろか。つか模様消えたのに、伸びた髪はそのまままかよ、うざつてえな。ハサミねえし、ま、このまま行くか。

俺は走り出した集団にのんびりついて行つた。

「ねいぶんゆづくりだなあ。大アクビが止まらん。サトツさんの靈氣は覚えたから、寝てもついていける。走っちゃいるが、この速さなら散歩みてえなものだ。

何十回目かのアクビをしたとき、髪の毛を立てた坊主が俺に声をかけてきた。

「ねえ、君、名前何て言つの？ オレはゴン！」

透き通った純粋な目をした坊主、「ゴンが笑顔で名前を聞いてきた。見た目、12か13かってところか。どうも俺が同じくらいの年だと思ってる口ぶりだが、怒る気にはなんなかつた。たぶん、こういうヤツ、弟にいたら楽しそうだ、と思ったからだろう。

「俺は幽助だ。浦飯幽助」

「ウラメシくんつていうの？ オレはゴン・フリークスだよ。ゴンつて呼んでね」

「にっこり無邪気に笑うゴン。つむ。まだ粗削りだが、こん中じやピカイチの靈力じゃんか。

「あ？ ゴンが名前か。それでいくと、俺は幽助・浦飯だな。幽助でいいぜ」

「ユースケだね！ よろしく、ユースケ！」

「おう！」

にぱつと笑いを交わす。すると突然、ゴンが後ろに引っ張られていった。そこには酷く焦つた様子のグラサン男と、金髪の少年がいた。どうやらゴンの知り合いらしい。グラサン男が声を潜めて、ゴンの耳に怒鳴り付けた。

「ブアッカヤローッ！ 前つてヤツア何を突然危ねえヤツに話し掛けでんだよッ！」

「やうだぞゴン！ 見るからに危険で、しかも寝ながらヒソカのトランプをいなすよつた輩なのだぞ！ 話し掛けた瞬間に殺される可

能性だつてあるといつのに…」

はつはつはつ！

「ちとら魔族だぜ。耳の良さ、ハンパねえんだぜ。声ひそめても丸聞こえだつての！」

まあな。上半身裸だわ、髪の毛ブキミなくれえ長いわ、不審者と言われても反論はできねえ。いや、地味に腹立たしいが、ここで靈丸ぶちかますほど大人気なくはないつもりだ。堪える俺。ゴンが反論する。

「えー。でもユースケいい人だよ」

「ゴン。いい子だ。

「サンキュ、ゴン」

ニツと笑つて言つと、グラサン男と金髪少年が焦りだす。それにも流し目を送る。全部聞こえてんだよ、ターゴ。いい人つづーか人間じやねえし、どつちかつてーと悪人寄りだけどな。はつはつは。

グラサン男は焦りついでに話題を急転換させた。顔をきょろきょろさせ、目に入ったヤツに怒鳴り付けた。

「あ、お、おいガキ、それは反則だろツ！」

相手はゴンと同じくらいの年の、銀髪で猫目の少年だった。少年がスケボーに乗っていることを咎めたらしい。なんで反則？

猫目の少年も「なんで？」と口にした。

「これは持久力を見る試験なんだぜ！ それをお前

ああ？ これじゃ持久力見れんだろ。ただの散歩だべ？

思わず眉間に皺を寄せる俺の気持ちを代弁したのは、ゴンだつた。「違うよ。試験官はただついて来いつて言つただけだもんね」

いや、俺の疑問とは微妙に違つような。こんなん持久力を試すほどのもんじゃ、と思つたんだが、ふと周りを見れば男たちがやたら息苦しそうに大汗流して走つているし、グラサン男も金髪少年も息切れしている。これ、そんな辛いか？

「なんだよゴン！ お前どつちの味方だよ！？」

グラサン男がゴンに絡んだ。なんか情けねえなあ。そんなところ
がちつと桑原に似てて笑える。あいつ今頃大学生か。ちゃんとやつ
てんのかねえ。あいつ、あれで意外と真面目でよオ。子猫を可愛が
るリーゼントの老け顔を思い出して、顔が緩んだ。

グラサン男を止めたのは、金髪の少年だ。

「怒鳴るな。体力を消耗するだけだ。なによりうるさい。ハンター
試験は、何を持ち込んでよいことになつてているのだよ
明らかに年下の金髪の少年に齧められ、拗ねた様子のグラサン男。
おもしれー。

密かに笑っていると、スケボーで猫目少年が寄ってきた。

「ねえ、君年いくつ?」

「いつも俺を同じくらいだと思つたらしい。何でだ。ふと気付いた。そういうや俺、魔族になつたときから年とつてねーんだつけ。つーことは見た目は15か。それ以前に不審者か。
「こないだ19になつたとこだ」

そう答えた後、猫目少年は猫目を見開き、ゴンも見開き、金髪少年も見開き、グラサン男が叫んだ。

「お前、俺と同い年かよッ！」

「ウソオツー？」

「ゴンと猫目少年と金髪少年までもがグラサン男の方を向いて叫んだ。

「おじコラー、どうこうことだー？ ゴンまでひでエよー！」

そう嘆いてグラサンを取ると、幾分若く見えるもまだまだ老け顔。
見えねーわ。19には見えねーわ！

「だあつはつはつはつ！ 老け顔なところも桑原そつくりじゃねーか
！ よろしくな、桑原2号ー！」

ガシッと肩を組むと、桑原と同じく2号も背が高く、ぶら下がる
ような不格好になるが気にしない。

「そりや誰だよー？ 僕アレオリオだー！」

「俺は幽助だ。よろしくな桑原2号ー」

「レオリオだつづーのツ！」

桑原2号もとい、レオリオと肩を組んで走っている間に、他のメンツのことも知った。

金髪少年がクラピカで17歳。ゴンと同様粗削りだが、なかなかいい靈力を感じる。

銀髪猫目少年がキルアで12歳。ゴンと同じ年。こいつもゴン、クラピカと同様の粗削りな靈力だ。

レオリオもそうだが、こいつらみんな、鍛えたら強くなりそうだ。いやまあ強くなりたいなんてこいつら言ってねーけどさ。

走り続けて数時間。俺にとっちゃ散歩なんだが、周囲にとっちゃ死に物狂いの行軍らしい。

誰も彼もが大汗を流し、息も絶え絶え、なんとかついて行っている。クラピカも、特にレオリオが辛そうだ。

そんな中、平気なのは俺とキルアとゴンだけだ。自然にサトツさんの真後ろまで来ていた。

「ねえ、二人はどうしてハンターになろうと思つたの？」

微かに汗をかいているゴンが聞いてきた。ハンター？
またも疑問符を浮かべていると、先にキルアが答える。

「べつにー。なりたいわけじやねーよ。難関だつて聞いたからただの暇つぶし。だけど難関つて割にたいしたことねーのな。退屈だぜ」

内心では同意する。が、それを受かりたいという奴がいる前で口に出すほど、俺はガキじやねえ。ゴンはどんな反応をするか。

「ふーん。じゃあユースケは？」

ゴンは自然体であつさり流した。へえ。ガキのくせに器のデカいたいした奴だ。こりや将来化けるぜ。こいつヤツは好きだ。

「俺？ 俺はなあ」

ゴンに水を向けられ俺は言い淀む。つーかさ。

「なあ。この試験に受かると何かもらえるのか？」

「え？」

「は、あああああ！？」

キルアは呆れた叫びを上げ、「ゴンには不思議な生き物でも見るかのような視線を向けられた。

「ハンターだよ。ハンターライセンスもらつて、ハンターになれるんだ」

「あー。つまり、それをもらつと散弾銃が使えるとか、禁猟区に入れるだとか、そんな感じか？」

「違う！」

二人から突っ込まれた。ゴンから熱心に説明を受けたことによるど、ハンターとは賞金首を狩つたり、遺跡を発掘したり、珍獣を保護したりとその仕事は多岐に渡るらしい。ハンターになれば様々な特典があり、毎年受験者は数千人いても、受かるのは数人という狭き門だとか。そんなんあつたつけか？ 人間界も広かつたんだな。「ゴンは親父がハンターで、親父みたいなハンターになりたいのだ」と言つた。親父が何をしているのか知らないのに断言するあたりがイイ。

「どんな親父か、ゴンがどんなハンターになるのかわからんねーけど、お前は有名なハンターになるぜ」

「へへ！ ありがとう！」

「ふん。なんでコースケがそんなことわかんだよ」
嬉しそうに笑うゴンと、嫉妬して拗ねた様子のキルア。おーおー。ガキらしくていいねえ。

「なんでわかるかつて？ そんなん勘に決まつてんだろ」

へつ、と呆れたようにキルアは鼻で笑うが、大物ばつか見てきた俺の勘が言つてんだぜ。舐めちゃいけねえよ。

「でもコースケが言うならほんとになりそう。オレがんばつてハンターになるよ！」

信じる、と真つすぐな目を俺に向けるゴン。この田と性質がこいつの最大の強味だろうなと思った。

階段を上がり始めてから数時間。一度撃沈したかに見えたレオリオが、俺と同じく上半身裸になつて再び走り出した。

絶対医者になつてやる！

あいつ、イイな。実は眞面目つてあたりまで桑原に似てるしょ。階段を上ると、先に光が見えてきた。終わりか。汗もかかず、息も切らさず俺は階段を上りきつた。ゴンは少し汗をかいていたがまだまだ元気で、隣にいたキルアも平然としている。出たところには、湿原が広がっていた。立ち止まつたサトウさんが、後ろを振り返る。

「ここはヌメーレ湿原、“詐欺師の壇”と呼ばれています。騙されると死にますよ」

騙されると知つていて騙されるかよ、と誰かが言つた。そうだよな。騙されねえよ。

「そいつはニセモノだ！ 騙されるな！」

脇で猿が騒いでいた。人間によく化けてる。なるほど、ああやつて騙そうとするわけだ。だが、明らかに猿じゃそういう騙されてくれる人間はいねえだろうな。

と思つたら、受験者は結構疑心暗鬼になつていて。サトツからじわじわと離れていく。おいおい。しゃべつておもしれーとは思つが、アレ、モロに猿じゃんかよ。

レオリオあたりも騙されている。なるほど、息も絶え絶えで思考力が低下してんだな。

腕を組んでどうすつか、と思つていると、猿にトランプが刺さつてぶつ切りにされていた。

何やら妙な靈氣のついたトランプだ、とわかつたのは、俺にもそれが飛んできたからだ。

トランプを投げた奴は、目の下にそれぞれ星と涙の化粧をした、

ピエロみたいな男だつた。なんか記憶の隅つこにひつかかるな。誰かいたなこういう奴。あ、昔の美しき魔闘家鈴木だ！

鈴木もどきがクックッと笑いながら前に出る。

「なるほどなるほど。あっちが一セモノ。試験官はハンターが無償で行う。ボクらが田指すハンターがこのくらいでやられてしまつわけがないだろ」

サトシさんもトランプをキャッチしていた。「うん。猿とサトシさんにトランプが飛んでこつた理由はわかつた。だが、なぜ俺にも。サトシさんから警告を受けた鈴木もどきに近寄り、トランプを突き出した。

「お前なあ、間違つて俺にまでこんなもん投げんなよ」

俺だからよかつたようなものの、周りのD級妖怪にさえやられちまいそうな奴らに当たつたらただじや済まないぜ。渡したときの鈴木もどきの顔はキモかった。ニタア、ヒヤバい笑いを浮かべ、俺からトランプを受け取る。

「君、ホントおこしそう。名前なんていうの？　ボクはヒンカ」
なんか変なこと言つたぞ。こいつ、ヤバい奴だ。

「いや。うん、名乗るほどのもんじゃないつづーか、そんな感じだ」
名乗つたら知り合いになつちまつ。じゃ、とキルアヒゴンを両脇に抱え、最速で逃げた。変な奴のこるところに、知り合つたばかりとはいえ、かわいい弟分たちを置いていけねえだろ。

最後列にまで移動し、キルアヒゴンを下ろした。すぐにキルアが文句を口にする。

「お前、一番後ろとかふざけんなよー。はぐれたらどうしてくれんだよー！」

「つつてもよー、お前、あんな変な奴のそばに置いて行かれたくないんだろ。でえじょうぶ。サトシさんの靈氣は覚えたから、どんどん離れても辿り着けつからよ」

「レイキ？　つて何？」

「ゴンが首を傾げる。

「靈氣つづーのは体から出るオーラだよ。一人一人みんな違つから、人間見分けるときにや便利だぜ」

「すごい！ ユースケそんなの見えるんだ！ ねえ、オレはどんなレイキなの？」

無邪気な子犬みたいだな。ゴンの靈氣は、燃えるような青。単純な戦闘馬鹿に多い色だ。俺もその傾向があるわけなんだが。余計なことは付け加えず、色だけを伝えた。

「へえ、オレ青なんだー。見えないけど嬉しいなあ」

「騙されんなよ、そんなん見えるかよ。ホントに見えるならヤベエ奴だ」

「ちなみにキルアは緑だぜ」

実は興味津々だったキルアには当然気付いていた。別に知りたかねーし、なんてどこか嬉しそうに強がりを言つキルアはかわいいガキだ。

緑の靈氣は氣分屋で嘘つき、捻くれ者に多い。まさにキルアだ。「だいたい色は5色に分けられんだ。色以外には靈氣の出方とか大きさとか、形だとかで人間を識別できんだよ」

「へえ、と感心しきりのゴン。キルアもかなり気になつてゐるらしく、耳が俺に向けてぴくぴくしている。

「人間を識別するつて、ユースケまるで自分は人間じゃないみたいな言い方だね」

純粹故か、ゴンは鋭い。

「わかっちゃったか。俺、実は魔族なんだよなー」

はつはつはつ、と笑つて本当のことを告げると、ゴンは真顔で聞いてきた。

「魔族つて何食べるの？」

嘘つぽく言つたにも関わらず、「ゴンは眞実と見抜きやがつた。まつたく、たいしたもんだ。

「人間と同じもん食つてるぜ。中には人間を食つ奴もいるけどな。もう俺が食わせねえよ」

「そんなことして他の魔族は怒らないの？」

「おー。俺が魔王になつたからな。破る奴はけちょんけちょんにしてやるぜ」

「そつか。がんばってね！」

本氣で応援された。こんな話、俄かに信じる奴がいるとは思わなかつた。器のデカさがハンパない。

「はん、バカバカしい。ガキだと思つてほら吹くなよな。いくら迷わない自信があつたつて、先着順に切られるかもしねえじゃん。さつさと行くぜ」

動き出した受験生に混じり、キルアは走つて行つてしまつた。まあ、あれが普通の反応だろう。

「先着順だつたら大変だ。コースケ、前の方に行こいよ」

「おう」

ゴンと共に俺は集団の前に向かつて走り出した。

集団の脇をすり抜け、俺とゴンとキルアは、再びサトシさんの真後ろまで来ていた。次第に霧が深くなる。

集団の後ろの方にいる鈴木もどき、もといヒソカツつー奴が殺氣を撒き散らし始めた。こりや危ねーな。そのことに、キルアも気付いたらしい。

「前に来て正解だぜ。あのヒソカツて奴、この霧に乗じて相当やる気だ」

キヨトンとするゴンに、キルアは得意げに言つ。

「なんでわかるかつて？ それは俺があいつと同じ種類の人間だからだよ」

まあ確かにキルアとヒソカツは同じ靈氣の色をしちゃいるが、きっとそういう意味じやないんだろう。

「同じ種類？ におい全然違うよ

「そういう意味じやねーよ！」

かぐな、犬かよ！ と突つ込むキルアに首を傾げるゴン。くく。ゴンはおもしれーな。

「とにかく、前に来た方がいいんだね。レオリオー、クラピカー！もつと前に来た方がいいってさー！」

後ろに向かつて、ゴンが叫ぶ。

「行けるもんなら行つとるわ！」

後ろを走る人混みの中から、すぐにレオリオの怒鳴り声が返つてくる。そこをなんとか、と応じるゴンに爆笑だ。

「つたく、緊張感のない奴らだな！」

「本当だな」

「お前もだよ！」

相槌打つたら、俺までキルアに呆れ混じりに突っ込まれた。まあ緊張感がないのは事実だが。

そうこづしている内に、奴が動いた。

ウワッ

あああッ

集団の後方で、悲鳴が上がる。十数人の靈気が一瞬で消えた。殺つたのはヒソカだ。

「どうしたんだろう？」

不安げなゴンに、キルアが鼻で笑つて冷たく応える。

「ヒソカが殺し始めたんだろ。さつき一緒にいた奴らが心配か？なら悲鳴が聞こえないことを祈つときな」

ゴンは背後を気にして、後ろ向きで走る。確かに心配だ。ヒソカの靈気は、この集団の中じゃ一番洗練されていて強い。まだ未熟なレオリオやクラピカが無事に済むとは思えねえ。

不安は的中する。

再び上がった悲鳴の中に、レオリオの声があつた。瞬間に後ろへ駆け出すゴン。その背中に向かつてキルアが声を上げる。

「おい！ 放つておけよ！ ここではぐれたら終わりだぜ！」

「後で追いつくから、キルアたちは先に行つて！ たいした駿足で、ゴンはすぐに入混みに紛れた。」

「はー、ばつかじやねーの、アイツ！　他人のために何考えてんだよ！　だいたいヒソカに敵うとでも思つてんのか！？」

キルアが悪態をつく。心の奥にある気持ちは、そんなことを言いたいのではないだろう。不器用だよな。

「キルア、先に行つてろよ。ゴンは俺がちゃんと連れてつてやるからよ」

「はあ！？　コースケまで何言つてんだよ！」

「サトシさんの靈氣は覚えたつつただろ。地球の裏側だらうがなんだらうが、ちゃんとつれていつてやるから心配すんな」　キルアがぐつと押し黙る。そのすぐ前を走るサトシさんの、何かを言いたそうな視線とぶつかつた。

「あなたは……、いえ。お気になせりやず」

さつと視線を前方に戻すサトシさん。気にするなと言われても、途中でやめられたら気になるつーの。だが、今は問い合わせている時間がない。

「じゃ、後でな」

後ろへ向かう俺に、キルアは正面を見据えたまま、何も言わなかつた。俺が着いたときには、転がる屍だらけの中、ゴンがヒソカと一対一で対峙していた。何があつたんだ。

傍にはレオリオが顔を腫らして氣絶し、クラピカが見守っている。なぜか、ゴンがヒソカに「合格」とか言っていた。何に受かつたんだ？

「なあ、何があつたんだ？」

立ちすくむクラピカに聞いてみる。ビクッと振り向くクラピカ。隣に来たのに気付いてなかつたらしい。

「……コースケか。気配なく隣に立たないでほしい

悪い、と軽く応じる。嘆息しつつも、クラピカは状況を教えてくれた。

曰く、集団の後方にいたら、ヒソカが突然試験官のまね事をし始めたという。トランプ一枚で周囲の受験生を屠り、トランプの第一

波を防いだクラピカたち数名は逃げることを考えた。だが、レオリオはそれをよしとせず、立ち戻りヒソカに挑む。で、あーなつた、と。んでゴンは、レオリオに止めをさしそうなヒソカを止めるため、釣竿で攻撃、的中し、合格をもらつて今に至る。

正直、ゴンを「青い果実」扱いし、股間を滾らせるヒソカは、直視したくないほど変態だと思う。マジやべー。

あんな変態の視線に、かわいい弟分を晒しておきたくはない。さつさとゴンを抱えて逃げよう。そうしよう。

そう思つていたら、あろうことかへんた、いやヒソカに声をかけられてしまつた。なんであんなに嬉しそうなんだろ？

「やあ、ユースケ。来ててくれたのかい？」

いや待てお前なんで名前知つてんだよ。

「名乗つてねーぞ」

「クク。奇術師に不可能はないのぞ」

奇術師つか変態だろ。ストーカー的な知り方だったに違いない。変態は蔵馬だけで十分だつつの。

「ねえ、ユースケ。ボクとやろうよ」

「嫌だ」

何だか腹黒、違つた、蔵馬がよく俺に言つ「やりましょ」、と同じ感じがした。ぜつてーろくなことじやねえ。

「えー。やろうよ。愉しいよ」

「俺は楽しくない。やんねー」

そう言わず、断る、いいじゃない、よくねーよ、とやり取りが続き、痺れを切らしたのはヒソカの方だった。

「じゃ、イクよ」

めっちゃ笑顔で飛び掛かつて来やがつた。仕方ねー。返り討ちにしてくれるわ。足を開き、腰を落として身構えた。だが、かかつてくる前にピタリとヒソカは動きを止め、どこからともなくケータイを出した。二つ折りのケータイを耳に当て、口を開く。

「もしもし」

「何してるの？ 二次試験会場着いたよ」

「試験官『じつこ』。わかつた、今からいくよ」

俺の耳はケータイの相手の声まで聞こえた。どうやらヒソカには

仲間がいるらしい。

「持つべきものは仲間だね。ユースケとはまだ戦えるチャンスがありそだから、ボクはもうイクよ」

ケータイをどこかへしまうと、にっこりと嘘臭い笑いをゴンにむけた。震えるゴンに、ヒソカは聞いた。

「会場まで行けるかい？」

ゴンは無言で頷いた。

「まあ、ユースケがいれば大丈夫だろうね。そこのはボクが運んであげるよ」

そこの、と示したのは、気絶しているレオリオ。ヒソカはレオリオを軽々と肩に担いだ。クラピカとゴンが慌てる。

「大丈夫。殺したりしないよ。彼も合格だから」

そうは言つが、こいつは靈氣の色から見て、気まぐれで嘘つきだ。途中でレオリオを絶対に殺さないとは限らない。走り出そうとするヒソカの前に立つた。現れた俺に、ヒソカが目を丸くする。

「……驚いた。いつの間に」

「レオリオは置いていけ。レオリオ一人、いや、それにゴンとクラピカを担いだところで俺のスピードはかわらねーよ」

瞬きを二つ。おぞましい笑みを浮かべたヒソカは、俺の肩にレオリオを落とした。レオリオ程度の体重じゃ、重さんて感じねーわ。目に妖氣を込めて睨むと、ヒソカは体を震わせ、あろうことか、股間を盛り上げている。うげ。

「じゃあボクは先に行くよ。また後で」

股間を膨らませたまま、変態は走り去つた。

「つたぐ。やつベーヤツがいたもんだな」

振り返れば、クラピカが深く息を吐き、ゴンが地面に膝を着いた。

「おい、大丈夫か？」

「ゴンが震えてるのに気付いて声をかける。うん、と力無くゴンは頷いた。

「でも、すぐドキドキした」

「そりか。わかるだ。奴の殺氣はただ者じゃない。恐れて当然だ」落ち着いたクラピカが、ゴンの肩に手を置く。いや、違う。ゴンの様子は恐れた者のそれじゃない。ゴンは言った。

「怖いのかな。わからない。けど、すぐドキドキして、あいつと戦いたって思ったんだ」ゴンの言葉にクラピカが絶句する。ゴンは自分の気持ちを持て余して、それに気付かない。自分が普通じゃありえないことを言つたと気付いていない。

「いいつ、俺と似てんな。

くつ、と笑つて、すり落ちたレオリオを担ぎ直す。その動作でレオリオの存在を思い出したクラピカが我に返つた。

「ヒソカのことは後回しにしよう。今は、ここからどうやって一次試験会場に行くのかを考えねば」

焦りつつも、冷静に状況を分析していくクラピカ。ここつの頭のよさそうなところって藏馬に似てるな。冷静に変態などここまで似ないでくれよ。

辺りは濃い霧で、1メートル先もよく見えない。景色がないため、方向感覚も狂つていくんだけれど。普通なら。

「大丈夫だよ！ さつきヒソカがレオリオを担いだでしょ。多分あのときにレオリオのつけてる香水がヒソカについたんだ。そのにおいを辿つていけばいいよ」

キヨトンとする俺とクラピカ。確かにレオリオから香水のにおいはあるが、いくら魔族の嗅覚でも移り香を辿るのは無理だ。まさか同じ思いでクラピカが言つ。

「……いや、しかしそんなにおいなどどこにも感じないぞ」「わかるよ。あっち」

自信満々にゴンが指差す。マジか！

「あつはははー！ 犬かお前！」

「信じられない。人間の嗅ぎ取れる幅はそんなに広くはないはず」

「すげーな、ゴン！ よし任せた！」

「うん！ コースケはレオリオを頼むね」

「おう」

ゴンは走り出した。迷いは一切ない。地面を嗅ぎながら進んだ。たいしたものだ。ちゃんとサトツさんの靈氣がする方へ行つてやがる。

ゴンの後ろを、俺とクラピカが並んで走る。若干クラピカの方が身長が高い。こうこうとき、成長しきる前に魔族になつちまつた自分が悔しい。

「コースケは、ゴンを信じるのだな」

クラピカがぽつりと呟いた。

「ん？ ああ、方向か？ まあな

間違つてねーし。

俺の答えに、クラピカは口元を緩ませた。

「ゴンは不思議だ。無鉄砲で考え無しに行動するくせ、信頼できる。私はここに来るまで、ずいぶんと彼に助けられた。だからゴンにはぜひハンターになつてもらいたいし、彼はその資質があると思う」「ハンターつてのがどんなもんかよくわからねーけど、ゴンがなりたいって思つてるならなれるだろ。ゴンはそういう奴だ。『ゴンはハンターになんだろ。例え今回駄目でもいつか必ず実現する。で、クラピカはハンターに向いてねーのか？』

クラピカの言い方じや、ハンター試験受けてるくせに、自分はハンターの資質つてのがないみたいだった。

「私は純粋にハンターになりたいわけではない。私は、私の部族であるクルタ族を滅ぼした蜘蛛に復讐したい。その手段としてハンターになりたいのだ」

「蜘蛛つてのはでけーのか？」

魔界でよく見かける小山程ある妖怪、土蜘蛛を思い浮かべた。よく骸あたりのタクシーがわりに使われてるアレだ。俺の言葉にクラ

ピカは憎々しい顔で首を横に振った

「蜘蛛とは虫ではなく、幻影旅団といつ盜賊のことだ。クルタ族は気が高ぶると目の色が赤く染まる。それは緋の目と呼ばれ、世界七大美色の一つとされている。奴らはある日、クルタ族を襲い、目を持ち去つた。私だけが偶然にも生き残つた。今でも仲間達の目を盗られた無惨な姿が目に焼き付いている。彼らに目を返してやりたいのだ」

話すクラピカの目は、元々の薄茶色濃くなつていた。どうやらコンタクトレンズで赤くなる目をこまかしているようだ。

「ひでーことする奴らがいるんだな。よし、俺も手伝うぜ」

目を見開いて俺を見た。その目はもう、もとの薄茶に戻つている。

「いや、私的な復讐に誰かを付き合わせるつもりはない」

「つつてもよ、旅団つていうなら何人もいるんだろ。しかもその人數で一部族を滅ぼしちまつくらいだ。一人より一人の方がいいだろうが」

「だが」

「俺がやるつつたら勝手にやるんだよ。おめーはおめーで勝手に旅団見つけて好きに復讐しろよ。俺はそれに勝手についてくぜ」

ボカンとしてクラピカは視線を前に戻した。その顔は笑つている。

「ねえクラピカ。手伝つてもらいたいなよ。ユースケは強いし、クラピカのために一緒にいた方がいいよ」

においを辿りながら、ゴンは話も聞いていたらしい。

「わかった。私は勝手に蜘蛛を探し復讐をする。ユースケも勝手に動いたらしい。私が何を言つても君たちは考えを変えないだろうからな」

嘆息しつつ言われた。ニシシ、と同じ笑いをする俺とゴン。確かにゴンはどこか俺と似てつかもな。

「もうすぐ着くよ！ においが近くなってきた」
サトツさんの靈氣が間近に迫つていた。

一次試験

一次試験会場では、キルアが出迎えてくれた。俺達が来た手段を聞き、不機嫌そうだつた顔が一変、大爆笑。犬かお前！と叫んだ。木陰に転がしたレオリオは、しばらくして目覚めた。何も覚えてなかつた。幸せな奴だ、とクラピカが呆れてたつて。

キルアの話によると、一次試験がこれから始まるのだが、それまで目の前の建物の前で待機らしい。建物からは妙な轟音がしている。周囲は獣だなんだと騒いでいるが、俺はその音に聞き覚えがあつた。

「腹の音だろ、これ」

魔族の方の親父が国中に響かせていた空腹の音によく似てる。

「こんな音腹から出るかよ。バツカジヤん」

キルアはそう馬鹿にしたが、事実、ブハラつてやつの腹の音だつた。俺は無言でキルアの頭に肘を置いてやつた。キルアの舌打ちだけが聞こえた。

一次試験の試験官は、ブハラつて妖怪並に巨体の男と、メンチつつー露出多めの姉ちゃんだった。二人は美食ハンターだと名乗る。へえ。そんなハンターもいんのか。

「一次試験はボクの出した課題に合格した人だけが」

「次のあたしの試験を受けることができるわ。あたしの試験に合格した人が一次試験合格よ！一次試験の課題は料理！」

受験生たちが一様に不安な顔になる。美食ハンターを満足させる料理なんて作れる奴は、ハンターじゃなくシェフになつた方がいいと思うぜ。

ブハラの出した課題は豚の丸焼き。

皆一斉に森に向かつて走り出した。

ゴンたちも散り散りになつて豚を捕まえていくようだから、俺も適当に一匹捕まることにした。見てみるとどの豚もやたらと動き

が遅い。これならゴンたちも簡単に捕まるだろ。

豚を「コピングで仕留め、妖気を高温にして焼き上げた。若干黒いが、ま、いいべ。ひょいと持ち上げてブハラのところに運んだ。

試験会場にはまだ誰も来ていなかつた。

「1番がまた1番乗りね」

ブハラの前に豚の丸焼きを置くと、ブハラはペロッと豚を食べ、ペッと骨のみ吐き出した。すげ！ マジで人間かよこいつ！

「んー、おいし！ なんか味が違うのは火のせいかな。どんな火を使つたの？」

「それにどこにも致命傷が見られなかつたわ。どうやって仕留めたのかしら」

「いやつて、と「コピングを示したら、無言で目を剥かれた。火はどう説明すつか、と思つていたら豚の丸焼きを担いだ受験生がぞろぞろ会場に戻つてきたので、話途中でその場を離れた。ちょっと1番！ とメンチから呼ばれたが面倒くせーから会場から出でておいた。豚の丸焼きはゴンたちも問題なく合格した。

その合格基準にメンチは文句があつたらしい。

「ブハラと違つてあたしは厳しいわよ！ 次の課題はスシよ！ そうそう、スシはスシでも、ニギリズシしか認めないわよ！」

メンチはそう言つた。会場にセットされた道具からして、どうやら握り寿司に間違いなさそうだ。受験生の反応からすると、どうやら寿司の存在を知らないらしいとわかつた。が。

「質問していいか？」

「何、1番」

「俺は寿司を知つてんだが、あれは職人が10年修業してようやく店に出すモンのはずだ。素人が作つた寿司でも、あんたは合格させてくれんのか？」

俺が質問した途端、メンチが答える前に別のところからツルツルゲが声を上げた。

「俺だつて知つてるぜ！ 魚の身を一口大の長方形に切り、一口大

に握った酢飯に乗せたもんだろ！……あ

しまつた、とばかりにツルツバゲが固まる。へえそういう料理な

んだ、と頷いている受験生たち。

「あ、じゃねーわクソツバゲ！ 試験内容バラしてんじゃねーよー！」

包丁をまな板に突き刺してメンチが激怒する。

「こうなつたら味で審査するしかないじゃない！ 早く作って持つてきな！ あたしがお腹いっぱいになつたら試験終了だからね！」

メンチの迫力に、一斉に外へ駆け出す受験生たち。いや、だから味であんたが満足できる寿司を作れる奴は、ハンターじゃなくて店を開いた方がいいだろうが。

腕組みをして立つて見ていたら怒鳴られた。

「1番、あんたも早く行つてきなさいー！」

「おう！」 外に駆け出した。ねーちゃん、たいした迫力だ。鮭みたいな魚を熊みみたいに捕り、会場に持つて帰る。会場にはまだしもまだ誰も帰つてきていなかつた。調理台が並ぶ会場の、遠くのソファーが置かれた試食場からメンチが声をかけてくる。

「1番、あんた最後に出てつて一番最初つてどんだけよ

知るか。

魚を捌きに入るも、硬すぎて包丁が入らない。なんだこの魚。包丁がいけねーのか。仕方ねー。

手刀の形を作り、刃の位置に妖氣を集め、魚の頭を落とした。同様に腹を割り、内臓を取り出す。三枚に卸したところでメンチが来た。

「1番ッ！！ あんたそれ！ 念魚のケイサじやない！？ ビリやつて捕つた、つていうか、どうやつて捌いたの！？」

両肩を捕まれ、首を絞める勢いで問い合わせられた。やめい。

「鮭だかケイサだか知らねーが、フツーに捕つてフツーに捌いた」

「んなわけあつかーッ！！ いい？ 念魚つてのは念を纏う数少ない魚の一種で、熟練の魔獣ハンターが三日三晩かけてようやく捕れるような川魚最速にして最強の魚なのよ！ 死んでもなお念で防御

していく、普通の包丁なんかじゃ捌けないのー。ここにあるような包丁じゃ無理なのよー!! さあどうやったの? きりきり答えんかいー!!

顔面に包丁を突き付けられた。恐ろしいねーちゃんだな。
「だからよ、フツーに捕れだし、手に力込めてフツーにぶち切つた。
つーかよ、ネンってなんだ?」

メンチがピタリと動きを止めた。皿を合わせ、数回瞬きを繰り返す。

「あんた、念を知らないの?」

「だからネンってなんだよ」

俺の応えに、メンチの皿が据わった。そして一皿。「忘れなさい

「あ?」

「あたしが今言つた単語を忘れなさい。今すぐ!」

「無茶言つなよ!」

「無茶じやない! 忘れなさいー 忘れる!」

首に包丁を突き付けられ、脅された。なんでこいつはすぐ包丁を使うんだ。

「わあつたよ! 忘れた!」

「よしー ジヤ、あたしは行くわー!」

明らかに逃げた。あいつ、マジ調子いいな。

氣を取り直し、寿司作りを続けることにした。

この鮭もどき、表面はめちゃくちゃ硬かつたが、赤身は普通の魚だつた。包丁を使って身を切り分け、酢飯にワサビを挟んで握つた。味見に醤油をつけて食べてみると、ヤベーくらい美味かつた。こんな魚、あつたのか!

握つては食べ、握つては食べていたら、メンチに怒られた。

「ちょっと1番! 早くあたしに食わせなさいよーーー 早くーーー!」

仕方ないから小皿に2貫乗せて持つて行く。

「信じられない! あの幻の超高級魚がこんなところで食べられるなんて! ああん、ケイサちゃん!」

箸で掴み、醤油につけて一口。メンチが悶えた。

「ああ、この口の中とろける脂ののった食感、酢飯と醤油とケイサの絶妙なシンフォニーに、ワサビのセンセーショナルなアクセント！ 最高だわ！」

「じゃ合格か？」

「ん、シャリの握りが甘い。やり直し」

褒めちぎっておきながら、ぴしゃりと落とされた。てめえ、それはただケイサの握り寿司が食いたいだけじゃねえか？

調理台に戻ると、俺のところに人だかりができていた。何かあったのか。

「あっ、コースケ！」

中にいたゴンが手を挙げた。手を軽く挙げて応じる。

「なんかあつたのか？」

「なんかじゃねーよ！ ケイサだよ！ お前、これどうやって捕つたんだ？ 1匹で数億ジョニーの超高級魚だぜ！？」

「ぬあにい！？ これ1匹でエー！？」

キルアが詰め寄り、レオリオが悲鳴を上げる。ついで、ジョニーつてなんだ。金の単位っぽいが、聞いたこともねー。世界にはいろんな金の単位があるってことか。一人で納得していたら、俺の調理台を囲む受験生たちの中にいたクラピカが、さつき作って置いた寿司をじつと見つめて言った。

「寿司とはこのようなものなのか」

「ねえ、コースケ。一個食べたいな！」

冷静に寿司を分析するクラピカに、おねだり上手のゴン。性格が出来るよな。

「おう、いいぜ。ちょっと待つて！」

「やつたあ！」

「オレも食いたい！」

「オレにも食わせてくれ！」

「私も一つもらいたい！」

幻らしい高級魚であること、寿司がどんなものかわかるといつことで、周囲からは俺も俺もと手が上がる。

「ちょっと待ちなあんたたち!! そのケイサはあたしのモノよッ！」

メンチまでもが参戦し、試験は大混乱に突入していく。欲しいと いう奴に俺は寿司を握り続け、結果。

「ああ、大満足!! お腹いっぽい!! つーわけで、試験終了!!」

！」

合格者ゼロのまま、試験終了。

「ふざけんなッ!!」

受験生から上がったその不服は「もつともだ。

「だいたいお前、俺たちがいくらスシを持って行つてもケイサばつかり食いやがつて見向きもしなかつたくせに、そんな納得できるか!!」

「つたりまえでしょッ！ あんな毒ありの魚誰が食うか！ ていうか、ケイサの味を変な魚の味に消されたくないのよね!! 恨むなら美味しい魚を捕つてこれない自分の力のなさを恨みなさい!!」

無茶苦茶だ。俺にしても、散々作られたが、結局合格はもらえなかつた。最後に「おいしい！」の評価は貰つたが。クイズかよ。試験官がそれでいいのか。

「二次試験は合格者ゼロ。運がなかつたわねー。また来年頑張つて」「ふざけやがつて！ 俺はブラックリストハンターを目指してんだ！ 美食ハンター」ときに合否を決められたくはねえ！」

筋骨隆々とした男がキレてメンチを罵倒した。途端、メンチの後ろに控えていたブハラに平手で弾き飛ばされる。スゲー威力。

「余計なことしないでよ、ブハラ

「メンチがやつたら殺しちゃうだろ」

「ふん。美食ハンターごとにやられてブラックリストハンターなんてちゃんちやらおかしいわ！ ハンターやつてれば賞金首と戦うことくらいあるわ。ブラックリストハンターだ、美食ハンターだつ

て区別するなんてくだらない。あたしが見たかったのは、未知のものに挑戦しようっていう気概……だったの、よ？」 メンチの声がだんだん小さくなり最後は疑問形。当初の目的を思い出したらしい。あのツルッパゲに寿司の作り方をバラされ、ケイサに舌鼓を打つている間に目的はあつさり彼方へ。受験生のジト目がメンチに注がれる。

「ほつほつほつ、困っているようじゅのオ、メンチくん」

空から声とともに、老人が降ってきた。頭上の空には飛行船が浮いている。そこから飛び降りたのか。

砂煙があがる中、見事な着地を決めたその老人を見て、メンチがバツが悪そうに「会長」と呟いた。

老人はハンター協会の総括でネテロ会長といふらしい。メンチとネテロ会長の話し合いにより、メンチの実演による再試験が行われることとなつた。

再試験はネテロ会長が乗つてきた飛行船でマフタツ山に移動し、断崖絶壁の谷で行われた。

再試験の内容は、クモワシの卵でゆで卵を作ること。

谷の端にメンチが靴を脱いで立つ。そのまま谷底に跳んだ。谷間にはクモワシが糸で巣を作つていて、糸を伝い、卵を一つ取ると、崖をはい上がり、メンチは帰ってきた。

「糸に引っ掛からずに谷底まで落ちても、川が流れてるから死にはしないわ。ただし、流れが速過ぎるから数キロ先までノンストップで流されるけどね。勇氣がある奴だけいきなさい」

あまりの高さに怖じけづく者も少なくなかつたが、「ゴンたちは」「こういうのを待つてたんだよね！」と嬉々として次々に谷に跳んだ。それを見ていたら、「1番、あんたは？」と聞かれ、まだ跳んでなかつたと気付いた。

すぐに谷に跳んだ。クモワシの卵の側にピンポイントで着地し、卵を取り、糸が戻る反動で上まで帰る。ほれ、と卵をさつきと同じ場所にいたメンチに見せる。

「取つてきだぞ」

「あんたいつの間に……」

「あ？ 今行つてきだじやねーか」

俺をまじまじと見つめ、溜め息をついた。

「あんたがいろいろ規格外だつてのはよお一つくわかつたわ」

まあ人間じやねーからな。

続々と戻つてきた受験生たちと一緒に、大鍋の中に卵を入れて茹でる。出来上がったクモワシのゆで卵は、鶏卵なんて目じゃないくらい美味かつた。これで卵かけご飯が食べてーな。

三次試験会場までは飛行船で移動するらしい。

翌朝まで休んでいていいらしいので、俺はクラピカやレオリオと一緒に床に座った。ゴンとキルアは飛行船探検に行つた。ガキらしくていいねえ。

「しかし、ハンターなんて仕事が人間界にはあつたんだな。知らなかつたぜ」

「じろんと床に寝転がつて言つと、レオリオが素つ頓狂な声を出した。

「はああ！？ お前、ハンター試験受けといて何言つてやがんだよ」「るせえ。気付いたらあそこにいて、なんかおもしろそ.udだから受けてみることにしたんだよ。ハンターを知つたのはついさっきだ」レオリオとクラピカが妙な生き物を見る目で俺を見やがる。はあとため息をつき、レオリオが呆れたように言つた。

「ハンター知らねえって、お前どんだけ田舎に住んでんだよ」「るつせえ、2号」

「愛人みたく呼ぶな！」

「だがコースケ、ハンターは有名な仕事なのだ。それこそ知らない者は辺境の者くらいだろう。出身はどこなのだ？」

「出身？ 日本だよ。ジャパン。先進国だぜ」

「ジャポン？」

なんだか発音ちげえけど、そういう風に呼ばれることもあつたようだ。このときはそれほど気にしなかつた。違和感は少し感じた。

「おかしいな。ジャポンならハンターくらい知つているはずだが。そういえば、あの294番のハンゾーという男もジャポン出身だと聞いたな」

「294番つづりと、ああ、あのツルツパゲか」

俺の言葉に、レオリオが何かを思い出したよつて言つた。

「なあ。お前らの国つてよ、ハゲかスーパーロン毛しかいねえのか？」

ひでえ偏見だ。

「んなわけねーだろ。お前らと似たようなもんだよ。そうだ、クラピカかれオリオか、俺の髪切つてくんねーか？」

体を起こして頬むと、一人は目を丸くした。

「でもお前、そんだけ長く伸ばすのは大変だつただろ。切つちまうのか？」

「これがよー、伸ばそうと思えば一瞬で伸びんだわ。短くすんには切らなきやならねーんだけどな。幼なじみとか仲間に毎回切つてもらうんだが、今近くにいねーし。なあ頬むよ

はあ、と感嘆するレオリオ。

「ジャポン人はスゲーな。一瞬で髪が伸びんのか。つーとあのハンゾーもスーパーロン毛になんのか

ちげーし！」

「あのなあ、俺とハンゾーだけでジャポン人の全てだと思うのはやめれ。俺もハンゾーもジャポンじゃ特殊だ。特に俺は人間じゃねーしな」

「人間じやねーって、じゃあてめえはなんなんだよ

「魔族」

「はいはいはい。じゃあオレが切つてやるよ。こう見えて手先は器用だぜ」

レオリオめ、本当なのにあつさり流しやがった。

「そうか。レオリオは医者を指しているのだつたな。外科医か？」「いや、小児科医だ。だが、できるだけ全部やりてえんだ」

「そうか」

クラピカの目が細まる。レオリオの夢は確かに応援したくなるよな。

レオリオは持っていたカバンの中からハサミを取りだし、俺の髪をザクザク切る。いつも通りの短さを指示すると、レオリオは自己

申告通り器用に仕上げてくれた。

「おー、軽い軽い。レオリオ、ワックス貸してくれよ
リーゼントにすべく、振り返つてワックスを要求すると、レオリ
オはまじまじと俺を見て声を上げた。

「おめーマジでオレと同い年かよ。髪切つたら余計に童顔じゃねー
の」

「確かに19歳には見えないな。私より幼く見えるくらいだ
「るつせえよ。ほれ、ワックスよこせ」

前髪があると余計幼く見えるのは自覚済みだ。レオリオからワッ
クスを奪い、前髪を後ろに撫で付け、久しぶりのリーゼントになる。
「やっぱこうじやねえと落ち着かねーな。後は服か。どつかにTシ
ヤツ落ちてねーかな」

「そんな物乞いみたいな真似はやめてくれ。私のを貸してやるから
きょろきょろ辺りを見ていたら咎められた。クラピカに白い長袖
のシャツを借り、久々に文明人に戻れた。しかしクラピカめ、華奢
に見えて意外にしつかりした骨格だつたんだな。借りたシャツはゆ
るいくらいで、成長しにくい自分の体が悔しいぜ。

「しかし、ここはどこなんだ？ 俺ア確かに魔界にいたはずなんだけ
どなあ」

「また魔族ネタかよ。好きだねえ。ザバン市から相当走ったからど
の辺りだ？」

「ヨルビアン大陸の南端あたりだな
よるびあんたいりく？

知らん名前が出た。眉間に皺が寄る。

「ちょっと待て。コーラシア大陸だとアメリカ大陸とかだろ。ヨ
ルビアン大陸つてなんだよ」

「ユースケこそ何なのだ、そのコーラシア大陸やアメリカ大陸とい
うのは」

頭が白くなつた。

「いやいやいや、俺ら今日本語で話してくるよな？」

「日本語？なんだよそれ。オレらが使つてるのは共用語のハンタ一語だぜ」「

それはなんだ。つまり。

どうやら俺は、違う世界にいるらしい。そう気付いた飛行船の夜。

「……俺、もう寝るわ」

「はあ！？ てめ、この不気味なまでに散らばった髪の毛の片付けくらこしやがれ！ てめえのだろ！」

「うひせえ。俺は今傷心中なんだよ。それくらこお前がやつとけ「意味わかんねえよ！ おここら、寝るな！ このワガママ野郎！」

「聞こえねー」

「レオリオ、休ませてやろう。私も手伝おう」

「あーもう一仕方ねー奴だな！」

そう言つて俺を休ませ、片付けてくれる一人は優しい。わけがわかんねーけど、出会つたのがこいつらで良かった。

三次試験は高く四角い建物の屋上に下ろされた。屋根はなく、青空が広がっている。受験生たちは訳がわからずざわめいた。そこに放送が入る。

『私は三次試験の試験官、リップー。72時間以内に下まで下りてこられたら合格だ。健闘を祈る』

「 プツ、と放送が切れた。下までとは言つが、そこは何もない平らな場所で、階段なんてない。戸惑う声が聞こえるが、俺は魔族の感知能力で、この面の下にはいくつも道があるのがわかつた。さつき妖鳥に食われた奴みたく壁を伝つてもいいし、下までワンパンで床を貫いてもいいんだが、ちつと気になることがある。」

「 ユースケ！ 下に回転床があるみたいだつてクラピカがゴンが小声で声をかけてきた。少しづつ減つている人数にクラピカがそう分析したらしい。

「 それでね、あそこに固まつて5ヶ所入口があるみたいなんだ。ユースケも一緒に行こうよ」

ゴンが指差したところには、レオリオ、クラピカ、キルアがこちらを見て待っていた。一緒に行くわけにはいかないんだよな。

「 わりいな。俺も今見つけたところでよ、今回はこれで行つてみようと思う」

「 そつかあ。じゃあゴールで会おうね！」

「 おう。じゃあな」

ゴンに見送られ、床の回転部の端に立ち、中に落ちた。音もなく着地すると、そこには頭に針を刺し、カタカタと音を出している長身の男がいた。不気味でグロいなあおい。

だが、こいつに用があつたのだ。

「 よお。おめーよ、キルアの身内だろ？ その頭はキルアにバレねーための変装つてどこか」

告げると、男が頭に刺さる針を次々に抜いた。顔が変形する。小さな嘆息の後、黒い長髪の猫目をした美形がいた。

「イルミ・ゾルディック。キルアの兄だよ。なんでわかつたの？」
無表情で聞いてきた。

「俺が魔族だから」

「そういう設定なんだ。残念な頭だね」「信じねーし。一言多いし。さすがキルアの兄だ。

最初は、キルアにちょくちょく視線を送つてる変な男がいるな、と思った。なんだよまた変態かよ、とよく見れば、靈氣の波長がキルアとイルミで似ていたのだ。似てない双子の飛影と雪菜だつて波長は似ている。波長の類似は身内を見分けるのにかなり有効だろう。「で、おめーは何しにハンター試験を受けに来たんだ？」

イルミは首を傾げ、何かを考えていた。そんな悩むような理由なのかよ。

イルミは拳を手の平にポンとぶつけた。

「あ、君、ヒソカのお気に入りの1番か。毛玉みたいだつたのにイーメーション？」

マイペースだな！

「好きであんなカッコしてたんじゃねーよ！」

「ふーん。かわいかつたのに。珍獣みたいで」

「うれしくねーよこのヤロウ！」

「1番は名前何て言うの？」

会話が成り立たねー！ 何だこいつ。氣イ抜けんな。わざと話逸らしてやがんのか？

だが、すぐにそうじやないとわかる。

「幽助だよ。幽助・浦飯。19歳」

「ユースケ。変な名前。次の仕事でハンターライセンスが必要だから。キルがいたのは偶然。でもキル家出したから、連れ戻して来て。あれ。19歳？ キルと同じくらいだと思った」

俺の名前を馬鹿にしたかと思えば、ハンター試験を受けた理由を

説明し、脈絡もなく俺の見た目に言及する。何だこの不思議ちゃん。

かつ飛ばし専門のキャッチボールは続く。

「じゃあ行こ」

「いやいやいや、どうからじゃあつて出てくんだ

「鎖つけるよ」

「ああ？ てめ、説明しろよ」

「オレは左側がいいな。コースケは右側でいいよね」

「ちょっと待て！ 僕ア 右利きだぜ！」

「オレも右利きだよ。気が合つね」

「合つてねーだろ！」

ひどい疲労を感じた。

もうどうにでもしてくれつてな気分でいたら、俺の右手とイルミの左手が手錠で繋がっていた。

俺たちがいた小部屋の扉には、俺には読めない字で何かが書かれていた。「何て書いてあんだ？」とイルミに聞いておいたから、その内気付いたら教えてくれるだろう。かつ飛ばし専門相手のキャッチヤーに大分慣れてきたぞ。

イルミが扉を開け、小部屋から出る。そこには長い廊下があつた。しかも至るところに罠がしこたま仕掛けられている。とりあえず、片つ端から作動させてみた。

コンクリートの床の一部を踏んでみたら矢が降ってきた。俺に当たるまでに、背の高いイルミが全部針で打ち落とした。

膝の高さで壁から壁に張られていた糸を足で切つてみたら、両脇から槍が出てきた。イルミは針で、俺は手刀で落とした。

明らかに落とし穴な床に乗つてみた。落ちたら剣山の上で、そこに刺さることなく一人で立ち、跳んで出た。

ベタすぎてマジ笑えるよ。金だらいとか。

「ねえユースケ。どうしてわざと一つ残らず罠にかかるの？ 趣味なの？」

「ちげーし。何もない道をヤロウ一人で手Hつないでただ歩くとか

「冗談じゃねーよ。そんぐらいならトラップにかかった方がおもしれーじゃねーか」

「ふーん。オレもコースケと一人でいるのはおもしろいよ」
待て。ボク「も」って一体誰と同じつもりでいるんだこの不思議ちゃんは。こんな不思議ちゃんに不思議を追求したといひで謎は深まるばかりに決まってる。」こは流すのが一番だ。

だが、かつ飛びし専門相手のキヤツチボールにおいて、流すのも危険だと知る。

「コースケとオレって相性いいね」

「あ？ そうか？」

「うん。じゃあハンター試験終わつたらうしだね」

「……あ？」

「父さんに紹介するよ。オレの生涯のパートナーだつて

「しうがいのばあとなあだあ！？ ……おいこら待て！」

呼び止めると、ちゃんと思えが返ってきた。見事に自分本意な答えが。

「守らなくていいし、邪魔じゃないし、気が合ひじ。何より、コースケはオレと近いにおいがする。そろそろパートナーを決めるよう言われていたんだけど、君以上に相応しい人はこの先見つけられなさそうだ」

イルミと近いにおい？

ありえん。宇宙人と似たところなんか認めねー。それが人間じゃないという項目なら認めないこともないが微妙だ。

パートナーよばわりの理由はわかつたが、だからといって了承できるものじゃない。というか、なぜこいつは断られるという考えがないんだ。おめーみたいな宇宙人とパートナーなんぞ断固拒否だね。そう言ってやるうと思つたら、イルミが思い出したかのように振り

向いた。

「あ、そうだ。この道なんだけど、一人で協力して、手錠で繋がつたままお互い死なずにゴールしたら合格だつてさ。オレたちなら楽勝だよね」

「こ」でこの道の説明きたか！－ しかもここまで来れば、なんとなくそういう流れなんだろうなつてわかつてたつーの！

「……なんつーイキモノだ」

言いたいことを半分も言わせてくれねーなんて。

俺が疲れたように呟くと、それを見たイルミが無表情で言つた。

「コースケって変わつてるよね
てめえにだきやあ言われたかねーよ。

引きずられるよつて、俺はイルミとその道を進んだ。

三次試験（前書き）

8月20日改稿

三次試験

すべての罠にかかり、罠を制霸し、進んでいく。イルミとの会話は、相変わらず宇宙との交信状態だ。奴の思考と俺の思考はどう考えても光年単位で掛け離れている。

あまりにも意思の疎通ができないのが、だんだんおもしろくなつてきた。時間差の応答や、盲点からの反応は、慣れれば案外打ち返すのも楽しいもんだ。ただ、生涯のパートナー扱いだけは勘弁してほしいが。

進んでいたら、扉があつた。中から複数の人間の靈気を感じる。
50くらいいるな。

利き腕が空いているイルミが扉開け係だ。無言でイルミが扉を押し開けると、中には人間にしちゃ凶悪なツラをしたヤロウどもが、円形の闘技場の反対側にいた。俺たちが中に入ると、扉が閉まり、鍵のかかる音がした。放送が入る。屋上での声と同じだから、えーと、ナッポーだったかの声だろう。

『三次試験官のリップバーだ』

違つてた。言わなくてよかつた。

『今から君たちにはその囚人たちと戦つてもらつ。ただし、この部屋に入つてからの時間と手錠を外していた時間の合計のじかを、奥の部屋で過ごしてもらつ。二人で同時に戦うなら、時間は二乗となる。一対一でも、一対複数でも構わないが、勝敗は、どちらかが死ぬか、まいつたというまでだ。さあ、決めたまえ』

そういうルールか。よかつた、口頭で。貼り紙式だつたらまたしても時間差の説明を受けるはめになるところだつた。

「ユースケ、どひしがやる?」

「俺が行く」

「手錠は?」

「外す」

手錠を外す鍵は、壁に掛かっていた。俺の側だけ手錠を外し、円形闘技場の上に上がる。

「試合形式は?」

反対側から、スキンヘッドの頭が傷だらけの男が聞いてきた。

「めんどくせーから全員上がれよ。俺は人差し指一本でやる。これ以外の指を使つたら、俺の負けでいいぜ」

反対側が笑い声が起きた。

「俺達全員相手に指一本だつてよ!」

「俺達をじらねーんじゃねえのか?」

「俺達アみんな前科100犯以上の凶悪殺人犯として、超長期の刑期持ちなんだぜ」

「ガキと優男か。切り刻みてエなあ」

男の癖にぎやあぎやあつるせー奴らだぜ。俺は無言で円形闘技場の上に立つた。

「やるなら早くこいや。ちうとくらい楽しませろよな」「

腕を組み、仁王立ちで言うと、頭に血管を浮き上がりさせて囚人たちが上がって来る。ぐるりと俺の回りを取り囲み、ナイフやサック、縄や鉤爪など思い思いで武器を持つている。

「簡単にや殺さねえぜ」

「まいつたとも言わせねえ」

「……お前らが費やした時間分だけ、俺達は刑期が短くなんだ」

ニヤリと笑い、囚人たちは一斉に俺へと武器を振り下ろした。

「ゴキン

ナイフが折れ、サックをしていた指が砕け、縄はちぎれ、鉤爪は先が欠けた。

「なッ！？」

驚愕と恐怖が混じる声が囚人たちから上がった。

「お前ら、やるなり本氣でやれよ。痛くも痒くもねーじゃんか」

その後、囚人たちは必死で、寄つてたかつて俺に攻撃を加えるのだが、どれもこれも羽毛タツチかよつてくらいダメージがない。つまんねー。

「もつこいや。おめーらみんな倒れとけ」

囚人たちの間を駆け抜けた。人差し指の一突きで円形闘技場にいた囚人たちは全滅した。殺してねーよ。床に転がっちゃいるが、ちやんとピクピクしてるし。

「……なんだ、今の」

「み、見え、ねえ」

「バ、バケモンだ」

「バケモンじやねえ。俺あ魔族だ。

「で、お前ら降参すつか？」

即座に降参する奴はいなかつた。

「へ、へへ、粘れば粘るだけ刑期は短くなんだ」

「ギリギリまで、誰が降参なんて言つか」

「お前は一度で俺達を殺さなかつた。殺しに抵抗があんだけ」

「殺されねえなら打たれ強さには自信あるぜ」

そんなわけで、囚人たちのはいつくばつているくせん、ニヤニヤしながら誰も降参しねえ。へえ。

「まあ確かに簡単に人殺しするのは好かねえが、暴力をためらうタチでもねえんでな。次は人差し指一本で背骨を折る。長ーあい刑期を全身不隨で過ごしたい奴は降参しなくていいぜ。降参するやつ、手え挙げな。はい、5、4、3、2、1」

ゼロ、とカウントしたときには、全員の手が挙がっていた。

「おーい、試験官！俺の勝ちだろ？」

スピーカーに向かつて叫ぶと、返事はすぐに来た。

『視認した。再び手錠で繋ぎ、隣の部屋で11分23秒過ごせ。時間になつたら次の扉が開く』

「了解」

円形闘技場を下りると、すぐにイルミと手錠で繋がる。悠々歩いて円形闘技場の部屋を出た。

そこは、何もない部屋だつた。一人で壁に寄り掛かり座る。手錠のせいでくつついて座らなくちゃいけねーのが暑苦しい。

「ねえ、ユースケ。なんすぐに殺さなかつたの。そうしたら一瞬で終わつたのに。人を殺せないの？」

イルミが不思議そうに聞いてきた。

「人なんか殺さねえ方がいいだろうが。ま、今回はそんな理由じゃねーよ。考えてみろよ。一瞬での人数を殺したとする。で、本当に死んでるのかどうかたぶん試験官が確認するだろ。死亡確認でどんだけ時間かかると思うよ。それなら、降参が一日瞭然でわかる挙手が一番だろ」

明らかに死体とわかる場合も死亡確認をされそうだし、死体が残らないのも死亡と認めてもらえないことも考えられる。だからこれが一番だ。

イルミの感情のない大きな猫目が、さらに大きくなる。

「ユースケってずる賢いね」

まあこんぐれえは頭つかわねーと、魔界の頂点は狙えねーしな。ここまではよかつた。イルミが衝撃的なことを呟いた。

「さすがオレの嫁」

「よッ！？ おこいらちょっと待て！」

今、嫌なレベルアップしたぞ！？

「ユースケなら父さんたちも喜ぶよ。ゾルティックの嫁に相応しいつて」

「男な上に、殺人肯定派な嫁連れて来られて嬉しい親つてどんなだよ！？」

「暗殺一家だけど。男とか気にしないよ。家継ぐのキルだし」

さつき言っていたイルミと近いにおいてのは、もしか闇の存在とかそんなことのことだったのか。それなら納得だ。俺の方が闇の気配は濃厚だらうが。

それにしても何だらう。会話はこれまでにないくらいスムーズにキヤツチボールできているのに、内容に違和感バリバリだ。投げた物が、ボールじゃなくてトマトだった、みたいな。

とりあえずこれだけは言わねーと。

「誰が嫁になんかなるかよ」

「じゃあオレが嫁でいいよ」

それで問題ないだろ、と言わんばかりの態度。ブチつとキレた。
問題ありまくりだ！

「おめーの嫁にも婿にもなんねーよ！　だいたい俺アな、異世界から来たんだ。だからそのうち異世界に帰るんだよ」

「分かつてるよ。ユースケが痛い人でも、宇宙人でも、オレはユースケを生涯の相手にするつて誓つよ」

「変なもん誓うなッ！」

宇宙人に宇宙人扱いされるつーのは地味に屈辱的だなあオイ。

噛み合わないトマトキヤツチボールを続けていたら、小部屋の出口の扉が開いた。スピーカーから呆れたような声が聞こえる。

『お前ら、痴話喧嘩は帰つてからやれ。その扉の向こうがゴールだ』

「じゃ、行こうか」

マイペースな宇宙人は、激しい疲労を覚える俺を引きずつて歩きだした。

「ユースケ疲れてるの？ あんまり体力ないの？」

不思議そうに聞く。お前のせいだよ！

十八番

『1番コースケ、301番ギタラクル、三次試験通過第一号、第三号！ 所要時間、3時間21分！』

「ゴールの部屋に来たら、スピーカーから合格を告げられた。俺とイルミはヒソカに次ぐ二番目のゴールだった。

それにしてもマジかよ。たった3時間しかイルミといなかつたのに、なんだこの疲労感と脱力感は。

「コースケ、オレ、この試験中はギタラクルだから。イルミって呼ばないでくれる。本当はパートナーなんだからこいつでも呼んでほしいけど」

「はははは。ぜってー呼ばねーから安心しろよ。301番って呼んでやる」

「でもまだヒソカしかいないから、今のうちにたくさんオレの名前を呼んでおきなよ」

「ああ、と迫られても、誰が呼ぶかよ。そこに声が掛けられる。

「あれ。二人とも随分仲良くなつたんだね。イルミが変装解いてるし」

「真ん中に陣取り、トランプタワーを作っていたヒソカだ。何段タワーかわからぬくらい高くタワーを器用に作ったと思えば、それを一瞬で崩す。その際のキモい笑顔。さすが変態。

話し掛けられたイルミは、またしても宇宙発言をかました。

「ユースケにはばれたから。で、オレの嫁になつた

生涯一緒にパートナーつていつたら嫁だよね。

なんつー論理だ。

「なつてねーーー。なあヒソカ、おめーコイツの仲間なんだろ。イルミと意思の疎通、うまくできつか?」

「イルミはそこがいいんじゃないかな

できねーらしい。ヤだよ俺、トマトキャツチボールの仲間とかい
らねーよ。

「ユースケ、髪を切ったんだね。短いのも似合つてるけど、ボクに
切らしてくれればよかつたのに。ボク、器用だよ」

「せつてーヤダ」

「ユイツに背を向けるのも嫌だし、切られた髪をストーカー的活用
しそうでぜつてーヤダ。

「嫁の髪を切るのは旦那の仕事だよ

セコにイルミが入つてくる。そんな決まりがビリあるふたよつ、
おめーはその考え方から離れうや。

あーそうかい、と壁に寄り掛かりながら座つて宇宙人の言葉を流していると、ヒソカがこちらに寄つてきて俺の前にあぐらをかく。ヒソカが首を傾げて聞いてきた。

「ユースケはイルミの嫁になつちやうの？ ゾルティックつて有名な暗殺一家だし、間違いなく玉の輿だけど、イルミ的な旦那だろ？ 人生踏み外しちゃつた感じじやない？」

「イルミ的な旦那！ 思わず噴いた。それを見て、表情はあまり変わらないながら、わずかにムツとしてイルミが文句を言つ。」「ヒソカ、もしかしてオレのこと馬鹿にしてる？ ゴンを見て勃起させてる変態に人生語られたくないんだけど」

「ヤだなあイルミ。ボクはちゃんとユースケ相手にも勃起してたよ。そこのこと」、ちゃんと見てくれないと

「オレの嫁にその薄汚いピー反応させたつていつの？ そんなピーは針でピーするよ」

「イルミつたら過激だね。滾つちゃうじやないか、ボクのピーが」

「ヒソカって本当に変態だよね。去勢しなよ」

クククと笑うヒソカに、瞬きせずに無表情でヒソカを見据えるイルミ。壁際に隣り合つて座り、自主規制だらけの言い争いをする変態と宇宙人、その脇になぜか俺。なんで俺、ここにいなきやいけねーんだろう。

「うそり立ち上がり離脱しようとしたら当然気付かれた。

「嫁、どこに行くの？」

その呼称はもはや返事をする氣にもならんわ。

「ヒマならボクとトランプしようよ」

ヒソカがトランプをきつながら誘つてくれる。

「ヤだよ。人間切つちまつようつなトランプでババぬきとかしたくな
ーし」

「大丈夫。トランプに周^{じゅう}しないから切れたりしないよ」

「ふーん。シユウつて何だ？」

ヒソカが目を瞬いた。逆にイルミは見開いたまま瞬きしねえ。そ
んな奴らに凝視されると居心地悪イ。

「ユースケは、念を知らないの？」

ヒソカが真顔で聞いてきた。

「なんか前にもそれ聞いたな」

記憶を辿つて思い出した。一次試験官のメンチだ。忘れろつて言
われたから本当に忘れてたぜ。

「でもユースケ、普通に堅^{けん}使つてたよ。針の上に落ちたときとか指
一本で相手を再起不能にしたときとか」

イルミの言つているのはタワーの中のことだよな。ケンつて何

だ？

「でも凝こするで見ると念が垂れ流しなんだよね。流れてる念も何か普通のと違ちがうよ?」

ヒソカが俺の全身を舐めるように見る。やめれ、キモいぞ。つか、ギョーって何だ？

わけのわからない」と代わる代わる言われた。一人腕を組んで疑問を浮かべる。

「せういえば、精孔せいこうの開き具合も微妙だね」

今度はシローへきた。

「おめーら、わけのわからねえ話してんなよ。説明しろ。あ、イルミニアは期待しねえ。ヒソカ、説明しろ」

「何それ。コースケ酷くない？ オレ説明つまこよ」

「おめーの説明は、途中に宇宙からの受信が入るからダメだ。かと言つてヒソカの説明は嘘が混じりそ娘娘だから、イルミニアはヒソカの説明に嘘つこがあつたら違うつて言つてくれ」

「それ、お願ねがい？」

無表情なくせに、目が嬉しそうに輝いている。お願いが嬉しいのか？

「ああ？ まあできればそつじてほしごつー感じだな」「嫁にお願いされた。これで婚約成立だ」

「意味わかんねーよッ！！」

横で、ヒソカが腹を抱えて爆笑してやがる。それに蹴りを入れておく。

「取り消す。おめーにゃ何も頼まねえ」

「今更キャンセルできなによ。た、ヒソカ。早く嘘っぽい説明始めなよ」

「よしきた。任せとよ」

親指をぐつと立てるヒソカ。

「嘘つく気満々で説明始めんじゃねーよ！ おいてめえ、ヒソカ。嘘っぽいと俺が感じたら、容赦なく殴る。嘘っぽいと、俺が、感じたらだからな」

つまり、俺の感覚で嘘じゃなくとも殴られるといつ。それに氣付いたヒソカが、嬉しそうに笑った。

「嘘っぽく言えばコースケに本気で殴つてもらえるんだね。痛いんだろうなあ」

股間を盛り上げるな！

「こんな変態、殺つちまつた方が世のためな気がする

「そうだけど、何んのでも時たま役に立つこともあつたりするから、まだ生かしておいて。まあ嫁がどうしても殺るつていうなら、旦那としては応援するけど」

「イルミ、てめえはもつ宇宙に帰つとけ」

笑い転げてこむヒソカを蹴り飛ばし、さつさと説明しろ、と脅す。散々蹴られた挙げ句、やつとヒソカが説明しました。

「念つてこいつのは、生体エネルギー、オーラのことだよ。誰もが微量に放つていゐるオーラを自在に操れる者を念能力者と呼ぶんだ」

それはつまり、靈氣のことか？ 僕は魔族だから妖氣だが。それなら普通に操つてる。何か違うのか？

「普通の人間は、このオーラ、念を垂れ流してるんだ。でも、念を溜めておくこともできるんだよ。それが纏てんという状態なんだ」

そういうや、サトシさんやメンチ、ブハラもそうだったが、田の前のヒソカやイルミも靈氣をうまく体に纏つていて。ここに常にそれを纏つてのをやつてるのか。

「ユースケ、今のところ嘘じゃなによ

「嘘だと思つてねーよ

無表情なドヤ顔、そんなん初めて見たぜ。さすが宇宙人。

「ユースケ、ボクが今何をしてるかわかるかい？」

「宇宙人から変態に視線を変えると、変態は存在感がなくなつてい
た。」

「念つてのがまつたく出てねーな」

先程は豊かに体を取り巻いていた靈気が消え失せ、目で見ていな
ければそこに存在しているとは思えないくらい希薄だつた。

「やっぱり見えてるね。これが絶ぜつだよ。精孔を全て閉じた状態。さ
らに」

精孔から一気に念が噴き出した。纏の状態より力強く体中を覆つ
ている。

「これが練。れん熟練すればするほど強くなる。修行の成果を見せるこ
とを、練を見せろつていつくら、念において練は重要なんだよ」

「これも嘘じやないよ」

「わあつてるよ」

イルミに確認するまでもなく、自分の体験で真実だとわかつた。
纏れんだとか絶ぜつだとか意識したことはなかつたが、人間じんげんだったときは靈
氣を、今は妖氣ようきを操つてきているのだ。

「纏、絶、練まではわかつた。だが、てめえのトランプやイルミの
変装つづーか変形を見ると、念つてのはそれだけじゃねーんだろ

「正解。纏を知り絶を覚え、練を経て発はつに至る。念の集大成が発だ
よ。必殺技とも言つね。」

その他に、無機物に念を宿^{しゆ}らせて武器にしたりする周^{しゅう}、念を体の一部分に集める凝^{めい}、

念を見えにくくする陰^{いん}、

念を広げてその範囲内の事象を把握する円^{えん}、

念で肉体を強化する堅^{けん}、

集めた念のある部分から別の部分に移動させる流^{りゅう}、

念を全て一力所に集める硬^{じょう}、

これらが念の応用だね」

なんかいっぽい名前が出てきてよくわからんねーけど、なんとなく念とその応用がどういうものかはわかった。幻海のばーさんにそんなことを聞きよ…いや教えてもらつたつけな。念を靈氣や妖氣に置き換えるなら、多分俺にもできる。

「発はそれぞれ自分の特性に合わせて、念能力者が創意工夫して開発するんだ。特性は生れつき決まっていて、放出・強化・変化・具現化・特質・操作の6タイプのどれかだよ」

6つの分け方、ねえ。心当たりがあった。

「その6つのタイプひとつのは」

色でわかるだろ、と聞いとしたら途中で心得たといつもうヒソカに遮られた。

「水見式っていいうやり方でわかるよ」

聞きたかったこととは違うが、興味深かつた。

グラスに水を注^{そそ}ぎ、葉っぱなどを浮かべる。それに手をかざして

練を行ううと、特性に応じて変化があるらしい。それが水見式判別法。

そんな面倒なことしねえでも、靈氣、いや念の色でわかるんじやねえのか？

「念つて色分けできねーか?」

「念に色はないよ」

聞いたら即座に否定された。
え。ねえの？

「アーリーの風に音が聞こえとは、コースケには念が色で見えてるつて」と。

そうイルミに聞かれた。

「おう。見えるぜ」

ヒソカは目を丸くして、イルミからほ

-さすがオレの嫁-

宇宙發言出た
ゼニ無視た
シガトた

「そんなの聞いたことないよ。それがユースケの念能力なのかな。
それが本当ならものすごい能力だね。ちなみにボクは何色してる?」

ヒソカが目を糸みたいに細め、ワクワクしながら聞いてきた。

「おめーは縁だな」

嘘つき、気まぐれ、捻くれ者に多い色だ。キルアと同じ色。言わねえけど。

「オレは？」

宇宙人の色だ、と言つてやりたいところだが。

「イルミは赤。マイペースな不思議野郎は大概この色だ」

ついでに言つと、若干タイプは違うが、蔵馬がこの色だったりする。

ヒソカが爆笑した。

「そうそう、念つて結構性格わかるよね。へえ。本當なんだね。自分が何系なのか普通は隠すものだけど、コースケの前じゃ隠しても無駄なんだ。恐ろしいね」

タイプ別に能力の指向性がわかつてしまつため、そういうものは隠しておくるものらしい。

「で、ヒソカとイルミは何系なんだ？」

「コースケ相手に隠しても意味ないね。ボクは変化系だよ」

「オレは操作系」

緑が変化系で、赤が操作系か。

「他にどんな色があるの？」

「黄色、青、紫、それから何色とも分けられねーのがたまにあるな」

「ボクの性格判断からすると、強化系は単純一途」

「そりゃ青だな」

「ゴンがそうだった。隠しておくれものみてーだから言わないが。

「具現化系は神経質」

「ああ。そういう奴は黄色だ」

桑原がそうだ。ああ見えて、あいつ実は神経質なんだよな。

「放出系は短気で大ざつぱ」

「あるある。それは紫だな」

「特質系は個人主義者で、カリスマ性がある」

「まあ一概にや言えねえけど、そういう奴多いな。色はこれつーのはねえの。何色とも言えねえすげえ色だつたり、金色に光つてたりとかな」

「飛影や仙水なんかがこれだ。言つても知らんだろうから言わねーけど。

「ユースケはどんな色なの?」

ヒソカが興味津々に聞いてきた。イルリの「力い猫田も俺をじつと見ている。

「俺は紫っぽい青、んで金色かかってる」

紫が放出系で、青が強化系、金色が特質系だから。

「ところとは、放出系寄りの強化系要素の強い特質系ってことかな？」

「もうこいつになるとこなるのか」

ヒソカの言葉に頷く。

「それならその特性が色で見える念能力も納得だよ。そんなの普通ないし」

イルミが言った。

恐らく、俺が特質系になつたのは仙水と戦つて死に、魔族として生き返つてからだ。それまでは靈氣の色なんて気にしてなかつた。色が見えるようになつてもあんまり氣にしてなかつたが、結構重要だつたんだな。

「ふーん。コースケは特質系なんだね」

「ねえ、コースケはどうして纏してないの？ 念が垂れ流しだよ。精孔もきつちり開いてるところと閉じ氣味なところがあるし」

話の流れなんて気にしない。「コーディングマイウェイ、イルミが瞬きせず首を傾げる。

あー。ばーさんにもなんかいろいろ言われたよなー。靈氣の流れがうんたらかんたらって。それでもやつてないのは。

「面倒くせーからだな」

腕組みをして言い放つと、ヒソカの読めない笑みと、イルミの無表情が俺を見る。

「纏、しようよ」

「纏、した方がいいよ。タワーの中でのコースケを見ている限り、状況に応じて瞬時に必要な念を使っているみたいだけど、コースケにもわからないように念を使う能力者だつているよ。常に纏はしてた方がいい。嫁に何かあるの、旦那としては困るし」

最後の発言はともかく、内容は「もつとも。そういう海藤たちがそんな不思議能力者で、ばーさんに同じ」と言われたつけ。油断すんなつて。

「ま、未知の世界だしな。たとえ宇宙人とはいえ、その意見は聞いた方がよさそうだ」

うし、と氣合いを入れ、全身の精孔から妖氣を放った。その瞬間、俺を中心に妖氣の圧力が噴き出し、部屋中をたたき付けた。床が蜘蛛の巣のように地割れし、壁が崩れる。ヒソカとイルミは念でガードしたようだが、圧された跡を足元に残していた。

全ての精孔から発した妖氣を一瞬で纏つたが、その一瞬での被害は大きかった。おつかしーな。こんな破壊するはずじゃなかつたんだが。

「……すごいね。纏でこれかい」

「練やつたら部屋が飛ぶかもね」

見下ろした俺の体は、金色がかつた青紫の妖氣で豊かに被われていた。

「ま、こんな感じだな」

「たいしたものだね。なるほど、コースケは念の総量が半端ないんだ」

そりやな、これでも魔王でS級妖怪だからな。妖氣の量で人間にや負けねえよ。仙水みたいな人間もいつから絶対とは言えねえが。

「で、コースケはその“「真実を暴く鏡」^{「ミラード・アイズ}”の他にどんな念があるの？ 強化系の念があるんじゃないの？ ね、教えてよ」

勝手に俺の念の色を見る力を名付け、ヒソカがワクワクしてねだる。変なカツ「した大の大人で、しかも変態がやつたところで、かわいさなんてかけらもない。だが、俺のとつておきを知られていないつつーのは新鮮だな。対戦相手や見知らぬ雑魚妖怪まで、みんな知つてたもんなんあ。

「俺の十八番は靈丸だぜ」

「レイガン？ どういの？」

「ユースケ、普通自分の念能力は他人に教えないものだよ。旦那のオレくらいにはいいけど」

身を乗り出すヒソカと、まともなことを言ってんのにイマイチ決まらねーイルミ。念能力を教えていいのかって。

「知られたところで困りやしねーよ。みんな知つてたしな。それに、念について教えてくれた礼だ」

「へえ、とヒソカがおもしろそうに笑う。

「ユースケってやつぱりイイね。君みたいな義理に篤い奴、ボク好きだなあ」

「やめてくれる、ヒソカ。自分は義理なんて切つて棄てるくせに。ユースケはオレの嫁だよ。間男する気？ なら真剣に排除するよ」

「イルミと殺りあつつもりはなかつたんだけど、ユースケのためだし、それもあり」

語尾にハートマークが見えた。キモい。

イルミとヒソカが立ち上がり、イルミは無表情瞬きなしでヒソカを見据え、ヒソカはヒソカで目を糸みたいに細めた嘘臭い笑顔でイルミを見た。

戦いで一なら勝手にやりやあい。が、聞きて一つ一つといて俺そつちのけつてのはいただけねーなあ。

指先をイルミとヒソカの間に向け、威力を最小にした靈丸の引き金を引いた。

二人は靈丸の接近に気付いて飛びのいた。二人の間を貫いた靈丸は、部屋の壁をぶち抜き、ぶち抜き続け、外が見え、その先の森まで破壊しまくつて止まつた。

……おかしいな。軽く撃つたはずなんだが。

心当たりはないこともない。最後に戦つたのが黄泉だつたつてこつた。アレが基準じや軽く撃つても軽くねーか。

呆然と俺を見ている二人に説明をする。

「今のが靈丸だ。ん？ 妖丸か？ まあとにかく、指先に妖氣……じゃない念を集めて、銃の引き金を引くように撃つ。そんだけだ」

呆然からおぞましい笑いに変え、先に口を開いたのはヒソカだつた。股間はあえて見ねー。意地でも視界に入れねー。

「なるほど。教えてくれた理由がわかつたよ。軽く撃つてもそれだもの。つまり、知つても防ぎようがない能力つてわけだ」

ま、そーいうこいつたな。

「レイガンね。単純な攻撃ゆえに、なかなか撃たせてもらえる状況はないはず。それでも使えるつてあたりがコースケの凄みだね。ああ、滾っちゃうよ」

「いいつ。靈丸でぶつ飛ばしても感謝状出る気がするぜ。

変態を視界に入れないように逸らしたら、そこには宇宙人がいた。

宇宙人か変態か。なんだこれ。選択肢が究極すぎんだろ。

宇宙人は、無表情なのにグレイみたいな『力い目』をどこかキラキラと輝かせていた。耳を塞いでおかなかつたことが痛恨のミスだ。

イルミは言った。

「ハンター試験終わつたら結婚式だね」

「『』の星からそんなんもん受信してんだてめえは……」

「うん。さすがイルミ。でもその結婚式、花嫁が奪われちゃうよ。ボクによつて」

「ゾルディックの名譽にかけて邪魔はさせないよ」

「冗談みたいな内容を真剣に言い争う一人。中心のはずの俺の否定は、なぜか通らない。話を聞かねー奴らだな！」

「おめーら、部屋」とぶつ飛ばされてえか？」

一人の動きがピタッと止まる。やつと話を聞いたかと思いまや。

「誰か来た。じゃオレはギタラクルだから」

宇宙人は針を頭に次々と刺し、グロテスクな宇宙人へと変わった。

「カタカタカタカタ」

完全な宇宙人になりやがつた。力無く、俺は靈丸の形を作つていた手を下ろす。

「じゃ、ボクらはダウトでもしようつか」

ヒソカがトランプを切りながら歩み寄る。その肩をイルミ、もとイギタラクル、いや301番がガシツと掴む。

「カタカタカタカタ」

「ん？ ギタラクルもやりたいの？ いいけどちゃんとダウトって言つてね」

「カタカタカタカタ」

「じゃ、始めよう」

「カタカタカタカタ」

いや無理だろ。せつてーダウト言えねだろ。つーか何、何でヒソカはなんとなく意思の疎通ができるんだ？ しかも俺、完璧メンバーに入つてねーか？

「はい、これユースケのね」

「カタカタカタカタ」

いくら宇宙人と変態とはいえ、期待の眼差しで見られてまで突っぱねるような大人気ない真似はできなかつた。黙つてトランプを受け取り、その場にドスンと腰を下ろした。

「ボクから時計まわりね。はい、1」

ヒソカがトランプを裏にして真ん中に置く。続けて301番がトランプを置く。

「カタ」

数字言つてねーだろ!

「……3」

突っ込むのももはや疲れた。俺は大人しくトランプを出した。その調子でゲームは続き。

やつて来たツルッパゲが、部屋に入った瞬間、俺達3人のダウトを見て、「マジヤベエツ」と叫んで部屋の扉の外に隠れたのは気付かなかつたことにした。

三次試験を終え、四次試験のゼビル島へ向かう船の中、一次試験から三次試験までの試験官であるサトツ、ブハラ、メンチ、リッポーがネテロ会長の部屋へ集められた。

ネテロ会長の趣味により、部屋は畳に座布団が敷かれ、ちゃぶ台の上にお茶が出されている。お茶請けには煎餅だ。ブハラとメンチは遠慮なく煎餅をかじり、サトツとリッポーはお茶をすすつた。

「さて、諸君。今回は協力をありがと。どうかね、今回の試験は注目の受験生はいるかね」

口火を切ったのはメンチだ。

「そりや もう1一番よ！ あればもう、桁より格が違うわね！ まさに別格よ！」

「メンチはケイサのスジが食べられたからね」

ブハラが笑つて突つ込む。

「否定はあんまりしないわ。じゃあブハラは誰がいいのよ」

メンチの言い分は、まるでどの子がタイプなの、と聞く女子高生のようだった。この時点でもうすでに主旨がズレているわけだが、メンチだから仕方ない。ブハラは脂肪でなくなつた首を傾げて答えた。

「僕は…… 44番かな」

「ああ、あのトランプ野郎ね。アイツ、試験中ずっとこっちに殺気向けてやがったのよね。だから余計にイライラしちゃつたんだけど」

メンチが合格者ゼロで試験を早々に打ち切ろうとした背景には、そんな事情もあった。

「一次試験中もそうでしたね。試験中には受験生を相当数殺害していましたし」

ヒゲ紳士なサトツが思い出したように言つ。

「注目というなら、301番のギタラクル改め、イルミ・ゾルディックだな」

パイナップルのように頭頂部の毛を逆立てたリッポーが言つのは、三次試験で変装を解いたのをカメラ越しに見たイルミだ。挙げられた名前に、皆がああと頷く。

「ゾルディック家の長男ね。アイツ、元は美形なのにあの変貌はなあ。超キモイ」

相変わらず女子高生のようなメンチの発言に、反論はない。まあ確かに、という感想すら抱く。

「ま、弟も立派な殺人鬼だぜ。タワーン中で、肉体を変形させて囚人を殺してたしな」

リッポーは三次試験中に監視テレビに映つた映像を思い浮かべて

言つた。キルアは爪を長く鋭く変形させて、囚人の胸から心臓を抜き取つた。

「あんなカワいい顔して、あの子も肉体変形しちゃうわけ？ ゾルディック、キモ！」

身も蓋も無い。だが、殺人一家の努力をけなすメンチをたしなめる者はこの場にいなかつた。

「今回の試験は新人が素晴らしいですね。294番のハンゾーも総合力は高いですし、404番のクラピカもバランスがいい。403番のレオリオは応援したくなります。何より、405番のゴンはハンターとして重要な資質を感じました」

「ゴンってあの黒髪の少年？ マフタツ山で真っ先に谷に跳んだ子よね。できる感じだけど、癒し要員じゃないの？」

メンチの頭に浮かぶのは、二次試験の握り寿司の課題でのゴンだ。コースケの握り寿司を見た後のくせに、魚を一匹丸ごと酢飯でくるむという暴挙に出ながら、キラキラした目で差し出してきた少年。

おい、とは思つたが、ヒソカの殺気に当たられてイライラした中、癒しを感じたのを覚えている。

もちろん、食えるかツ、と投げ飛ばしたけど。丸ごと一匹とか、だつてあたし、アシカじやないからあんなの食えない。

「405番か。ありやたいしたもんだぜ。あの場での選択ができる、尚且つ壁を壊して進むなんて力技を考える奴はいねえよ。あいつはいいハンターになるぜ」

リッポーが認めるのは、タワーの最後の選択をしたゴンのハンターとしての資質だ。

ゴンたちは、ゴンを含めレオリオ、クラピカ、キルア、トンパの5人で多数決の道を進んだ。道を曲がるのも、道を進むのも、戦う相手を選ぶのも、全て多数決で決める。

5人の中でも4人は元々知り合いであり、協力して進んでいたものの、トンパだけが邪魔をしてこと」とく反対の意見を選択した。苛立ちを募らせながら最終選択まで進み、最後に待っていたのは、短く簡単だけれども3人しか進めない道と、長く険しいけれど5人全員が進める道の選択だった。

たいていは仲間割れが起こる。だが、起こりかけたときに「ゴンが言つたのだ。全員で進もう」と。さらに、仲間割れをしたときに相手を害するための凶器としか思えないツルハシやハンマーを示し、長く険しい道の壁を破壊し、短く簡単な道に入ることを提案する。

どんなときでも活路を見出だす。その姿勢がリッポーの目に止まつた。

「ホホ。 そつかそつか。 さすがジンの息子じやな」

ネテロ会長が笑つて言つと、4人はやはりと声を上げた。

「ゴンはあのルルカ遺跡の、ジン・フリークス氏の息子なのですね

「へえ。ハンターの血なのかしら」

武道家の老人ボドロや、毒使いの少女ポンズ、狙撃手のゲレタ、蛇使いのバー・ボンの話も出る。が、少し無言になると、皆同じことを口にする。

「でも、やっぱり一番よ」

「うん。そうだね」

「気になる存在なら彼が最も気になります」

「念も使えるしな。ありやとんでもねえバケモンだぜ。あんなのがなんで今更ハンター試験なんか受けてんだか」

4人ともそれぞれが課した試験において、ナンバープレート1番、ユースケの行動の異常さを見た。

「奴の最も異常なところは、あの念の総量だぜ。あのレイガンという放出系の能力、軽く撃つてあの威力だ。全力で撃つたら？ 何発撃てる？」

リッポーはあの念の威力を思い出し、鳥肌をたてた。

「レイガンですか。あの威力なのに、恐らく制約は“指先を向けた方にしか飛ばない”程度でしょう。常人があの威力を出すためには、命をかけた制約が必要でしょうね」

サトツは映像で見たユースケの念能力をそう分析した。

「アレ、マジ反則よね。あんなのどんな念能力か知つてたところで、全力で撃たれたらまず避けられないでしょ。でも、アイツのズルい

「……それだけじゃないのよね」

「一番の動き、めちゃくちゃ速いんだよね。あの動きでレイガンなんて飛び道具は確かに反則だよ」

メンチの言葉に、ブハラが巨体を揺すって同意した。

「あんなバケモンなのに、今まで名前をかけらも聞いたことがない。どこの出身なんですか？」

リッポーが問い合わせると、ネテロ会長がおかしそうに笑う。

「それがのう、奴はハンター試験に願書を出していないのじゃ」

「ぎょっとする試験官たち。それが示すことはただ一つ。

「何よ、じゃアイツ、ハンター試験に偶然迷い込んだってこと…?」

「やうござりになるな」

ズズ、と茶をするネテロ会長。

過去に、そういう事例がないわけではなかつた。天文学的な確率で、試験会場に迷い込む一般人が確かにいた。ただし、早い段階で死ぬか脱落する。

「アーッ、存在がめちゃくちゃだわ！」

メンチの叫びに、一同頷いた。

四次試験開始

「ゴンたちは終了間際に飛び込み、合格をもぎ取った。3日間を有意に使い切つたお前らがうらやましいぜ。早々にゴールしちまつた俺の苦悩の3日間をどう語ろう。

四次試験は、ゼビル島という島で行われるらしい。船でゼビル島へ移動すると、三次試験のゴール順にクジを引くことになった。

クジはまずヒソカが引いた。中身は番号が書かれたカードだった。次に引いたのは俺。カードに書かれた数字を読み、何となく何をするのか予想がついた。

続いて301番が引き、ツルッパゲが引き、最後にゴンたちが引いた。

全員がクジを終えると、三次試験官のリップーから説明が始まつた。

「諸君にはこれから一週間、お互に狩りをしてもらつ。

諸君が今引いたカードに書かれた数字が、その相手だ。

自分のプレートが3点、相手のプレートが3点、合計6点を持して最終日にゴールまで来られたら合格とする。

ただし、ターゲットではないプレートは1点とし、ターゲットではなくとも6点を集められればよい」ととする

リップーの説明が終わる頃には、皆が自分のプレートを隠していた。いや、まあ俺は今更だから隠さなかつたが。1番なんて覚えやすい数字な上に、相当連呼されたしな。どう考へてもみんな知つて

んだる。

「それでは、2分置きに一人ずつ出発する。順番は、三次試験の合格順になる

リッポーの説明が終わり、まずはヒソカが出発した。次は俺か。

「ユースケ！」

背後から声をかけてきたのはゴンとキルアだつた。

「次はユースケ出発だね」

「相手は誰だつたんだ？」

問い合わせて来る一人の胸には、やはりプレートはない。どこか不安げに聞いてくるのは、敵対関係になることを恐れているからだろう。カワイイ奴らだ。

「まさかヒソカだとか、あの見るからにキモヤベー301番とかだつたりしねーよな？」

キルアがコソッと呟つ。あー。そのキモヤベーの、おめーの兄貴だわ。

「俺の相手はアイツだ」

指先にはキモヤベー301番がいる。キルアがマジかよ、と呻き、ゴンが大丈夫?、と聞いてくる。

「問題ねーよ。おーい、301番！俺の相手、おめーだわ！」

三次試験の疲労を全部ぶつけてやるわ。覚悟しどけ。ニヤリと笑いかけると、301番は懐から自分のプレートを出し、俺に投げてきた。俺の手に収まる301番のプレート。

「カタカタカタカタ」

頭に針ぶつさした二ワトリみてえな髪型の宇宙人が何か言つてら。見つめられてもテレパシーとかできねーから。つーかアイツとは言葉が話せても意味通じねえんだつた。

なんにしろ。

「プレート、手に入つちまつたわ」

出発前に6点が。

周囲も皆、呆気に取られて見ていた。

「なっ、あんなのいいのかよ！？」

見ていた受験生たちが騒ぐ。騒がれてもくれちまつたんだから仕方ねーべ。

「問題ない。その2枚のプレートを一週間所持できるのならな

リッポーが不敵に笑つて応じる。

「おー。つまり、俺を襲えば、もれなくプレートが2枚手に入るつ

つーわけだ。楽しみに待つてるぜ」

にんまり笑うと、他の受験生たちは拳銃不審にさつと目を反らした。どうも二次試験が終わるまでヒソカや301番と一緒にいたのを見られているせいで、俺までヤバイ奴だと思われているらしい。何だよ。我こそはやつてやらあつて意気込んだ奴はいねえのかよ。つまんねー。

「ユースケ、挑発するなよ」

年下のキルアに窘められる。「イツつて、あの宇宙人の弟なんだよな。弟はちゃんと同じ星の住人なのに、なんだつてアイツだけ異星人なんだろうか。つか、あんな兄貴とキルアは意思の疎通はできんのか？ できてもヒクが。

宇宙人の兄を持つ哀れなイキモノを、思わず無言で眺めていた。

「……何だよ、その可哀相なモノを見る慈愛の眼差しは」

「いや。おめーは偉いぜ、キルア。俺がおめーだったら、その星ぶつぶつして家おんじてるわ」

「星？」

ゴンとキルアが不思議そうに首を傾げる。癒される。変態と宇宙人と三日間も共にいたせいで荒んだ気持ちが癒されるぜ。

「何のこと言つてゐのかわかんねーけど、オレ今、家出中。母親と兄貴として出て来てやつたぜ」

得意げに言うキルア。何！？あの宇宙人をさしたって！？ 宇宙人は明らかに無事で何ともなかつたが、その行為は素晴らしい。

「正解だ。おめーは英雄だ」

「そ、そう？ どうも」

「ゆ、ユースケ？」

心底から褒めたたえたのになんでかキルアも「コンも引き気味だ。

「で、お前らは何番のカード引いたんだ？」

もう少しで俺の出発時間になる。さつさと聞いておかねえとな。

俺の問い掛けに、二人は戸惑いがちに目を合わせる。お互に狩りのターゲットが自分だったら、と心配しているらしい。初々しくてカワイイねえ。

「ターゲットがおめーら同士だつたらいいな！」

え、と呟き、キヨトンと二人が俺を見る。

「だつてお前ら、ダチと一緒に真剣に全力で戦えるんだぜ。こんな楽しい遊び、なかなかねーぞ」

気晴らしのガチバトルつーのを飛影と何度かやつたことがあるが、何度もめちゃくちゃ楽しい。蔵馬は。あの野郎は腹黒すぎつから相当なことがない限りは誘わねー。

俺の言葉に一人が顔を上げる。

「うん！ それ、楽しそう！」

「こんなエグイ試験を遊びと言いつ切るあたり、コースケっておかしいよな」

たちまち笑顔になるゴンと、呆れたそぶりを見せながら満更じゃないキルア。

「オレのターゲットはコースケでもキルアでもないよ」

「オレも違はず」

「あひや。オレたち同じじゃなかつたね」

「だな」

残念そうに顔を合わせるゴンとキルア。そつだ、と声を上げたのはゴンの方だった。

「ね、キルア。せーの、で見せつけてよ」

そうゴンが提案し、キルアも同意する。その場で、誰に見えるかもわからないのに見せよつとするゴンをキルアが止め、俺とゴンの肩を掴んで円陣を組む。実際、周囲の受験生はこちらを注目し、ゴンたちのカードを見ようとしていたから、キルアの判断は正しい。マジでなぜオレがアレの弟なのか。

「コースケは知ってるから出さなくていいからね」

「おつ

「セーのー。」

俺たちの胸の前に出されたのは、キルアの手にある199番のカードと、パンの手にある44番のカードだった。

199番はわからぬ一けど、44番はあの变态、もといヒンカだな。

無言になる。

「……ゴン、お前、クジ運ないな」

「やつぱり？ オレもやつ思つた

キルアが嘆息混じりに言つと、ゴンも頷く。

「キルアのそれほどいつなんだ？」

「わからないね

「コースケもゴンも知らないか。いいよもつ、適当に3人狩るから

諦めたらしい。ま、キルアならその方が早そうだな。受験生の中じゃ、キルアの実力はかなり上位だらうから。

そこでワッポーに俺の出発を告げられる。

「うし。じゃ、俺行くわ」

円陣を解いて一人から離れると、口々に激励をくれた。礼を告げると、ゴンに視線を向ける。

「ゴン、頑張れよ」

頷ぐゴン。その体は小刻みに揺れていた。ゴンのターゲットは変態で殺人快楽者のヒソカだ。普通ならその震えを恐怖故と思う。

だが、俺は一次試験で、ヒソカの殺気にあてられ、歓喜に震えるゴンの意外な一面を見ている。勝てない。けど戦いたい。つまり、ゴンのその震えは武者震い。

頑張れ。

一人に見送られ、俺は出発した。

念の応用

さて、どう行くか。

今後のことを考えながら森に入ると、そこにヒソカが立っていた。
やあ、と手が上がる。

「まさかとは思うが、俺を待つてたりしねーよな？」

「さすがコースケ。その通り、待つてたんだよ」

こいつ笑ひひソカにげんなりする。

「ち、早く行こう。イルミが来ちゃう」

だからこいつおめーと行くのも嫌なんだが。

何をするかも決めてねーし、そういうこいつに聞きたいこともあつたしで、ついていくことにする。

「向こうには川があるんだけど、水辺はたいてい人が集まるからね。
反対に行こう」

ヒソカの後ろからついていく。ヒソカの左肩は服が切れ、血がついている。三次試験のゴール時点で既にそうなっていたから、タワーの中でケガをしたのだろう。イルミも俺も気付かないように何も言わなかつたが。

なぜ今になつてそれが気になるかといつと、その血のついた肩に

蝶が集まってきた。蝶が、まるで蝶とたわむれているようなヒソカが似合わなすぎて笑えた。

イルミがすぐに出発していくことで、ヒソカがダッシュした。それを追いかけると、小一時間ほどヒソカは止まった。

相変わらずの森の中、腰掛けやすい大きさで、つるつとした石が「ひらひら」してて、それなりに平らな空間がある場所だからだろ。ヒソカが石に腰を下ろし、その隣をポンと叩いて座る。提案される。座るや。隣じゃないところにな。

向かいの石に座ると、ヒソカが話し掛けってきた。

「せういえば、コースケのターゲットは誰だったんだい？　おとなしくついて来たあたり、もしかしてボク？」

ワクワクしながら己を指差すピエロ。お前がターゲットのは、トンだ。かわいい弟分が不利になるようなこと言わんが。

「うんこいや、イルミだつた。したらあの野郎、出発前にプレート投げて寄越しあがつた」

つまりん、と301番のプレートを見せ、ついでに1番のプレートがついているズボンのポケットの横に301番のプレートをつけた。それを見て、ヒソカが目を細めて笑う。

「イルミ、何が言つてなかつたかい？」

「やうこいや、カタカタ言つてやがつたな」

中身がアレで外見もアレじゃ、もはや人間の要素を見出だす方が難しいぜ。

「それ、婚約指輪の代わりだつたりしてね」

ヒソカが目を糸みたいに細め、恐ろしい疑惑を浮上させやがった。

「んなバカな」

「だつてイルミだし」

なんつー説得力だ。そつだ。奴はイルミだった。

やべえ。プレート、受け取つちまつたよ。あのカタカタカタカタにそんな恐ろしい意味が隠されてやがつたつづーのかよ。〔冗談じやねえ！〕

「……へつ こんなもんを婚約指輪にするなんざ片腹痛いわ。婚約指輪つづーのは、給料の3ヶ月分じやねーと認めねえ」

「ククク。ユースケ、給料の3ヶ月分だつたら婚約指輪受け取つちやうんだ」

「おう。考えてやるぜ」

考えるだけだ。検討の末ごめんなさいに決まつてる。

政治家みたいなことを考えていたら、ヒソカがとんでもない事實を口にする。

「しかもゾルティックの稼ぎ手の3ヶ月分って、ユースケは美術館の宝石にでも興味あるのかい？」

つまりなんだ。奴の給料の3ヶ月分は、美術館の宝石の値段に匹敵するつーのか？

「……ありえねえ。俺が探偵と屋台を何十年こなしたところでそんな金額に届くかつてのに、あの宇宙人は宇宙人のくせにそんなに稼ぐってのかよ」

頭にワーキングプアだとか貧富の差だとか蟹工船だとかの単語が浮かんで消えた。

「暗殺つてそんなに儲かんのか」

「そうだねえ。これくらい

指が3本立っていた。

「桁は？ 万か？」

人差し指で上を示される。百万？ 聞けば更にアップ。これくらいか？ まだアップ。アップを繰り返す。マジかよ！

衝撃的な結果にめまいがした。

「これはもしか、嫁になつた方がいいのか？」

「えー。そこで悩んじゃうの？ ならボクもイルミくらい稼ぐから、ボクの嫁にしなよ。イルミよりは人間寄りだよ」

「比較対象がイルミな辺り、比較する価値を感じねーわ。つーか何

で稼ぐ気だよ。おめーも暗殺か?」

「いいや。盗賊」

聞くんじゃなかつた。そいついえ、藏馬や飛影も昔は盗賊だつたんだよなあ。やべえ。現実逃避したくなつてきた。

「まあイルミの婚約指輪は置いといて」

置いとくのかよ。結構深刻な問題だわ。

俺の不安を搔き立てるだけ搔き立てておきながら、奴は話題を変えてきた。

「ねえ、コースケ。時間もあることだし、ちょっと念にしつこいやミに提案があるんだ」

これが俺を待伏せまでした本題だな。視線で促すと、ヒソカが話し出す。

「念の量にたいして、念を消費しきる能力を持つことを、ボクは^{メモリオーバー}容量不足と呼んでる。でも、キミの場合は全く逆。メモリに対して消費が少な過ぎる。それつてもつたいないと思わないかい?」

「それは、何か別の念能力を開発しちゃうとか?」

「うん」

軽く、語尾にハートマークすら付けて言ひやがつた。

だが、俺がここにきてきた理由もこれにある。

「おめーの念能力を見てたら、俺もそりゃ思つた

何か、念能力が作れんじゃねーかつて。

「で、だ。これまで適当に妖氣使って適当にドンパチしてたんだが、おめーがこの間言つてた念の応用つてのはあんま意識してやつたことねーんだ」

幻海のばーさんに教えられたっちゃあ教えられたんだが、自己流にじけまつたからなあ。

「だから、念の応用つてのを教えてくれ

「いいよ」

あつさつと解してくれた。と思いまや、セイはせよひソカだ。

「教えたる、お礼に何をしてくれるのかな?」

そう言つと思つたぜ。ヒソカみたいな奴が無償で何かをするとは思えねー。対策は考えてある。

「俺の新しい念能力を、お前だけに教える」

「イルミテム?」

「教えねー」

つーか何であいつに教えにゃなんねーんだ。旦那云々言つならうぶつ飛ばす。

「教えたらいどうするの？」

「お前以外に教えたら、その念能力は使えなくなる」

そう告げたら、ヒソカが感情の読めない笑みを浮かべた。

「それが制約だね」

「制約？」

「念能力は制約を作ることで威力が増すんだ。キミのこれから作る念能力は、ボク以外に能力を教えない、と心に誓つ、誓約することで威力は増す。誓約の条件としては低いけど、教えた場合、数時間使えなくなるのではなく、全く使えなくなるという高いリスクがあるから、かなり強くなるだろうね」

へえ。子供の口約束とか自分ルールみたいなモンが、そんなに効力があるのか。誓約（誓い）と制約ルールね。

「その制約だけど、気をつけた方がいいよ。例えば、見えないところで誰かが聞いていたらその念能力は使えなくなる。あるいは、口を割らせる念能力者なんてのもいるからね」

確かにそりや要注意だな。せっかく新しく念能力を作つてもパ一になつちまう。

「わかつたぜ。じゃ、まずは応用を教えてくれ

「オッケー。始めようか」

ヒソカが石から腰を上げた。

「まずは練をしてみてよ」

練つてのは確かに体中の精孔から念を出す奴だよな。俺の場合は妖氣だが。

体中の念の流れを感じながら、俺は精孔から一気に念を吹き出した。

「……」
ドン、という爆音と共に、俺を中心に半径20メートル程度のクレーターができた。周囲の木々や石は吹き飛び、俺自身、足裏の精孔から出でている念のせいであくに浮いている。ヒソカも妖氣圧で飛ばされ、遠くで膝を付いていた。

「練、やつたぜ」

「……予想はしていたけど、本当キミは期待以上だね」

吹っ飛ばされながら喜ぶヒソカ。マジキモいな。

「次は絶をやってみて」

絶、か。あんまやつたことねーんだよなあ。気配消す感じでいいんかな。とにかくこの念を引っ込めてみつか。

精孔を塞ぐイメージで気配を消してみた。足が地面につく。よし、

念が消え…てねーな。金色がかつた青紫の念が薄く漏れ出てやがる。頑張つて精孔を消そと踏ん張るが、完璧には塞がらない。

「んー。75点。念が多過ぎる弊害かな。ゴースケの絶は、練習あるのみだね」

平均よつちよつと上。不合格ね。そう採点された。ちつ。今に見てる。バツチシ一〇〇点取つてやつからよ。

「次は応用編。このトランプに念を宿らせてみて。周だよ」

離れたところから念で、おそらく周でコーティングされたトランプが投げられた。それを親指と人差し指でつまみとる。

なんちゃつてな絶をしていたのに、取るときは指先だけ念を込めていた。意識してみると、俺は自然に念を使ってたんだとわかる。

次は周だっけか。こいつの、藏馬あたりが得意だよな。薔薇を武器にするとか。まあ要はアレだら、金属バットを妖氣で覆うイメージ。

親指と人差し指の先から念を放ち、トランプに念を流す。瞬時にトランプは念で覆われた。

「これでいいのか？」

「いいね。それでどこかを切つてみて」

えぐれた地面に便所ポーズでしゃがみ、えい、と土を刺してみた。ドゴオ、と地面が爆発してもう一つクレーターがてきた。もうもう

と砂煙が上がる。顔が砂埃まみれだ。

「……だあッ！ 周、危ねーな！」

「いやいや。普通、周じゃそんなに地面掘れないからね。さすがコースケ。周だけでも凄い武器だ」

驚いてトランプを投げ捨てたら、ヒソカに感嘆された。俺の周は威力がありすぎるようだ。ヒソカみたいに人間に向けたら、切れるとんじゃなくて、木つ端みじんになるに違いない。

「じゃあ次は凝」

ヒソカの人差し指が一本、上に向けられた。何も持っていない。だが、目に念を集めて見てみたら、指先に念でできたトランプが見えた。

「スピードのキングだな」

「正解。クク。今の、凝をしないとトランプが見えないようにすることを隠というんだ。でも凝をしても見えない隠もあるから要注意だ。ちなみに、隠は絶の応用だから、コースケには難しいかもね。絶苦手だから」

そう言われたら挑戦したくなんじゃねーか。念を見えにくくするだろ。やつたるぜ。見えねえ靈丸撃つてやらあ。

内心鼻息を荒くしていると、ヒソカがにそれにしても、と話を進める。

「凄いね。目が自然に凝をするようになるって、相当な戦闘経験だ。

コースケ 19歳だけ。一体どうやつたらいの年でキミみたいのができるんだい？」

年齢教えた覚えはねーが、なんで知つてんだとかヒソカだからもう突っ込まねー。そりゃなあ。年がら年中自分より上の実力の奴と命懸けでバトつてたらこつなんじやね？

「ひたすら闘つてただけだ。で、次は何があるんだ？」

簡単に流すと、そのうちは教えてもらおう、と呑み笑いをされた。鳥肌立つからやめれ。

「念を必要に応じて分散して移動せしる流といつのがあるんだけど、キミ、これはまさに流れる速さでできるからいいよ。肉体を強化する堅と、念を全て一力所に集める硬もできる。後は円やってみよつか」

トランプ取るときになんちゃって絶の最中だつたのに、自然と指先に念を集めたもんな。これが流か。堅つてのは殴るときとかガードするときにやる奴だろ。靈丸で指先に念を全部集めるのが硬か。

「自分を中心、シャボン玉を大きくするイメージだよ」

俺が真ん中で、そこから丸く念の膜を広げる感じか。

ズズ、と念を広げて行く。地面を這わせ、ゆっくりと進ませる。その感覚に衝撃を受けた。

すげエ。

田を開じると、円つてやつの中にいる生き物を感じた。鳥とかうさぎみたいな動物、植物。お、ヒソカがいる。その近くに絶をしている念能力者が2人こっちを見てるな。へえ。絶していたせいで気付かなかつたな。

更に離れた川の辺りには受験生が点在し、もつと円を広げたら森中の受験生の場所がわかつた。ゴンは川のそば、キルア、クラピカ、レオリオはバラバラに森にいた。……げ。イルミ、こっちの方向に来てやがる。偶然か確信かわからんが、まだ距離はあるな。

それを感じたら、もつと円をやめて田を開けた。

「どうだつた？」

巨大クレーターの向こうから飛びはねながらやってきていたヒソカが尋ねてくる。

「めちゃくちゃ便利だな、円。今、イルミがこっちに向かってくんのがわかつたぜ」

見えるのではなく、念を感じることでそうわかる。まあはつきり見えた、飛影の邪眼いらなくなつまつよな。

「どのあたりにいたの？」

「100から10キロくれえ先だな」

10キロ。呟くとヒソカが例の感情を感じない笑顔を見せた。

「それは全力の円？」

「いや、イルミが見えたからやめた」

婚約指輪云々の話がマジだったりと黙つと、今はイルミに会つ気にならねーわ。

すると、たすがコースケだね、と頷かれた。

「円の範囲は達人のレベルでも50メートルだよ。キミ、やっぱり人間の基準を軽く超越しちゃってるよね」

「俺ア、魔王だからな」

「しし、と冗談っぽく笑つて言つたのにも関わらず、ヒソカは不気味な笑みで応じた。

「初めは馬鹿馬鹿しいと思つてたんだけど、だつてキミ、みたいだね」

「お。信じんのか？」

「うん。能力的に人間じゃないっていうのもあるけど、だつてキミ、そういう無意味な嘘をつくタイプじゃないだろ」

俺は無言で口許を緩めた。こいつの突出したところは念能力だけじゃない。むしろ、人の心理を見抜く力にあるんだろう。まあ変態などこにもせず抜けてやがるが。

「俺のいたトコはよ、めちゃくちゃ広くて、やたら強エ奴がうづじゅうじゅいるんだわ。強いくせに田に田に強くなりやがるし。俺アこ

「」でレベルアップして、そしたらあっちに帰るわ

「どうやって帰るの？」

その問い掛けは、俺のいた所が飛行船やら電車やらで帰れる場所じゃないとわかっているようだった。

「なんとなく、方法はわかつてんだ。今、おめーに教えてもらつた念の応用でできそうなんだよ」

「うまくいくかはわからねえ。けど、試す価値はあると思つんだ。」

「ふーん。どういう能力を作りたいの？」

「」では教えられねー。近くに絶をした念能力者が2人いるのはわかっている。迂闊に口に出したら、さっそく誓約に抵触しちまつ。

ヒソカの耳を引っ張り、頭を下げさせる。ち。『デケー野郎は嫌いだ。

何やら嬉しそうなヒソカの耳に、こそりと囁いた。

「念能力者が2人、俺たちを見てる。どんな念能力者かわからねえから言えねえ」

小さい音を聞く念能力があるかも知れねーし、唇の動きで読み取るかも知れねー。

キヨトンとするヒソカ。同じように小声で返してきた。

「たぶんそれ、試験官だよ。全然気付かなかつた

「だな。絶してやがるから、俺も円をやるまで気付かなかつたぜ」

「んー？ ちよつと待つて」

「あんだけよ」

「絶してる人間はさ、円じゃわからないはずなんだけど」

「んな」と叫われても、わかっちゃったんだからしかたねーべ。

「試験官の絶のレベルといつよつ、コースケの感知能力が高性能すぎるだけだらうね」

呆れがちにそつ褒められた。

「そんなわけだから、俺はあいつら撒いて、念の開発するわ」

「うん。わかつた。完成したら教えてね。ボクは狩りでもしてゐるよ

「やうこや、おめーのターゲットは何番なんだ？」

「384番。誰かわかるかい？」

「わからぬーな。見つけたら念を教えてくれた礼代わうことってやるよ」

「やうかい。よひしへ」

じゃあ、ヒソカから一步離れると、俺は最速でその場を走り去つた。

かなり離れた山の麓あたりで止まり、円をしてみる。近くには誰もいらないな。

俺の思い描く念能力を完成させるまでは油断しねえ。常に円で警戒しよう。

半径10キロ円を広げたまま、俺は念の開発始めた。

念能力（前書き）

サイト掲載文より加筆修正

念能力

結果としては、思い描いた通りの念能力ができた。元々作りたかったのは一つなんだが、その過程で二つの念能力を手に入れた。

ただ、一人でやっているため、この念能力がどこまで他人に通用するのかがわからぬ。よし、ヒソカに協力させるか。というレベルになつたのが、四次試験が始まって三日目の夕刻のことだった。

さつそく円で探る。10キロの範囲にはいない。さらに円を伸ばしてみる。受験生が7人。その近くに念能力者が同数。これはきっと試験官だな。

受験生と試験官の見分け方は、纏をしているかないかだ。ただし、受験生が念能力者だつた場合は、気取られないように試験官は纏ではなく絶を行つていいようだ。

円で探ると12キロくらいにキルアがいた。一人で行動している。プレートは奪えたんだろうか。まあキルアなら大丈夫だろう。

15キロすぎ。クラピカとレオリオが一緒に行動してる。あいつら仲いいなあ。

18キロあたり。イルミ発見。スルーだ。

20キロ、ヒソカがいた。だが、何やら不思議な状況だった。

ヒソカについている試験官が一人、近くに絶をして隠れている。

その離れたところに気配を押し隠した誰かはわからんが受験生が一人と、それについての纏中の試験官が一人。

さりに、その中間あたりに纏中の試験官が一人いる。

受験生が一人なのに、なぜか試験官が三人だ。受験生は一人だけだよな。

おかしい。違和感を探ろうとそこに意識を集中させてみると、やつと何かがいるのはわかつた。まるで植物のように自然に溶け込んでいるのだが、「ごくわずかな人間の気配でようやくそこにいるとわかるほど」。状況からして、おそらくは受験生の誰かだ。

誰か知らんが、「イツすげーな。試験官の人数つづー違和感がなければわからなかつたぜ。たぶん、ここに潜んでる奴がやってるのが完璧な絶だ。なるほど、円じゃわからんつてのはマジだつたんだな。

この完全な絶をしている受験生は何者か。距離関係から見て、ヒソカに関わりがあることは間違いなさそうだ。ヒソカから隠れていののか、はたまたヒソカを狙っているのか。

ふと、そういう「ゴンのターゲットがヒソカだつたな」と思い出した。状況からすると、この絶の達人は「ゴンなのだろうか。

だが、念能力者じやないゴンに絶はできるのか?「いや、こんな完璧に絶をしているのに、ついている試験官は纏だ。てことはこの受験生は念能力者じやないのか。

「」の完璧な絶をしてるのは「ゴンだ。俺の勘はそう確信した。

ややこしい状況みてえだが、行つてみつか。ヒソカと試験官が3人で、念能力者が4人いるようだし、新しい念能力を試すいい機会だ。

円を保つたまま、俺はそこに向かつて駆け出した。

状況が変わる前に、と全速力で急いで行く。途中でなぜか落ちていた197番のプレートを見つけた。誰もいねえし、ヒソカへの手土産にすっか。

着いたとき、ヒソカは木にもたれて座っていた。隙だらけに見えて、実のところ隙はない。俺は草むらから出て、ヒソカに声をかけた。

「よオ、ヒソカ」

「やあ。その様子ならできたみたいだね」

「まあな。見せた方が早い。トランプで俺を攻撃してみろよ」

木の下に座っていたヒソカが立ち上がり、トランプに周をする。それから口を開いた。

「さて、ユースケの念能力を見せてもらおうか」

「コイツ。

楽しげにそう告げたヒソカの口の動きと声は、見事にバラバラだった。おめーは腹話術師かよ。なんつー器用な奴だ。

「お前いつから、奇術師から腹話術師に変わったんだ」

「変わつてないよ。ボクは奇術師だ。だってこれからコースケは念能力を説明してくれるんだる。きっと声は届かずとも姿は見えるあたりに試験官がいるだろだから、ボクの口の動きからコースケの能力がばれないように気を使つていいんじやないか。せつかくの念能力が消えてしまわないように」

そのセリフも、言葉と口の動きが全く違つていた。思わぬ理由に目が丸くなる。

ヒソカ以外に俺の新しい念能力を教えたたら、その念能力は使えないくなる。その誓約が守られるよう、協力しているらしい。

「おめー、宇宙人と違つてなんて空気が読める奴なんだ」

「惚れてしまふだろ」

「おう。おめーが男じゃなくて、俺より背が高くなくて、奇術師じゃなくて、変態じゃなくて、ヒソカじゃなかつたら惚れてつかもな」

「ボクはそんな鬼畜なキミにゾクゾクしちゃうよ」

俺は絶対ソコを見ねー。見ねーが、ヒソカおめー股間を自重しろ！

「それより、キミの方こそ何か策を講じた方がいいんじゃないかい

変態だが、ヒソカの言つてることは正しい。俺は口を手の平で隠した。

「ターゲット、俺とヒソカ」

ボソツと呟き、念を発動した。これでいいだろ？。

ヒソカが俺を見ていた。

「今、何かしたね」

「おう。後でちゃんと教えてやるよ。とりあえず、これで口もえ隠せば問題ね。ほれ、トランプ投げろよ」

「姿は見えても声は聞こえなくなる能力ってことかな。了解」

腹話術状態で話すヒソカ。口を手の平で隠す俺。妙な状況だよな。

ヒソカは目を細めて笑い、俺に向かってトランプを数枚投げてきた。トランプがヒソカの手から離れた瞬間に、俺は一番目の念能力を発動する。

トランプは俺とヒソカの中間で静止し、パラパラと落ちた。

お。うまくいったな。にやりとする俺とは逆に、真顔になるヒソカ。

ヒソカは、落ちたトランプを眺め、トランプがまだ周を保つているのを確認する。

「ボクの周はまだ生きている。念能力を無効にする能力、ではなさそうだ。壁に当たったみたいな感じ」

壁。いいところをついている。

「へつへつぐ。こんなのもあるぜ。ヒソカ」

落ちたトランプを見て冷静に分析するヒソカはマジで頭がいい。そんなヒソカの名前を呼び、俺はドヤ顔で一番田の念能力を発動した。

とくに何も起こっていないように見えたが、なんらかの異変を感じたのだろう。すぐに、ヒソカは凝を使つた。

凝で見たモノに目を丸くすると、ヒソカは自分の周囲をぐるりと見回した。ヒソカの口が少し開く。聞こえねーが、おそらく感嘆したのだろう。

ヒソカを囮むように四面と天地に念の壁あり、ヒソカを閉じ込めていた。ヒソカはトランプに周をかけると、内側から念の壁を切り付ける。念の壁は切れなかつた。

ヒソカは次に、拳や足を念で強化し、念の壁を殴りつけ、蹴りつけるが、やはり何の変化もない。壁は依然、そこにある。

自分の置かれた状況に気付いたヒソカは、お手上げのポーズをとると、面白そうに何かを呟いた。それも聞こえず、これじゃ会話になんねーか、と一番田の念を解除した。

壁がなくなると、ヒソカはすぐに分析を始めた。もちろん腹話術師状態で。

「今の念の壁、中においても念は使えるから強制的に絶にするようなものじゃない。だけど、内側からはどうやっても出られなくなるのか。外側からはどうなるんだい？ 内側からは攻撃できず、外側からはやり放題、だったら恐ろしいね」

「外側からやり放題ねエ。そんな卑怯くさい技はいらないね。

「へへ。焦んなよ。説明は後だ。まずは俺の開発の成果を全部見る。三番目、次が最後だ。俺にトランプで攻撃してみ」

「次は何が出てくるんだい。楽しみだなあ」

笑いながら、再びヒソカがトランプに周をかけ、投げてきた。トランプで、と攻撃方法を指定し、ヒソカがトランプに周をかける前には既に念能力を発動していた。

俺の目の前まで来たトランプは、俺に当たることなく跳ね返る。そして、攻撃主であるヒソカを襲撃した。自分の攻撃を難なく受け止め、ヒソカはまたも分析を始めた。

「最初と同じで、キミの前に壁があつたね。でも止めるだけだった最初の壁と違つて、今のは攻撃が跳ね返る。その壁はボクが攻撃する前に出現した。さらにその前にコースケはボクにトランプで攻撃するように言つたね。そのあたりが制約に関係するのかな」

大当り。

それでは説明タイムといきましょう。

「まずはさつきの、おめーを閉じ込めたヤツ。あれは『一番田』できた念能力だ。内側での声は外側に聞こえない。外側からの声も聞こえない。内側から外側に攻撃できねーよつて、外側からも内側には攻撃はできねーよつになつてる」

「そつといえは音が聞こえなかつたつけ。ボクの声も聞こえなかつたんだね。これはまたいろいろと応用できそうな念能力だね。ボクを閉じ込めたみたいに敵を閉じ込めてもいいし、今みたいに自分たちを閉じ込めて密談にも使ってもいい」

お。気付いてたか。

ヒソカと会つて、一番初めに発動させたのが、俺が「箱」と呼んでいるこの『一番田』の念能力だ。それは今もなお継続している。

「箱」の能力はそれだけじゃない。この状態だと、存在感も絶並に希薄になるようなのだ。

ちなみにじうやつてそれがわかつたのかといつと、この状態でじつとしていたら、気配に敏感なはずの鳥やウサギが普通に寄つてきたからだ。中からうらあッと脅かしても、小動物はピクリとも反応せず、何事もなかつたかのようにそこに居続けた。「箱」を解除した途端、声を出してもいのに小動物は逃げた。

もしか、姿が「箱」中にいたら見えなくなんのか、と思つた。

だが、存在感は希薄になつても、見えなくなるわけではないらしい。「箱」の中に入たとき、ゴリラみたい生き物がじーっと俺をみていたからな。

「箱」の状態では、声は聞こえずとも外からは見えるので、唇を読まれないよう、掌で口を隠すのを継続して、俺はヒソカに開発した念能力について話した。

「俺は「箱」って呼んでるんだが、これの制約は、円の範囲内だつてこと。閉じ込める者の名前を呼ぶこと。」の二つだ」

「広めに「箱」を設定しても、名前を呼んだ者以外は入れない。逆に言えば、名前のわからぬーヤツには使えない。偽名の場合、それが「己」の名前だと認識していれば使える。」

「そんでも誓約が、ヒソカ以外にこの念能力を俺の口から話さないと。話したら使えなくなる。これは今回作った3つの念能力に共通の誓約だ」

「円の範囲内、ねえ。キミの円つて軽く10キロいくつ。範囲指定の意味ないよね」

ヒソカはやはり口は隠さず、内容と口の動きを変えて言った。

「ねえ。」の念能力は箱つて名前なの？そのままじゃないか。センスないね。ボクがつけていい？」

センスをこき下ろされ、命名権をねだられた。

「好きにじるよ」

「じゃあ、過保護な檻“モンスター・ゲージ”っていうのはどうだい

ふーん。モンスターが何を差すのか、なかなかおもしれえじゃん。

「いいぜ。今から箱改め過保護な檻“モンスター・ゲージ”だ」

「俺は自分の念で作り上げた過保護な檻“モンスター・ゲージ”を見渡しながら言う。

「どうやら聞かれちゃいなかつたようだ。“モンスター・ゲージ”が消えてねえ」

ヒソカ以外に話したら、この念能力は消えるという誓約がある。近くの念能力者たちは諜報系の念能力者ではないつーことか。

「ねえ、キミの新しい念能力は後一つあつたよね。他のはなんだい？」

田を細め、ワクワクしながらヒソカが聞いてくる。その口は相変わらず内容と口の動きが違う。

「一番田にできたのがトランプとめたやつ。俺は「ぬり壁」って呼んでる」

「ぬり壁。名前から泥臭さが漂ってるよ。キミ、ネーミングセンス本当に酷いね」

「るせえよーーとにかく！ これが一番簡単だ。制約は円の範囲内つてだけ。どこでも念能力を防ぐ念の壁を作れる」

「それはまた、円の範囲が広すぎるキミにとつてはかなり使い勝手のいい能力だね。じゃあそれは神出鬼没な壁“ファンтомプロテク

ト”にしよう。

了解もなく勝手に名前つけやがった。好きにしゃがれ。

「最後のトランプを弾き返したのが、俺が一番欲しかった念能力だ。俺は「仕返し」って呼んでる」

「キミのネーミングセンスにはもう何も言わないよ。どうせ最後はボクが命名するし」

「このヤロウ。顔は笑いながら、額に青筋が浮いたぜ。

「「仕返し」の制約は三つ。攻撃の内容がわかつていてこと。相手の念能力の発動より前に発動すること。俺の念より弱いこと」

「なるほど。だからボクにトランプで、つて攻撃方法を指定したんだね。衝撃反射“インパクトバッター”は使い勝手悪いけど、発動できれば無敵だね。キミの念より強い奴は人間にはいないもの」

「仕返し」は衝撃反射“インパクトバッター”になつたらしい。

相手が念の発動動作をするよりも前にこちらがインパクトバッターを発動していなければいけない。もし発動させても、それが俺の思っていた念能力と違つていたら、攻撃をもうに食らうことになる。

自分の念能力をわざわざ教え、今からこのように攻撃しますと宣言して攻撃してくる奴はいねえ。つまり実践じゃほとんど使えねー能力つてわけだ。

それでいい。なにせこの念能力は一つのことをなすためだけに作

つたものだ。それ以外の用途は、まあ使えりやいいかな、程度のものんだ。

「今のところはこんなもんだ」

「ふーん。防御系の能力ばかりつていうのは予想外だつたよ。幽助にしてはかなり地味だけどまあいいんじゃないかい。レイガンみたいな超攻撃的な念能力と、三種の神器“トライアングルトリック”みたいな無敵の防御があれば攻守そろつてバランスいいかも」

ファンタムプロテクト、モンスター・ゲージ、インパクトバッターの3つを合わせて三種の神器“トライアングルトリック”か。本当、名前つけんの好きだよな、コイツ。

「でも、まだキミの念総量にしてみたらたいした使用量じゃなさそうだ。キミは彼から婚約指輪がわりのプレートをもらつて揃つてるから、まだ時間あるだろ。また考えたら？」

「婚約指輪言うな。萎えるわ」

ククク、ヒソカが笑う。

「ところでおめー、プレートはどうした？」

「まだ物色中。そろそろ狩りつかな」

「なら」「やるよ」

来る途中で拾つた197番のプレートをヒソカに渡した。ヒソカのターゲットではないので、一点点分にしかならなかつたが。

「じゃあボクは後2点分狩つてくるね」

モンスター・ゲージを解くよつ言われ、解除する。途端、ヒソカに抱き着かれた。

「プレートありがと。愛してるよ、コースケ」

「へいへい。プレートの礼にしちゃ熱すぎるぜ。せよ退け」

ククク、と笑いながらヒソカは離れる。

「じゃあまた新しいのができたら教えてね」

バイバイ、と手を振つてヒソカが去つて行く。

俺が新しい念能力を教えている途中からだ。

あの野郎、興奮して殺氣をまき始めていた。さすがに俺にかかるほど節操なじじゃなかつたようだが。アイツに次会う奴は悲惨だな。

さて、と口を広げる。

ヒソカが離れていくと、絶中の試験官も離れて行くのがわかつた。ヒソカについて去つていいく気配は、試験官が3人と、気配を殺した受験生が1人。そして、おそらく「ソ」と思わしき完璧な絶の達人の受験生が1人。

「言つての忘れちまつたな。ま、いいか」

不思議な状況だぜ、と教えてやればよかつたかと思ったがやめた。だつてヒソカだし、潜んでいるのはたぶんゴンだ。

そういうや、俺のプレートがターゲットの奴つて誰なんだろう。試験官すらも撒いちゃってるから、俺のこと見つけらんねーだろうな。ま、頑張って3点分見つける。その方が早いぜ。誰かわからん俺がターゲットの奴。

俺は再び、誰もいない場所を円で探しながら駆け出した。

試験終了までの間、俺は新しい念能力を見つけるよか、絶を練習し、最終日を迎えた。

絶のレベルは、まあビミョーだ。しまいにや、モンスター・ゲージあれば絶できなくてもいいんじゃない、と諦めた。

四次試験終了（前書き）

イルミがB-L風味。苦手な方は1、2ページを見ないでください。
苦情等は受け付けません。

3ページ目（最後のページ）だけはB-Lがありませんので跳んでください。

文字数は1200字（標準）、1倍に設定した場合です。

四次試験終了

最終日は終了の合図が聞こえなことまことに、「ホールの近くに来た。

円を使っていたからわかつちゃいたのだ。コイツがいるってことは。

いすれは会わなきやならねーんだよ。無視しちゃ通れない道なんだから、早いとこ会つておこうじゃねーか、と思つたのだ。ここにいるとわかつちゃいたんだが、さすがにビビった。

土中から手が伸び、足首を捕まれる。

「酷いよコースケ」

「おめーはホラーかよ!」

土中からズルズル這い出て現れたのは、長い黒髪に大きな猫みたいな目をしたイルミだつた。

「なんちゅーとっから出でくんだ」

「コースケ、オレのこと避けただる。探してたのに
かつ飛ばし専門キヤツチボール再び。しかもボールはトマトだ。

「避けてたつづーか、まあそりなんだが、おめー、何ではじめっからプレートくれたんだよ」

「ヒソカに聞いたんだけど、コースケ、ヒソカに愛を囁いて抱かれ
たんだって？ それ、旦那としては許せないんだけど」

「だッ！？ んなわけあっかッ！！」

「まあヒソカの嘘だらうと思つてたけど

「……わかつてたんならよオ」

「プレートは贈り物。妻が欲しい物は何でもあげないと」

出たよ、時間差アタック。しかも、返事がまともであるとは限らないつつー。どうすべえ、嫁から妻に嫌なレベルアップしちまつたぞ。連れ添つてウン年みてーな。

「それに、コースケが相手じゃとられなうようにする方が面倒だしね。だつたらあげた方がいいだろ」

それが本当の理由だらう。つーかそれならはじめから妻なんでおぞましい単語使わずにそう言えつつーんだよ。そもそもあの「カタカタカタカタ」のときにそう説明しやがれ。いらん恐怖を覚えちまつたじやねーか。婚約指輪とか。

「おめーからビーナスでプレートを奪うか、いろんなパターン考
えてたのに逃げやがつて」

精神的疲労の代償とハツド当たりを兼ねた嫌がらせをしてやるうと思つてたのに。

といつのをビーナスで替換したらそつなんのか。イルミがストレートに

トマトを投げてきた。

「オレといちやつきたかつたんだ。ユースケかわいいね」

全身、鳥肌立つた。

なぜそつなるー??

イルミが一步近寄る。俺は一步引く。

「ヒソカの話だと随分仲良くなつたみたいだつたから、ちょっと嫉妬してしまつたよ。でも相変わらずユースケかわいいし、オレのこと好きみたいだからいや」

鳥肌から鳥肌が出た。なんだ。今のは幻聴か? もう一度聞き返してえが、宇宙人相手じや何だか聞きたくなー異星からのメッセージを聞かされそうだ。

スルーしようとしたら一步近寄られ、一步引くを繰り返していたら、イルミが首を傾げた。

「何で後ろ下がつてるの?」

さあおいで、とばかりに両手を広げられた。誰か! この宇宙人なんとかしてくれ!

「俺はおめーみてエな宇宙人は好きじやねーんだよー」

他を当たれ!

必死で本音を吐いてるつづーのに宇宙人は聞きやしねー。

「あ。それ、ツンデレってヤツだる。ミルキがモエって言つてた。でもそれはオムライスにケチャップで「スキ」って書きながらやらないと駄目らしいよ」

誰か知らんが、宇宙人に最もいらねー知識くれやがつたミルキ。全力で死ね。

見知らぬ相手に殺意を漲らせていると、宇宙人が促した。

「じゃあトマトどうに行こいつか」

「あ? なんでトマト?」

「だつてケチャップがなくちゃ駄目だろ」

なんでコイツはケチャップをトマトから作るの? してるんだ。つーか、何のためのケチャップだ!?

駄目だ。コイツといふと何かが減つていぐ。再起不能になる前にそうだ逃げよう。戦っちゃいけね。そうじよう。

追い詰められた俺を助けるかのよつにサイレンが鳴り響き、放送が流れた。

『受験生に告ぐ。ただ今から1時間を帰還時間とする。ゴールまでブレーントを持って戻つて来られたら四次試験合格となる。1秒でも遅れると失格になるので、速やかに戻るよう』

あのパイナップルみたいな頭のリップーの声がした。ナイス!

「ほれ、イルミ。」「一ル戻るぜ。早く変装しろよ」

助かつた、とイルミに声をかけると、宇宙人が小さく呟いた。

「オレたちのイチャイチャを邪魔するなんて。あの試験官、殺そうか」

いや待てや。俺「たち」って誰と誰を指してんだ。まさか間違つてもストーカーとの被害者みたいなこの状況の俺とイルミじゃねーよな。

イルミは、俺を瞬きしないデカイ猫目で見つめながらブツブツ言い、頭に針を刺していく。美形面がゾンビみたいに変形し、終わる頃には原形はどこにもなかつた。頭のてっぺんにトサ力のある、角ばつた面長のオッサンになつた。そんで、カタカタカタカタとしか話せなくなつた。と思ひきや。

「じゃあ行こ」

普通に話しゃがつた。

「ちょ待て。おめー、カタカタしか言えなかつたんじゃねーの」

「手、つなげ」

「出たよマートー！俺の質問どいいつた？」

「つながねーよー」

「ゴースケは照れ屋なんだね」

何だこれ。異星の言葉だからこんな妙な単語が聞こえるのか。誰かこの星の言葉に翻訳してくれよ。

「もうお前カタカタだけ言つてろよ」

「この格好で話すの結構痛いんだよ」

これがカタカタしか話せなかつた理由か。時間差の返答にため息が出る。

「じゃ、もう話すな」

「心配してくれるんだ。ゴースケ優しいね」

「どうしてそうなる！？」

噛み合はない、余話のかつ飛ばしトマトキヤツチボールをしながら俺たちは「ゴールに戻った。

「ゴールと同時に、イルミもといギタラクルがすーっと離れて行つた。まるで同じ方向から偶然来ただけのような自然さだった。

離れて行つた理由は、キルアが片手を挙げて俺に近づいて来たからだらう。同じように俺も片手を挙げてキルアに応えながら思う。

イルミよ。弟だからって避けんでも問題ねーぞ。異様な風体のオッサンがまさか兄貴だとは思わんから。

「ゴールには、ゴンもキルアもクラピカもレオリオもいた。当然のようにヒソカも。」ゴールにいた受験生は、俺を含めて10人だった。随分減ったな。

キルアが来る前に、ゴールの入り口で試験官に集めたプレートを出すように指示された。そこに置かれた台に並べられるプレート。見れば、44番と405番が一緒に並んでいた。

2枚で6点ついていたあ、両方に3点の価値があるついていたな。それはつまり、自分のプレートとターゲットのプレートつてことだ。ヒソカのターゲットはゴンのプレート、405番じゃない。だから、これはゴンの戦果つてわけだ。

へえ。やつたな「ゴン。やっぱあの隠れてた絶の達人はゴンだつたのかと確信を強める。

プレートを試験官に渡し終えたら、傍まで来たキルアと会話する前に、キルアの向こう側にいたゴンに近寄った。やつたな、とあの変態からプレートをもぎとつたという成功を喜ぼうと思つたのだ。

「よ、ゴン！」

「あ、コースケ。……「ゴメン！」

突然謝られて、突然走つて逃げられた。どういひつた？

俺は呆然と立ち尽くした。

その肩を、ゴンの傍にいたレオリオにポンと叩かれる。

「『ゴン』があんなに避けるとは。お前何やつたんだ？」

「あいつ、オレたちが暗殺一家だつて知つたつて平然としているよつて奴だぜ」

何やつたらああなんの、と横からキルアも面白やつて笑ひ。

「何かするもなにも、俺がゴンと顔を合わせるのは一週間ぶりだぜ。何をするもつーんだ」

その間、『ゴン』に会つたことは一度もねーつてのこ、とんだ濡れ衣だ。

「ゴンの態度から察するで、コースケが何かをしたとこより、コースケに後ろめたいという感じがした。つまり、コースケではなく、ゴンがコースケに何かをしたのだ」

ゴンの背後にいたクラピカが、冷静にそう分析した。

「ゴンが俺に対し、後ろめたく思ひ。全く心当たりねーや。

「ま、その内また戻るだろ」

「ゴンのことは時が解決してくれるとした。

「の時に追いかけて吐かせておけばよかつたんだ。後日、ゴンがとんでもねー誤解をしていたことに悶絶することになる。

最終試験開始（前書き）

「つらすらと臭あり。

苦手な方は見ないでください。

最終試験開始

最終試験会場へは、飛行船で移動するらしい。その間にネテロ会長と面談が行われることになった。

プレートの番号順に、一人ずつ第一応接室に呼ばれる。

「まあ座りなされ」

ツルツラゲのくせにポニー・テールつづり矛盾した髪型に、眉毛、鼻下のヒゲ、顎ヒゲが異常に長い老人がネテロ会長だ。テーブルを挟んだ向こう側でちょこんとあぐらをかけて座り、こちら側の座布団を勧められた。ドスンと腰を下ろす。

「茶は出ねーの?」

「ほう。ゴースケはジャポン出身なのかの?」

「ま、そんなど!」。畳に座布団があんなり、茶と茶菓子は欲しいね

「ほつほ。なに、そんなに時間がかかるないといっだけじゃよ。茶はまた今度飲みにおいで」

さて、とネテロ会長が質問を始めた。

「まず、なぜハンターになりたいのかな?」

ハンターになりたい動機ねえ。

「正直なりたいわけじゃねー。なぜか試験会場について、成り行きでここにいるだけだからな」

「まあそりゃひつな。願書出してないしの」

「願書？ そんなもん出す必要あつたのか？」

キヨトンと皿を瞬かせる。ネテロ会長は気にした様子もなく、筆で光る額をかいた。

「ならば質問を変えよう。もしハンターになつたらどうする？」

「ハンターになつてやる」とはわからんねーが、試験が終わつてやることは決まつてゐる。クモつづー盜賊を潰す

クラピカについて行くと決めたからな。ホントはあの念能力を手にしたわけだから、魔界に帰ろうと思えば帰れそうなんだが、クラピカについて行くから帰るのは後回しだ。

「ふむ。クモ、幻影旅団か。何故じや？」

「俺にや理由はねー。ダチが潰すつづーから勝手についてくだけだ。相手は人数が多いみてえだからな」

せつかく出会つたダチなんだ。放つとけねーだろ。

ネテロ会長は、そーか、と相槌を打つと次の質問をした。

「受験生の中で注目している者と、戦いたくない者は誰じや？」

注目しているのと、戦いたくないの、ねえ。考えるまでもなく、頭にパツと浮かんだ注目している奴を答えた。

「「ハ」だ。405番。あつや大物になるぜー。」

「これまでのゴンの言動を思ひと、実に先が楽しみになる。……今は避けられてるナビな。

「ほう。では戦いたくない者は？」

「いねー。誰と戦つてもいいぜ」

ヒソカ（変態）やイルミ（宇宙人）と戦うともや、これまでに始めーから受けた精神疲労を全部ぶつけてやるぜ。

ネテロ会长は筆でサラサラと何かを書き込んでいた。

「よし。わう帰つていいぞ」

皿を細めると邊に出された。

部屋の外に出て、笑ってしまった。

食えねーじじいだぜ。隙だらけだ。なのに、戦意そのものが起きないよといふと、幻海のばーさんを対面させたら面白かった

ネテロのじーさんと、幻海のばーさんを対面させたら面白かった らつた。「ヤーヤーながら俺は戻った。

面白い結果だつたのう。

1番、コースケはゴンを注目し、戦いたくない者はいない。

44番、ヒソカはコースケ、キルアを注目し、ゴンと戦いたくない。

53番、ポックルはクラピカに注目し、ヒソカと戦いたくない。

99番、キルアはゴンを注目し、ポックルと戦いたくない。

191番、ボドロはヒソカを注目し、キルア、ゴンと戦いたくない。298番、ハンゾーはヒソカとコースケを注目し、同時に戦いたくない。

301番、ギタラクルはキルアに注目し、コースケとヒソカとは戦いたくない。

403番、レオリオはゴンに注目し、同時にゴンと戦いたくない。

404番、クラピカはゴンとヒソカに注目し、戦いたくない者はいない。

405番、ゴンはヒソカ、コースケを注目し、キルア、クラピカ、レオリオ、コースケとは戦いたくない。

けついつ固まつたものじや。

面談を参考に名前を書き入れた。

「よし」

筆を置ぐ。そこにはトーナメント表ができていた。

「さて、どうなるかのう」

最終試験は、委員会が運営しているホテルで行われる。

バレー・ボールコートが4面くらいとれそうな広くて天井の高い部屋に呼ばれた。一見体育館風だが、部屋の床は30センチ四方の板が敷き詰められている。小学校3時の教室がこんなんだつたな。

緊張した面持ちの者、平然とした者、それぞれが、試験内容が発表されるのを待った。

ネテロ会長がやつて来た。発表された試験内容は、逆トーナメントという一風変わったものだつた。一度勝つたら合格、負けたら上に上がる。一勝もできなかつた奴が不合格だ。武器オッケー、反則なし。勝敗は、どちらかがまいったと言つまで。殺しちゃいけねー。瞬殺はねーけど、それって、実力が違いすぎる奴と戦つたら拷問

みたくならねーか？ 単純に見えて、実はエグイ。 蔵馬が得意だよな、こういうの。

「トーナメント表は、これまでの成績を参考に作成した」

そう断りを入れ、ネテロ会長の指示により、模造紙サイズのトーナメント表が広げられた。

第一試合、ユースケvsゴン。

俺とゴンが一番試合数が多い。へえ。俺、成績よかつたんか。

続いて試合数が多いのがツルッパゲもといハンゾー、ヒソカ、クラピカとなる。

だが、単純な成績だけじゃないようだ。それならゴンより、問題ありすぎだがヒソカやイルミのが上にくるだろ？。

変態と宇宙人はその結果を気にしちゃいないが、キルアはそうじやなかつた。

「これ、どういう採点基準なのか教えてよ」

「ゴンより下なんて馬鹿な、という負けず嫌いのジョラシービンビンにキルアがネテロ会長へ食いかつた。

ネテロ会長の説明によると、審査は身体能力値、精神能力値、印象値の3つで行われたようだ。その中で最も重要なのが印象値で、これはハンターとしての資質評価になる。

それを聞き、キルアは黙つた。

成績はそこまで高くないだろ?「ゴンがトップにいる。つまり、ゴンのハンターとしての資質はこの中で一番だと判断されたのだろ?」

「では、第一試合を始める。ゴースケ、ゴン、前へ」
「ああゴンはハンターになりたいって言っていたし、ゴンがハンターに向いていると判断されるのは嬉しいんだが。俺も？ ハンターってのは、俺みたいな魔族でもいいのか？ どうこうつけちや。

審判は、黒服サングラスのオッサン試験官がやるらしい。俺と『
ンが部屋の真ん中に向かう。

ゴンは相変わらず目を合わせない。なんなんだよ。そろそろキレつぞコラ。 部屋の真ん中につき、向かい合ったゴンに俺は話しかけた。

「ゴン、顔上げろよ」

おずおずと「」の顔が上がる。

「おめー、ずっと俺ん」と避けてつけど、いい加減にしやが。言いたいことがあんならはつあり言え。タマあんただろが」

ゴンは気まずそうに俺を見て、次いでヒソカを見た。あ？ ヒソ
カ？

「ゴンは言つた。

「オレ、見ちゃつたんだ

何を、と聞こいつとして、ふと聞いたら後悔しそうな不安を覚えた。

「ちょ

待て。

「ごめん、オレ、ユースケとヒソカが恋人同士って知らなくて、ヒソカからプレートとっちゃった。ごめんなさい！」

ゴンは一気にそう言い、ガバッと頭を下げた。間に合わんかったか……。

一瞬の間。叫び声が響いた。

「ぎょええええッ！ ユースケ、お前そういう趣味だったのか！？

レオリオが目を剥いた。

「うわあ。同性愛なのはまあいいけど、相手がヒソカってのはどうかと思うよ」

キルアが面白そうに口元を緩め、可哀相なイキモノを見る眼差しを俺に向ける。隣の家の奥さんの噂話をするオバハンの眼だぜコノヤロー。

「二人ともやめないか。例えユースケが薄気味悪い変態が好みで獵奇的な性嗜好であろうと、それとユースケの人格にはなんら関係ないだろう」

いや待て。そんな趣味嗜好の奴アゼつて一人格にも影響あんべ。たとえ関係なくともそれ知つたらマジ引くだろ。つーかクラピカ、お前が一番エグイよ。ひでーよ。

そこでニヤニヤと変態がいらんことを言い放つ。

「いやいや、ばれちゃつたネ」

「肯定すんな！ 嘘だ嘘！ ありえねーから！」

見渡した周囲は、誰ひとり信じちゃいなかつた。

「カタ……カタカタカタ」

必死で否定してんのに、宇宙人はヒソカと俺に殺氣を向けてくる。妻に浮気された夫みたいな態度はやめれ。何だよこの状況。ひでー疲労のまま、ゴンに問い掛けた。

「なあ、ゴン。何だつておめーはそんな身の毛がよだつ勘違いしちまつたんだ？」

俺が否定しているのに、ゴンはまだ信じていないらしい。もじもじと言葉を返してきた。

「四次試験中、オレ、気配を消してヒソカをずっと追つてたんだ。そしたら三日目にコースケ來たでしょ。そのとき、コースケは後ろ向いてたからわからなかつたんだけど、ヒソカの口だけ見えたんだ。唇を読んだら」

先が見えた。ああ、やっぱあの完璧な絶はお前だったのか。しかも脣読むなんて芸当までできたのね。それってアレだろ。モンスター・ケージの中で、ヒソカが腹話術やつてたアレ。口の動きと内容が違うアレ。声が、遅れて、聞こえてくるよ、なアレだろ。

「ユースケ愛してるよ、キミもかい、相思相愛だね、って。その後ハグしてたし」

血管キレた。

「ヒソカアツ！ めーぶつ殺ス！！」

「本当かい？ 痛いんだろうなあ。ああ滾っちゃうよ」

変態の膨張した股間を見て我に返った。やべえ。これじゃそういうプレイだと思われる。へへ……、皆の視線が冷てえや。

ヒソカを無視し、ゴンに視線を戻した。

「とにかく。俺とヒソカはそういう関係じゃねーよ。あえて言うなら利害の一致した関係だ。そんなことよか、ヒソカからプレート取つたんだろ。やつたじやねーか」

なんとか話を戻すと、ゴンはちらりと俺の顔をうががい、やつと俺が本心で言つていると納得したようだ。

「うん。その後はすつじくオレ情けなかつたんだけど、プレートを取つたときは会心の一撃だつたんだ」

「そつか。さすがゴン」

ニッと笑うと、ゴンも同じ笑いを返した。

会場の気配はとんでもねー疑惑のせいで未だギスギスしてやがるが、気にしねー。ハンター試験が終わったらここにいるだいたいの奴らとは無関係だから気にしねー。

「よし、戦うか！」

「うんー。」

ゴンの明るい声だけが癒しだ。

幽助バゲン（前書き）

B-L臭あり。

苦手な方は見ないでください。

幽助バトン

さて、こざわ戦うとなると、戦い方に困る。「ゴンは俺と格闘する気満々みてえだが、下手に組み合つと殺しちまつもんな。

つむ、と考え、思い浮かんだ。

俺達の間に立ち、審判役をする黒服の試験官に話しかける。

「なあ、試合形式は何でもいいのか?」

「はい。対戦者に一任いたします」

サングラスで表情のわからない試験官がそう答えた。そつか。ならアレでいい。

「ゴン、試合方法は俺が決めるぜ」

キョトンとした後、ゴンが頷く。

体格や腕力に差があつてもある程度は戦える方法。

「試合方法は、手押し相撲だ」

「手押しズモウ? それって何なの?」

ゴンは知らないらしく、不思議そうに首を傾げた。他の受験生や試験官たちも知らないらしい。唯一、ハンゾーだけは知識があつたのか、ほう、と反応した。

「田間は一見に如かず。俺はゴンにその場に立つて動かないよう指示を出した。

「足は肩幅に開く。んで俺もおめーも腕が互いの体に届く位置で立つ。相手を腕で押して、その場から足が少しでも動いた方が負け。そんだけ」

「わかった！ おもしろそう！」

簡単なルールに、ゴンが眼をキラキラさせる。でもな、ゴン。簡単なんだが、単純じゃねーんだぜ。

「試しだせりよ！」

ゴンと向かい合ひ、足を開いて立つ。周囲は興味深そうに俺たちを見て、試験官はルールを見極めようと真剣な眼差しを向けていた。

「はじめ、の合図で腕や体を押す」

手を伸ばしたら、ゴンも俺に手を伸ばし、手の平がぶつかり、指が組み合ひ。

「いのまま押してもいいし

「わわわ」

ゴンが後ろに倒れそうになるが、絶妙なバランス感覚で元に戻る。ふう、とゴンは息を吐ぐが、間を開けず次の攻撃を示した。

「押すだけじゃねーぞ。次、押してみ

ゴンに向手を向け、押すよつ告げるとい、頷いたゴンが俺の手を思い切り押してきた。

にやりと笑い、俺は手を後ろに引いた。

「ええええッ！？」

勢いが良すぎて止まれなかつたゴンが、俺に倒れてくる。その足は大きく一步前進だ。

「こんな風にスカシもありだ。ルールわかつたか？」

尋ねると、ゴンは真剣な顔で頷いた。単純に押すだけのゲームじゃないと気付いたようだ。

「よし。じゃあ審判頼むぜ」

見ていた黒服の試験官に要求すると、彼は一つ頷いて俺とゴンの横に立ち、質問してきた。

「試合は一回勝負でよろしこですか？」

「いや、ゴンは初めてだし、3回勝負で、1回でもゴンが勝つたらゴンの勝ち。でどうだ？」

ゴンに向けて問い合わせると、でも、と口を開く。

「それじゃオレがるくない？」

はは。こいつめ、俺から2本も取れる氣でいんのかよ。こいつと笑つて言つてやつた。

「するくねーよ。言つとくが、10回やつても1本も取れない可能性のが高えべ」

「う。そんなに?」

「おひる」

がくつと落ち込みながら頷ぐゴン。ま、おめーは5年後の逸材だからな。今ならそんなもんだ。

本当は何回勝負でもいいんだが、こいつはあえて3回勝負だ。たつた3回だが、ゴンならその中で何らかの可能性を見せん。そつ期待させぬものがある。

「では手押しズモウ3本勝負、ゴン選手は1勝で勝ち、こいつとでよいしこでしょつか」

審判の確認に一人で頷いた。

「それでは、レディ」

審判の合図で向かい合つ。自然な構えをとる。数瞬の間。合図が出る。

「ファイツ」

すぐに組み合わず、お互いに手を出したり、出された手を弾いたり、牽制が続く。一トコリで仕掛けるか。

スウツと息を吸う。ゴンが身構えた。直後。

「ウラアアアアツ」

「氣合いで叫びとどきこ、ゴンを押す。

という仕種をした。

押す仕種のみで実際には押していない。押す直前で止まつた。だが。

「やつと笑ひ。

「まずは俺の一勝」

はつとあぬゴン。

氣合いで圧されたゴンの足は、自然と一步後ろに下がっていたのだ。ゴンの額を、冷や汗しきものが流れた。

「……さわられてもいないのに……」

悔しそうに拳を握るゴン。まあ一コリは修羅場の差つづーもんだな。

場外からはゴンに向けて声援が送られる。

「気になんないゴンー 今は俺もちびつた!」

レオリオ。おめー、そりゃかなりの問題発言だ。おめーのパンツ濡れてんのかい。声援のつもりかもしけねーが、言われたゴンが落ち込んでるし。レオリオと一緒にあ。てめ、そりゃどうこうした！？ なんてやり取りがおかしい。

「うわあ大人げないなー、コースケ。やっぱ見た目と中身って連動してんのかな」

にやにやと笑いながらキルアがコメントする。その無神経な失礼発言。あのガキヤ、やっぱあの宇宙人の弟だわ。こりゃあとで一発、身の程つづーものを思い知らせてやらんとな。

「1対0、コースケ選手！」

審判が判定を叫んだ。

「くつセー」

「ゴンは悔しそうに呻くと、何かを思い浮かんだのか、よしつ、と氣合いを入れて構えた。俺も同様に構える。

「さて、どんな作戦だ？」

「教えない！」

「ケチ」

と言いつつ、ま、そら教えるわきやないよなと思つ。

再び緊張感が高まり、審判がコールを始めた。

「それでは、2戦目」

ゴンから感じる緊張感が最高に高まる。そして。

「レディ、ファイツ」

合図と同時にゴンが突っ込んできた。へえ。全力戦法か。

「そーいうの、大好きだぜ」

ドン、とゴンが俺の胸を押した。腕で防いだりなんかしない。ノーガードだ。

ゴンの力は、普通の人間ならどんな野郎でも、それこそ関取でも動くような押しの一手だった。ガキのくせになんつー力してやがんだ。が、相手は俺だ。

「……ぐつ……うつ」

ゴンの額に、腕に、脚に、青筋がくつきり浮き出る。全身全霊の力を込めているのがわかる伸び。

でも、その程度じゃ俺は動かねーぞ。いつちゃん最初に死んだ頃の俺だつたら吹っ飛んでるだろ？が。ま、力じや勝てねーってのを教えてやつか。

ゴンに押されるまま、ググッと体をスローモーションで後ろに反らしていく。押されて曲がっているのではない、妙な俺の動きを疑

間に感じたのだろうゴンが、ちらりと俺を見た。視線が合い、にやりと笑いかける。『ちょっと田を見張るゴン。

だが、ゴンは勢いを緩めることなく俺を押した。俺の体は後ろに反れ続け、もはやブリッジの頭がついていないうな体勢だ。その上にゴンが覆いかぶさっている状態になつていて。

ゴンは変わらず俺を上から押している。だが、俺はブリッジの状態になつていて、先程までは少しずつ後ろに反れていたものが、その体勢のままひたりとも動かなくなつた。

ゴンの額から、ぽたりと汗が俺の胸に落ちた。

「……ヤロー、膝の力だけでゴンの力を受けてやがる」

「柔軟、バランス、足腰の強さ、どれをとってもゴンより上だ。力ではゴンに勝ち田はない。……そう体で示していいのだろう」

レオリオの呴きにクラピカがそう分析した。ま、そーいうこいつた。ちなみに俺の柔軟性は、魔族の親父の部下、北神に鍛えられた。柔軟の壁を軽く越えた、あの餅みてえなヤローだ。さすがに餅にやなれなかつたが、かなり柔らかくなるよう鍛えられた。

「……あんな体勢になつても堪えられるとかありえねえよ。ユースケ、マジ人間じゃないよな。ていうかマジ大人気ないよな」

呆れたように呴くキルア。しつかり俺の耳に届いている。

キルア、てめーあとでかます。数々の不良どもを葬り去つた必殺技、デコピンかましたる。

さて。俺の上で汗みずくになつて奮闘している「ン」。その胸に片手をやると、ひょいと放り投げた。柔道の巴投げの感じだ。

「ぐぴゃ」

途中で体勢を変えることなく、そのままゴンは床に落ちた。おー。

「2戦目、コースケ選手！」

審判が俺の勝利を告げた。

1回戦の相手は、コースケだった。勝負の方法は手押しズモウつてやつ。コースケからルールを聞くとおもしろそうだったから賛成した。

でも、おもしろいけど結構複雑だ。相手のタイミングをずらしていくのが難しい。何せ相手がコースケなんだもん。

1戦目はコースケの気迫に負けた。やっぱりコースケはすごい。一瞬だけだったけど、ヒソカの殺氣より怖かった。気づいたら後ずさりしてた。超くやしい！

2戦目は力で真っ向勝負を仕掛けてみた。力には結構自信あるか

ら。ていうか全力で押さないとコースケには勝てない。でも全力で押したときにもすかされたら確実にアウトだよな。

なら、すかされない部分、胸を押したらい。

胸を狙つて押したら、コースケはノーガードだった。くそ、舐められてるな。

でも舐めるだけのことはある。どんなに全力で押してもコースケはびくともしない。それどころか、脚だけの力でオレの全力をいなされた。あっさり投げ飛ばされておしまい。

しかも片手だつたし。綿でも投げるかのような感じだった。魔王つてすごい。

次が最後だ。真っ向から力の勝負は勝ち目がない。

どうしたらしい？

どうしたら勝てる？

どうしたらタイミングをずらせる？

どうしたら足をずらせる？

頭を必死で回転させていたら、コースケが言った。

「このままじゃあっさり終わっちゃうな。よし。んじゃ俺は次、片足だけでやる。しかも爪先立ちだ」

それは、受けちゃいけない。そう思った。

「やだ」

片足、爪先立ちの勝負を投げ掛けたら、ゴンが拒否した。てめー。

「んな」と言つたつてよ、このままじやおめービツヤつたつてまと
もな勝負にならねーぞ」

「でもやだ」

仕方ねえガキだな。ま、こんな場面じや俺もそう言つが。
「おい、ゴン！ 意地張つてる場合じやねえぞ！ セつかハンド
くれるつつてんだからもうつとけ！」

レオリオがゴンにアドバイスする。でもゴンは首を縦に振らなか
つた。

ゴンはまつすぐに俺を見て、静かに告げた。

「親父に会いに行くんだ。自分の力で何もできずに、ここでユース

ケにもうがままにハンテもらつて勝つて、それじゃハンターにな
れても、オレは親父に一生会えない気がする。ううん、会いに行け
ない」

ふん。いい田じやねーか。心に切り込む田だ。濁った心でも、こ
の田に入り込まれたら清浄化されちまう。こんな田をもつている奴
はもうそうこねー。」この田は武器だな。

「ふーん。片足、爪先立ちの俺に簡単に勝てると思つてたがたり自
信家だよな、おめー」

ガン、とショックを受けた gon。

「え。まだそんなに力の差あるの?」

「おひよ。俺ア爪の先だけでもおめーに軽く勝てるぜ」

「う」

「ハンテ受け取つとけよ」

「やだ! いらぬ。自分でなんとかするー。」

頑として拒否する gon。それなりそれでいいぜ。

「ま、いつか。そんじゃ、3戦田こへせ」

「うんー。」

再び、切れた緊張感が高まり出した。

「それでは3戦目、レディ」

「ゴンの戦い、力強い光が宿る。何やら作戦を見つけたか。

「ファイツ！」

合図と同時に、またしてもゴンは突っ込んできた。おーおいおい、
わっさと一緒じゃねーか。

先程と同じようにノーガードの俺の胸に手をつべ。と思ったら、
ゴンが視界から消えた。

すぐにしゃがんだのだと気づいたが、そのときには、ゴンは次の
行動に出でていた。

「ゴッ

硬い音がした。何があつたかは全て見ていたのでわかっている。
防ごうと思えば防げたがしなかった。これは、ゴンの作戦勝ちだ。

「……足、ずれたよね」

「ゴンが沸き上がる喜色のままに戦つ。

俺の片足の下にあつた30センチ四方の床板が、粉々に割れてい
た。

あの一瞬に、ゴンは瓦割りの戦領で、俺の足の下にあつた床板を
一枚割つたのだ。

足は動いちゃいないが、床 자체が移動した。

「おひ。 すれたな。 僕の負けだ」

まずは2戦目とのきと同じように全力で押すと見せかけ、タイミングをずらした。

さりに、足をずらせねーなら、床をずらしまえつーとんでもねー発想の一発だ。

はは。 いつや一本取られたわ。

「第一回戦勝者、『ゴン選手!』

判定に、オオオオオッ、と歓声が上がった。

「勝った! ゴンが勝ちやがった!」

「つむ。 めぢやくぢやとこえばそつだが、常人にはできない発想だ。 実に『ゴンらしご』」

レオリオが万歳三唱とかいうウザい真似をしやがり、クラピカが口許を緩める。何はどうあれ。

「ゴン、ハンターおめでとう」

「ありがとー!」

「ありがとー!」

さらに「ゴン」は続けた。俺の耳元に口を寄せ、小さく、それはそれは申し訳なさそうに囁いた。

「……オレ、ヒソカに謝った方がいいかな？」

それは何か。俺とヒソカの仲がアレだから勝つちまって申し訳ねーとかなんだとかつーありえねー妄想か。

無言で肘鉄を脳天に落とした。

「へふっ」

床に転がりピクピクしている「ゴン」。よし、完全に沈黙させた。もうおめーはしゃべんなや。

「「ゴン」？」

「じつかりしる、ゴン！」

「ひでえ！ 負けたからってユースケ、マジで大人気ないよ！」

レオリオたちが氣を失った「ゴン」に駆け寄り、口々に「ゴン」を心配する。そんでキルア。

「な、何だよ、ユースケ」

「おめーはさつきからよ、大人気ねーだのなんだのど。つーわけでも

ずんずん近寄る俺に、キルアが怯えた様子で後ずさる。

泣かす。泣け」

「え、あ、え？」

額に一撃。

「イ……ツツツ」

『ゴーピンの一撃で後ろに倒れ、床にゴロゴロと転がつて涙ぐみながら悶絶するキルア。ふん、頭がもげねー程度に手加減はしてやつたぜ。』

「ヒィ！ 大丈夫かキルア！」

「しつかりしる、傷は浅いはずだ！」

「もげるッ、頭もげるッ！ オレ頭ある？」

「おう！ ある！ ちゃんとあるぜ！ しつかりしろオ！」

はん。こんなもんぐるつせー奴らだぜ。

それにしても。

キルアに『ゴーピン』したときに気づいた。キルアの頭にあるアレは何だ？

キルアは自分のことなのに気付いちやいねーみてえだが、アレの形状から犯人はわかる。何のためなのかはわからぬーが。

俺にや関係ねーか、と向きを変えて壁側に向かうと、ふとイルミ、もといギタラクルから強い視線を感じた。何か言いたいらしい。何だよ、弟やつちまつたから文句でもあるってか。

ギタラクルが指先を上げる。普通の奴が行きなりあんな仕草したら電波を疑われるが、奴は見た目が既に電波だからなんの問題もない。

ギタラクルの指先から、念による文字が書かれていく。読めねつの。本人には話しがけのなと言われているので、ヒソカに近寄り聞いてみる。アレ、なんて書いてあんだ、と。

ヒソカはニッコリ笑つて答えた。

「奥さんと弟の触れ合いつていいね、だつてさ」

奥さん……！？

また、進化した。頭痛エ。聞くんじやなかつた。

「相変わらず彼つてば電波だよね。だいたいキミはボクのお

「黙つとけ」

ヒソカの顔面を掴んで後頭部を壁に打ち付けた。殺氣が飛んで来るのはギタラクルか。いやついてねーよ。つか悦ぶなヒソカ。周囲がドン引きすつだる。

氣絶したゴンと悶絶のキルアは医務室に、様々な感情を会場に残し、一回戦は終わった。

幽助 VS ハンゾー（前書き）

B-L臭がかあります。苦手な方は見ないでください。

幽助 VS ハンター

ハンターになるための最終試験で、オレの初戦の相手はゴンという少年に手押し相撲で負けたユースケという、こちらも少年だ。おそらく、自分より3つか4つ年下だろう。

先程の第一試合、ゴンは見事という他ない戦いを見せた。諦めない強靭な精神と、窮地を脱する発想。もう少し年月を重ねたら、身体能力も伸びて間違いなく大化けするだろ？

それより、ゴンと戦ったこのユースケという少年は一体何なんだ。

初めの、ゴンを気圧したあの気迫。任務で数々の忍者や侍と死闘をしてきたが、あんな強烈で戦慄すら覚える気迫を受けたことは一度もない。

いや、かつて里長が敵対する実力伯仲の忍と戦った際、命を賭した最期に一度だけ見たことがあったか。それほどのものを、たかだか10数年生きただけの子供にできるなど信じ難かった。

ゴンの全力の体当たりを完全に防ぎきった体の柔軟さ、強靭さも信じ難かった。ゴンのあの体当たりは、かなりの強さだったと離れていてもわかった。まともに食らったら、オレのよつな上忍でさえ足を動かされるだろ？

氣迫もす「」いし体の強靭さと柔軟性もす「」こんだが、そんなことより何より絶叫したいことがある。

あのヒソカの恋人だと！？

これが一番異常だらう！

あの変態快楽殺人狂とどうやらヤバいプレイで愉しみでるらしく、しかもコースケの方が女お…、いやサディス…ゴホン、虐めちゃつてる方らしい。

あのヒソカを！

そういうえば三次試験じゃ見るからにヤバいギタラクルつてオッサンとも仲よくしてやがつた。どんだけヤバいんだあのガキ！

向かい合いつと態度はでけHがあざけない顔した少年なのに、なんて恐ろしい奴だ。「イツに危害加えたら背後が怖すぎるじゃねHか。試合自体の勝算はある。体幹の強さや尋常じやない氣迫の持ち主ではあれど、コースケは無手だ。武器を使つた戦いならオレの方が強い。ここは怪我をさせずになんとか降伏してもらおう。

「」のとき、オレは奴の強さを見誤っていた。まだ、奴は実力のかげらも出しきやいなかつたのに。

オレは口を開いた。

2回戦は、負け上がった俺とツルッパゲ忍者ハンゾーとの試合になつた。名前を呼ばれ、俺とハンゾーが向き合つ。

審判が開始をコールする前、試合方法を決する前に、ハンゾーは俺に言つた。

「オレは忍者だ」

瞬きをした。あ？ 見たまんまじやねーか。その格好でサラリー マンつて言われる方が驚きだぜ。

「忍法という特殊技術を身につけるため、生まれたときから様々な厳しい訓練を課されてきた。
以来18年、休むことなく肉体を鍛え、技を磨いてきた。人を殺した数も相当になる」

ハンゾーは片手のみの逆立ちから、人差し指一本の逆立ちに変えて見せた。

厳しい訓練、ねえ。そういうやその指先一本で逆立ちつてのは昔、ばーさんの修行でやつたな。

針の先に指一本で逆立ちして何日もそのまままでよー。最終的にはあのまんま眠れるようになったな。

「んで。 もうじーんだ？」

あやか逆立ちを血煙したいだけじゃねーよな。 そいつ聞いて問ひ。

「降参してくれ」

「やだ」

即答した。いや、その思考の流れがわからねーよ。

ハンゾーはため息をついて起き上がると、腕に沿って服の中に隠していた刀をスッと引き出した。

「わかりやすへ皿おつ。 オレはこのように全身に武器を隠し持つて
いる。

お前は見たところ体術に自信があるようだが、この^はは武器有り
だ。

多種の武器の扱いに長けたオレと無手のお前とでは、オレに分があ
る。

脚を切り落とそうか。

それとも腕を切り落とすか。

そうなればお前はもう戦えない。

そうなる前にまいったと言つてくれ。

お前がまいったと言つてくれればそいつせずに済む

キコーンとなる。

あ？ なんだつまうコイツはアレか。俺より自分が強いから降
参しきつて言つてゐるのか。

「やまあ確かにばーさんに会つ前の俺だったら脚だの手だの切られてるだろ。が。俺、そんなに弱く見えるのか？」

まあ言え、と迫るハンゾー。まあ待てと宥め、ある試合形式を提案する。

「よし、わかった。試合形式は「いつじよひ」。忍者つてのは巻物だから敵から奪つてくるスパイ集団だろ」

「間違いではない」

ハンゾーが頷く。俺が考える試合形式を聞くだけ聞いてくれるらしい。

「ある物を誰かに持つてもらひ。お前はそれをもひい、ネテ口会長に渡せたらお前の勝ち。途中で俺が妨害し、ある物をお前から奪えたら俺の勝ち」

「ふむ。何を使つてもいいんだな？」

「おう。殺すつもりでやれよ」

「よし、いいだろ」

ハンゾーが乗つた。自分の得意分野なんだ、当たり前か。それで、とハンゾーが聞いてくる。

「ある物と持ち主は誰にする?」

それは決めてある。俺はぐるりと振り返ると、ヒンカに声をかけ

た。

「おーい、ヒソカ。おめーのトランプ貸してくれよ」

「いいよ」

ヒソカ承。

「んでヒソカ、おめーが持つててハンゾーに手渡しな」

「まかせて」

グッと親指を立てるヒソカ。そんな会話を済ませてハンゾーを振り返ると、ハンゾーは田と鼻と口、穴という穴を開けて固まっていた。

「どうしたよお前

「……ひ、ひひひひ」

こきなり笑い出した。大丈夫かコイツ。

ハンゾーは瞬時に俺の首をホールドし、耳元でこいつそり叫んだ。
つか叫んだらこいつそりの意味ねーべ。

「おおおお前なッ！ いくら恋人だからってあんな変態快楽殺人狂をマネキン代わりに使って、しかも凶器を借りてくるとかねーだろッ！ 別の意味で18禁借り物競争になっちまうだろッ！」

とりあえず、認めらんねーといろがあったから一発殴つて沈めて

おいた。

「誰が誰の恋人だ？　ああ？」

「す、すまん女王さ…じゃないユースケ」

「何か言つたか？」

「いや、何も」

尻をついた状態で首をブンブン横に振るハンゾー。

「ふん。なら始めッぜ。おめーがヒソカからトランプを受け取った
ら試合開始だ。それでいいか審判」

サングラスの審判がはい、と頷いた。

「ほら、とつとヒソカんとこ行けよ」

腕を組んで顎先で促すと、カチンコチンのハンゾーが一步一歩ヒ
ソカに近寄る。おお。手と脚が一緒だ。ツルツラゲの頭から、滝の
ような汗が流れる。

もう少しでヒソカからトランプを受け取れる位置までハンゾーが
行つたとき。

ヒソカに声をかけられ、ピタリを越えて、カチンと固まるハンゾ
ー。あいつおもしれーな。

「ねえ」

ヒソカは三枚のトランプを片手で広げ、それはそれは諭しそうと言った。

「よく切り落とせると、よく削れるのと、よく切り刻めるの、どちらがいいかい？」

そら、目的語は人間を、か。

ハンゾーが風のように俺の前に戻り、血走った目で叫んだ。

「もつ、モノがトランプなのは妥協しよう！ だが！ 公平をきるために、ヒソカではなく審判にトランプを持つてもうつことを要求する！ 切実に！」

「あー。好きにしろ」

というわけで仕切り直しになった。

部屋の端で審判からハンゾーがトランプを受け取る。

ハンゾーは顔だけ俺に向け、身体でトランプを受け取るとこりを隠した。

いつやつて死角を作ることで、俺ごとにトランプをしまったのが見せないよつたよつだ。

俺に向き直ったときこまくトランプはなかつた。

おやじくは懐に隠したのだろうが、懐の左右どちらに入れたのか
わからないし、もしかしたら別の場所に入れたのかもしれない。

場所がわからないなら掠め取るのは難しい、とこうわけだ。

「一つ確認だ

ハンゾーが問う。なんだ、と促した。

「この試合は、トランプを会長に渡せばオレの勝ちなんだな

ああ、と頷いて応えた。

「殺してはいけないといつルールに準じると、それはつまり、オレ
が会長にトランプを渡した時点でお前に戻されればいい。そういう
ことでいいのだな？」

「もちろん。脚でも腕でも切り落としたきや落とせよ。虫の息でも、
おめーがトランプ渡すまで俺が生きていりやせんとまいったって
言つてやるからおめーの勝ちだ」

ハンゾーが会長にトランプを渡し、俺がまいったと言つた後に死
んでも勝ちはハンゾー。

ネテ口会長に確認を取つたら、「ま、よからず」と許可が出た。

向き合つたハンゾーがもう一度、と口を開く。

「最後に確認する。降参しないか？」

「しないね。早くこいよツルッパゲ」

「……こいだらう。どんな結果になつても後悔するなよー。」

「しねーよ。早く来な

「…………」

スッと腰を落とし、構えるハンゾー。

この試合で、ハンゾーは体育館並に広いこの部屋の端から、反対側の端にいるネテロ会長にトランプを届ける。

さて、どう仕掛けてくるんだ。忍者の攻撃なんて受けるのは初めてだ。どんなものが出てくるのか、なかなか楽しみなもんだな。

ハンゾーが服の袖から何か丸いものを瞬時に取り出し、手の中に入れたのもはっきり見えた。

反対の手にも、何やら仕掛けをしているらしい。指に極細の糸が巻かれている。

投げるという予備動作なしに、指の力だけでハンゾーが丸い玉を投げつけた。

結構な距離があったのに、それは逸れることなく俺の足元に落ち、直後、ブワッと白い粉が広がる。

煙幕か。

藏馬との戦いで白い粉が広がつたら、それはちよつとした恐怖を味わう。

あいつが妖狐になるだけならいいが、あの野郎、白煙に紛れてどきつい植物の種を蒔いたりするからな。肉体操作やらあまり大きな声じや言えねーやベエ薬やら、腹黒いことこの上ねー。

そんとせや勝負なんぞ投げ出して全力で逃げる。俺の逃亡は、本気の藏馬とやり合えるってんでたいてい飛影が助けてくれたりするわけだ。

白煙でも、その点ハンゾーは安心だ。どうやら視界をただ塞ぐだけらしい。

だが、おめーの靈氣つづーかこつあじや念つづーのか、それが丸わかりなんだよな。

だから、俺に向かつて突っ込んできたハンゾーが、寸前で俺から離れ、もう片方の手で何かをばらまいて通り抜けたのが見えなくてもわかつた。

ぱらまかれたのはトゲトゲの玉。じつやう止めの撒き菱がぱらま

なるほど、あの指に巻かれていた糸を引っ張ると撒き菱がぱらまけるのか。

しかし撒き菱ねえ。本来は追跡されるときには痛くて走つてついて来られねーよ。うこいつ一時間稼ぎの道具のはずなんだが、俺ア踏んでも痛くねーんだよなあ。

白煙の中気配を絶ち、撒き菱を普通に踏みながら通り抜ける。自然に足の裏に妖氣を集めているから痛くない。

そして、ハンゾーが部屋の真ん中に行く前に先回りし、正面に立つて道を塞いだ。

霞のように現れた俺に、ハンゾーは田を見開いた。相当驚いている。

「なつ！ わ前、どうやつてオレの前に！？」

「走った」

それ以外ねーべ。にやつと笑つて言つと、ハンゾーもニヤリと引き攣つた笑みを返す。

立ち止まらずにハンゾーは仕込み刀で俺に切り掛かつてきた。

刀を軽々避けるが、さらなる攻撃が襲つて来る。仕込み刀と反対側の手から、手裏剣がいくつも飛んできたのだ。

左右の手から手品みてHに攻撃が繰り出される。おもしれー。

手裏剣を避けると同時に回し蹴りを放つと、ハンゾーの腹に直撃した。

奴の身体が後ろに吹き飛ぶ。

飛びながらも、ハンゾーはまたもや何やら丸い玉を投げてきた。
また煙幕か。

だが違つた。丸い玉には導火線があり、点火されている。

爆弾か！

丸い玉は、俺に当たつて爆発した。

もうもうと黒煙が巻き上がる。木製の床はえぐれ、天井は黒焦げになつていた。

「……グッハア、直撃したな」

俺の蹴りを食らい、飛ばされたハンゾーが咳込みながら立ち上がる。軽く蹴つたが、肋の数本はいかれただろう。

「おい…おいおいおい、嘘だろ。コースケが爆発しちまつたぞ！？」

「見ればわかる…」

「いくらコースケでもあれはまずいぜー 手当てしねえとーー」

レオリオとクラピカの焦つた声が聞こえる。駆けて来ようとする

一人を、審判が止めた。

「まだ試合中です。手出しへ許されません」

「ざつけんなよッ！ 友人が死にかけてんのに、助けねえ奴がどこにいんだ!? どけやゴルアツ！」

形相を変えたレオリオがカバンを持って詰め寄る。それにハンゾーが答えた。

「拷問用だから手足がもげない程度に殺傷力は抑えている。すぐに手当すれば一命は取り留める」

腹を押さえながら、ハンゾーは既にネテロ会長の前に来ていた。

「オレがトランプを渡したらすぐ手当をしてやるとこい」

ハンゾーはそう言つて懐に手を入れ。

懐を散々漁りまくり、上半身裸になつてトランプを探す。

「ハンゾーよ。トランプはどうあるんじや？」

ネテロ会長が手を差し出し、問い合わせる。

「……どこにもねえ……」

呆然とハンゾーが呟いたとき。

「探しモンはこれか?」

黒煙がなくなり、えぐれた床の上、服も髪も肌も何もかもが元のまま俺の指先に、一枚のトランプがあつた。

絵柄はジョーカー。

「な、ななな、な、何で、何がどうなつて……ッ！？」

田を白黒させるハンゾーに、にやつと笑いかけてやつた。

「俺さあ、昔から手癖が悪くつてよー。そつきおめーを蹴り飛ばしたときこじーして」

懐に入れ、抜き取る仕種をする。

あの接触した瞬間に、ハンゾーの懐をまさぐつて取つた。

裏をかいて懐じやねーとこに隠したつてこともあるかと考えたが、ちゃんと懐にあつた。とまあそんだけの話だ。

ポカーンとするハンゾー。視界の端に、顔の原型すら留めずに驚愕しているレオリオがいた。マジであいつい奴だな。

友人か。悪くない。

「ちょ、待て！ 爆弾は！？ 確かに直撃したはずだぜ！？」

有り得ない、とハンゾーが混乱のまま叫んだ。

爆弾ねえ。

「おめーはマッチぶつけられてケガすっか？」

飛影の邪王炎殺黒龍波とか黄泉の煉破凝集球・弔とかまともに食らつたらそらヤベーが、あの程度の爆弾は俺にとっちゃマッチと一緒に緒だ。ケガする方が難しいぜ。

俺の問い掛けに、ハンゾーはがくくじと膝をついた。

「……お前何なんだ。本当に人間なのかよ」

その答えは決まってる。

「俺ア魔王だ」

こじし、と笑って言った。それにハンゾーがため息を吐く。

「女王じゃなくて魔王か。信じちまいそつだ」

ゆづくじ立ち上がるハンゾー。肋いかれてるだろうこ、こいつもタフな野郎だな。

「オレの負けだ。お前にも勝てる気が全くしね」

そう吐き捨ててハンゾーは壁に下がつて行つた。

「第一回戦、勝者コースケ！」

審判のゴールに、レオリオの喜びの声が上がつた。

「いやつたぜ！ コースケの勝ちだ！ ハンターになりやがった！」

「ああ。 もすがコースケだな」

自分のことのように喜ぶレオリオと、それに笑顔で同意するクラピカ。

二人に近づき、にんまり笑って俺はクラピカを見て、次いでレオリオを見上げた。レオリオの表情が途端に訝しげに変わる。こいつマジ桑原と同じで表情豊かだよな。

「な、なんだよ」

「心配してくれてありがとう、友人どもよ」

クラピカは微笑み、レオリオは照れて頬を搔きつつ答えた。

「友人だからな」

「心配すんのは当たりめえだつの」

レオリオとクラピカの間に入り、肩を組む。

そこになつとりとした視線を感じた。こんな視線を放つ奴はアイツくらいしか覚えない。

「ねえ。 トランプを貸したボクにお礼はないのかい？」

振り返れば、目を細め、胡散臭い笑いを浮かべているピエロ、もといヒソカがいた。肩を組んだクラピカ、レオリオがビク、と跳ね

る。

そうだよな。こいつとは関わりたくないねーよな。なら用件はせつさと済まして追い払おう。

「おひ。サンキューな。トランプ返すぜ」

二人の肩から腕を外し、ヒソカにジョーカーのトランプを差し出した。だが、奴は手を出さない。なんだ。

「ユースケは魔王かもしれないけど、ボクにとつてキミは

パチンと指を鳴らすヒソカ。嫌な予感がした。

手に持つトランプに念を感じ、見遣れば図柄が変わっている。

ハートのクイーン。

「女王様だからね」

パチンとウインクを向けられた。ブワツと鳥肌きた。周囲からは、女王様、やっぱり、そういう関係か、なんてざわめきが聞こえる。ハラワタが沸騰した。

トランプに周をかけてお返ししてやろうか、と思つていたとき、トランプのど真ん中を針が貫いた。

「カタ……カタカタカタカタ」

宇宙人が針を構え、殺意剥き出しにこぢりを睨んでいた。あらゆ

る意味で怖^ヒ。つかおめー、俺にまで殺氣向けんなよ。

田で文句をつけていると、傍らでコソコソとレオリオたちが話しだした。

「ハリヤー一体どう関係なんだ」

「ヒソカのアプローチ、ギタラクルの明らかに嫉妬と思われる様子から察するに、ゴースケを間に挟んだ三角関係と推測できる」

「どっしゃーっ！ ガチでホモか！」

「違エーーー！」

裏拳でズビシッと突っ込む。ヒソカは愉快犯だし、ギタラクルは電波だ。つまり、奴らの俺に対する好意のよつなものは、一般に男女間で言われるよつなものとは違うってこいつだ。

「カタカタカタカタ、カタカタカタカタ」

「早い者勝ちなんてナンセンスだね。そんな時代錯誤で電波なキミよりボクを選ぶに決まってるだろ」

なぜか会話が成立しているらしい。マジなんなんだコイツ^{ハリヤー}。

ギタラクルからさらなる殺気が上がる。笑みを深めるヒソカ。二人の意味不明な会話は白熱していく。

「カタカタカタカタカタカタカタカタ！」

「キミ」といたつてコースケが幸せなはずないだろ。だいたいキミ、
どうやって悦ばせるか知らないんじゃないかい。バーをバーして
一したときの快感！ あれをコースケに味わわせ

「シネ」

ワンパンでヒソカを吹っ飛ばす。ギタラクル、お前を選んだわけ
じゃねーから喜ぶな。殴られて悦ぶなヒソカー！

周囲はドン引きだ。友人のはずのクラピカたちでさえなんだか壁
を感じるぜ。ひでH。なぜ俺がこんな田上。

「せつせつ次の試合やつてくれ

疲れたように促すと、ネテロ会長が頷いた。

「やうじゅな。第三試合はクラピカ対ヒソカじゅ。……変態と電波
と女王の三角関係はけと氣になるの！」

クソジジジイ、ぼそつと呟きやがった。聞こえてんだよ。その長い
眉毛引っこ抜いたろうか。

イライラしながら、俺は壁に下がった。

イルミン・キルア（前書き）

B.Lがにおう表現あり。苦手な方は見ないでください。

イルミン・キルア

クラピカ対ヒソカの試合はあっけなく終わった。

試合開始直後、ヒソカはクラピカに耳打ちをした。硬直するクラピカを横目に、ヒソカは棄権した。

俺の特別聞こえのいい耳が聞き取つたその声は、「クモについていいことを教えてあげよう。どうやらあの野郎、何か知っているらしい。

何はともあれ、クラピカもハンターになった。

第四試合はハンゾー対ポックル。この辺りでキルアが医務室から戻ってきた。でかい湿布が額に貼られている。おおげさな。マジ痛いんだよ、と喚かれても知らねーな。

キルアは俺がデコピンの仕種をすると額を押さえて黙るようにになつた。いい感じに調教完了だぜ。

ハンゾーとポックルの試合もすぐに終わつた。肋が折れていってもハンゾーの戦闘力はポックルを圧倒した。

「悪いがお前には負ける気がしない。お前も爆弾を試すか？」

関節をキめられ、ハンゾーにそう斬されたポックルは、躊躇つことなく降参した。

第五試合はヒソカ対ボドロッテオッサン。ヒソカがボドロを瞬時

に戦闘不能なまでに傷つけ、ボドロは降参した。

第六試合はキルア対ポックル。あのガキ、余裕こいて「あんたとじゃ戦つてもつまんないから」と棄権しやがった。嫌味なガキだ。

第七試合はボドロ対レオリオ。人生観により怪我人を放つておけないレオリオは、ボドロの手当てを優先させ試合を後回しにすることを提案した。

それにより、先にキルア対ギタラクルの試合を行つことになった。
おもしろいじゃねーか。

俺はキルアとギタラクル、もとい、針を抜けば長い黒髪の美形つー嫌味野郎、イルミが兄弟だと知っていたから、この試合はなかなか興味深かつた。

針を抜いて徐々に顔が変形していくのを見て、キルアは冷や汗をかき出した。どうやらキルアにとってイルミは怖い兄貴らしい。

「……なんで兄貴が」

「次の仕事の関係上資格が必要だつたから。キルは母さんとミルキを刺して家出してきたんだよね。母さん泣いてたよ」

衝撃だ。何がって、イルミの野郎、なんだつて弟とは普通に会話をできるんだよ。トマトはビビついた。かつ飛ばし専門じゃねーのかよ。

せりと並ぶ元気なら、おめーの母ちゃんが息子に刺されて泣くような

普通の母ちゃんだったことに驚きだ。

と思つたら。

「立派に成長してくれて嬉しいって感激してた」

レオリオがずつとけた。いや。それでこそおめーの母ちゃんだ。
「まさかキルがハンターになりたいと思ってたなんて知らなかつた
よ」

「別になりたかった訳じゃないよ。ただなんとなく受けてみただけ
や」

「そり。安心したよ。心置きなく忠告できる」

宇宙人め、一体どこの星から収信した忠告をかます氣だ。宇宙人
なだけに見当もつかねー。

イルミはキルアをまっすぐ見て告げた。

「お前はハンターには向かないよ」

お。電波系の忠告だと思つたら、意外に普通だな。で、その理由
はなんなんだ。

「お前の天職は殺し屋なんだから」

あー。そりこやこつらの家つて暗殺一家なんだつけか。確か後
継ぎはイルミじゃなくキルアなんだよな。

兄貴なのに後継ぎじゃないつてのにイルミは大して気にしちゃいない。それほどイルミはキルアの素質をかつてているらしい。

「お前は熱をもたない闇人形だ。自身は何も欲しがらず、何も望まない。陰を糧に動く。お前が唯一歓びを抱くのは、人の死に触れたとき。お前は親父とオレにそつつくられた。そんなお前が、何を求めてハンターになる？」

つづった、ねえ。初対面で「てめエはオレの手の上で遊ばれてんだ」と吐きやがつたくそオヤジを思い出して、ちつとだけイラッとした。

だが、かかつてこい、強くなれ、と無言の挑発をしてくるくそオヤジと違い、イルミは頭からキルアを押さえ込んでいる。

キルアはそんなイルミに逆らいたくなじょうだ。キルアは懸命に言葉を紡いだ。

「……確かに、ハンターになりたい訳じやない。けど、オレにだって欲しいものくらいある。望んでることだつてあるー。」

イルミみたいに決め付けて上からオヤジに言われたら、俺なら靈丸ぶつ放してオヤジぶつ殺すな。

必死に反論するだけのキルアはまだイルミの支配下だらうが、今に猛反発するぜ。

他人の家庭の事情だから口は出さねーが、イルミめ、逆襲されたときによ死ぬほど後悔しやがれ。そんときや全力で「やまあみる」

つて笑つてや'りア。

今はまだ完全優位のイルミが、無表情でキルアに尋ねた。

「何が望みなの？」

「オレの望みは……ゴンと、友達になりたい」

キルアは擦り出すよつて言つた。

「もう人殺しなんてうざりだ。普通にゴンと友達になつて、普通に遊びたい。それから」

ちらりと横目で俺を見た。

「ユースケとも、友達になりたい」

俺と友達に？

瞬きする俺。目を見開くイルミ。

「ユースケはダメだよ。オレのだから」

「……は？」

「ま、なんにしろ無理だね。お前に友達なんてできっこないよ。お前は人を殺せるか殺せないかでしか判断できない。そう教え込まれたからね。今のお前には、ゴンがまぶしそぎて測りきれないでいるだけ。友達になりたいわけじゃない」

「……違つ

イルミの乱暴な理論に、キルアが弱々しい反論をする。

「彼のそばにいれば、いつかお前は彼を殺したくなるよ。殺せるか殺せないか試したくなる。なぜならお前は根っからの人殺しだから」

「……」

おーおー。大混乱だ。仕方ない。これはもう既に氣迫負けしている。といふか。

キルアの頭に刺さつてゐる念の針のせいか。

その存在に気付いたのはキルアの額にビデオピンしたときだ。針という形状のあたり、仕掛け人はイルミだらう。

キルアがいつそれを刺されたのかは知らねーが、刺されている場所が頭で、「つくった」なんて口にしてゐるあたり、ソレで思考を作してんだろうなと思われる。洗脳つつーのか。イルミに逆らわない、闇人形とやらになるように。

キルア自身でいつかその存在に気付き、自らそれを外したときが分かれ道だ。

望まれた闇人形になるか、はたまた兄貴ぶちのめして自由になるか。

キルアがどの道を選ぶか知らねーが、今俺が言えることは一つだ。

口を開きかけたとき、レオリオに先を越された。

レオリオはズンズンと前に出て、審判に止められた。そこから前には行かず、その場で言った。

「キルア！ 兄貴がなんか知らねーが、そんなバカヤローの言葉に聞く耳持つな！ ペンやコースケと友達になりたいだと？ 馬鹿言え！ とっくにお前ら友達だろうが！！ 少なくともペンとコースケはそう思つてるはずだぜ！！ なあコースケ！！」

ギロツと俺に凶悪な視線を向けるレオリオ。お前、それは脅迫だぜ。

驚きに目を見張るキルア。だが、俺が言ひてーことはそれだ。俺はキルアにニッと笑いかけた。

「おめーはくそ生意氣だが、俺もダチだと思つてるぜ」

つーかかわいい弟分か。

「ユースケ」

キルアの顔がぱつと明るくなる。それは長くは続かなかつた。

「ユースケは友達じゃなくて義姉になるわけだからまあいいけど

「は？ あね？」

イルミの呟きに疑問符を浮かべるキルア。あの電波。キルアが反旗を翻す前に俺がしめようか。それが一番平和的解決な気がするぜ。

「ゴンはもう友達のつもりなのか。まいつたな」

いやおめーの思考がまいったんだよ。

電波な宇宙人は、暗殺一家に染まつた一言を放つた。

「よし。ゴンを殺そう」

殺し屋に友達なんて邪魔なだけだから。そう言って針を構えた。その針を審判に向ける。

「ゴンはどう?」

「お答えできぬ」

ヒコ、と数本の針が審判の頭に刺さる。審判の頭が変形し、もがきながら「トナリのいむしつテス」と吐かされた。

アレやべえな。トライアングルトリック、こいつの針食らって吐かされたら消えちまうじゃねーか。要注意だな。

再認識している内に、イルミは部屋の外に向かい出す。

部屋の外に出るためのドアの前を、レオリオ、クラピカ、ハンターハー協会に雇われた審判たちが塞ぐ。もちろん俺も。

俺がいるなら、ヒゴンを気に入っているヒソカは傍観の態勢だ。

「困ったな。コースケがいたんじゃゴンを殺せない。それにヒード

殺したらオレが失格になつてキルが合格になるか。なり、合格してから「ゴンを殺そつ」

「い」と考えた、とでも言ひよつてイルミは言った。

「合格したあとにゴンを殺しても失格にはならないだろ?」

「ルール上はそういうやな」

イルミの問い掛けにそう返すネテロ余長。息を飲むキルア。イルミは着々とキルアを追い詰めにかかる。

「オレを倒さないとゴンは殺される。でも、お前はオレを倒せない。倒せない敵からは逃げるようつべられたから、お前はゴンを見捨てて逃げるしかない。動くな」

後ろに後退りしたキルアに、静かながら鋭い制止の声がかけられる。

「動いたら戦闘開始の合図と見做す。どうする、オレは倒せない。でもオレを倒さないとゴンは死ぬ」

キルアの顔面は蒼白。汗が滝のように流れた。レオリオが「そんな奴の言つことなんか聞くな! ゴンならオレたちみんなが守る!」と叫ぶが、キルアの耳にや入っちゃいねーだろ。

ひでエ顔色のまま俯き、震える声でキルアは告げた。

「……まいった。オレの、負けだ」

だな。まだイルミへの反抗はおめーにや早かつたな。

キルアの降参宣言に、イルミは目が笑わない笑いを浮かべる。

「あーよかつた。これで戦闘解除だね。ははは、ゴンを殺すなんて嘘だよ」

ダウト。キルアが頷かなきや、おめー、マジドゴン殺す氣だった。つづ一か、試験後に殺す氣だ。

キルアのことに関しちゃキルアが自分で何とかしなきやいけねー問題だから口出ししねーが、ゴンに危害加えるなら容赦なくぶつ飛ばすぜ。

けど、トイルミがキルアの頭に手を置き、心に塗り込むように続けた。

「わかつただる。お前に友達をつくる資格はない。必要もない。今まで通り親父やオレの言つことを聞いて、ただ仕事をこなしていくばいい。ハンターの資格も今はいらない」

最後まで釘を刺すのを忘れない。徹底した圧迫教育たあたいしたもんだ。数年後、反撃ほぼ確定だけどな。

強くなれよ、キルア。

てめーでなんとかしなきやいけねーことだから余計な手出しあしねエが、お前が望むならいくらでも協力してやつからよ。

キルアはもう何も言わず、聞こえず、見えてすらこないよつた壁

に戻った。レオリオやクラピカが何を言つても無反応だ。

そんなキルアをそつちのけに、イルミが俺の隣にやつてくれる。もうギタラクルとしてキルアから隠れる必要がなくなつたからだらう。イルミの手が自然に腰に。回される前にわいつと避けた。

「何で避けるの？」

「何で避けねーと思うのかが疑問だ」

「ユースケは恥ずかしがり屋だもんね。かわいいなあ」

「どいつも解釈したらそつなんだよ」この宇宙人が

俺とイルミの宇宙間通信的な会話に、周囲はざわめく。

ヒソカとアヤシイ関係なんじやなかつたのか？

あんな危ない奴らを手玉に取つてやがるのか。

すげエ。

パネエ。

さすが女王。

なあこれ主語俺か。なんだこれ。地味に心が折れそつだ。

そこに登場、AKA、あえて空氣読むわけがない男ヒソカ。

「ねえイルミ。ボクのコースケを勝手に口説かないでくれるかい」

「何それ。「冗談は顔と服装と性格と存在だけにして」

つまり全部か。しかしそれに關しちゃおめーもどっこいだ。たぶんおめーの弟も同意するぜ。

「オレとコースケは三次試験のとき、あの密室で愛を誓い合ったんだよ」

「いやどんな妄想だ。トマト投げられた覚えしかねエよ。

「おやおや、時間のことと言つならボクなんて一次試験のときから求愛してたよ。ボクの^{トランプ}愛をコースケはしつかり全て受けとつてくれたんだから」

「飛んできた凶器をガードした記憶ならあるぜ。おめーは愛に殺氣を混せんのか。とんだブレンンドだなあおい。

「まつたく、イルミの電波には困つたものだよ。ねえコースケ」

「変態になしつかりと引導をくれてやつて、コースケ」

一触即発の状態で左右から俺に振る変態と^{守田人}。俺の応えは一つだ。

「二人とも逝つとけ」

左右にワンパン。ぶつ飛ばした。すんげー飛んだ。

超すつきりだぜ！

が。

「ああ、ユースケの愛をゾンビンに感じたよ……！」

変態が自身を抱きしめ悶えてる。キメH。

「ユースケは見事なかかあ天下なんだね。何て言うんだっけ、獵奇的な奥さんとかモンスター妻、いやもつと大物だから魔王妻とか」

宇宙人がまばたきなしに電波受信中だ。関わるまい。

興味深そうなジジイの視線や、ドン引き真っ最中の周囲、高い壁を築きやがった友人なんかもつ気にしねH。

「ジロジロ見てんじゃねーぞゴルアツー！」

凶悪と言われたガンつけで一喝した。中坊んときに戻った気がした。

第八試合は先送りになっていたレオリオ対ボドロの試合だった。

試合が始まる前、壁に寄り掛かってしゃがんでいたキルアが立ち上がった。

「……ふんと不穏な空気じゃねーか。

さういふと様子を見ていたことにした。

そして、試合開始の合図直後、キルアが動いた。

一直線にボドロに向かつ。その動きはさすが暗殺一家の期待を背負つてゐるだけはある速さと無駄のなさだ。あくまで人間の枠の中だが。

スッと先回りし、首根っこを掴み上げた。

「キルア、おめー何する氣だ？」

片手で掴み上げたまま、静かに問い掛けた。

「……離せ」

力無い反論。強気な生意氣坊主はどうに行つちまつたんだか。

他の受験生や審判たちのみならず、レオリオとボドロも何事かと戦いを中断してこちらを見た。

「離したらおめーボドロのオッサン殺すだろ」

「……ツ」

キルアの鋭い爪が俺の心臓を狙う。

だが、いくら鋭くても俺の服すら傷つくことはなかつた。

すぐに足がとんでくる。

俺の頸椎に当たるが、わずかも動かない。念のこもつてねー蹴りなど、ネコパンチと同じだ。

「こでようやく、俺には絶対に勝てないと認めたようだ。首根っこを掴まれたままになる。」

「ゴンならここで起死回生の一発を考え出す怖さがあるが、イルミに向やう操作されてるつらいキルアはこれで抵抗はおしまいだろ。」

「おめー、あのオッサン殺してHの?」

「……殺さないと」

違Hよ。

「俺は、キルアがあのオッサンを殺したいのかを聞いてんだ。殺してーのか?」

「殺したい、わけじやない!...」

キルアが叫んだ。内部ではものすごい葛藤が起きてこるらしい。

冷や汗すげーし、目の焦点が合つてない。

イルミ。おめーは弟の精神壊してーのかよ。

キルアの頭に刺さる針に念を送るイルミにため息をつく。

「イルミ、俺が話してんだ。邪魔すんな。ターゲット、俺とキルア」
外部からの全ての念を遮断する俺の念、過保護な愛情“モンスターージ”を発動した。それにより、イルミからの念がキルアに届かなくなる。キルアの眼の焦点が合つてきた。

「キルアよく聞け」

ゆつくつと、疲弊した様子のキルアが俺を見る。

「兄貴にはてめーで勝て。それは自分でやらなきゃ駄目だ。だけどな、そのための協力ならしてやる。やりたくなーことならはねつけるだけの力をつけな」

キルアが鼻で笑った。諦めたような、ガキがしてると見ると腹の立つ笑い方だ。

「協力、するって？ オレんち厄介だよ。兄貴はアレだし、親父はもつと強い。ゾルティックの名前は伊達じやない」

「暗殺一家なんてこいたあどうだつていいんだよ。ダチが困つてるから助ける。そんだけ」

「はっ、暗殺一家がビうでもいいわけないじゃん。今はそんなこと言つてゐけどじ、実際会つたら絶対後悔するぜ。……オレみたいな闇の生き物が友達、なんてつべうつと思つなんてバカだった」

「確かにバカだな」

自嘲するキルアにバカを肯定してやると睨まれた。人にバカにされるのは許さんてか。プライドの高い奴だ。

「俺がさつきイルミぶん殴つたの見てないだろ」「

え、とキヨトンとした顔をするキルア。放心状態で気付いてなかつたらしい。

ギャグみたいな展開だったとはいえ、あの一人が真横からの単純な攻撃を避ける間もなく、本気で殴られたのだ。

飛ばした。

「俺ア魔王だぜ。人間相手に負ける訳ねーんだよ。イルミやヒソカより俺のが強エゾ。なんならおめーの親父もおめーの前でぶつ飛ばしてやるうか」

につ、と笑うと睡然とした後、キルアも同じものを返した。

さつきの笑い方より、断然こっちのがいい。

「それいいね。親父がぶつ飛ばされてるところ見てみたいな

「期待に応えましょ。で。てめーが闇の生き物になるかどうかはてめーで決めな。他人に決め付けられたモンに納得してんじゃねーぞ。嫌な人はねつけて、ケジメ付けて來い」

無茶言つてくれるよ、と苦笑するキルア。

「オレが闇人形だから友達がつくれないのか。それともただ弱いから友達がつくれないのか」

首根っこを掴んだままだつたといふ、離してと言われ手を離す。もう大丈夫だろ。

キルアは俺の正面に立ち、宣言した。

「オレ、強くなるよ。強くならないと何もできない」

我を通せるくらい。我を、もてるるくらい強くなる。

そう告げたキルアは、いい顔をしていた。

「おひ。頑張れや」

「オレ、帰る。で、ケジメ、付けてくる。そつしたら」

友達になつて。

声よりも、心が叫んでいた。

そんな声を無碍にできるわけがない。

「バアッカ。俺の方はもうダチなんだよ。ま、おめーがちやんヒダチだつて言えるまではダチ予備だな」

「何それ」

ククク、と顔を合わせて笑う。

「じゃ、バイバイ」

「またな」

モンスター・ゲージをさしつづなく解除すると、キルアは堂々と前を向き、歩きだした。戦いに赴く意氣軒昂な男の顔だ。

キルア選手、と審判に呼び止められるが、キルアはいつもの生意気な顔で応じた。

「オレ、棄権するから。やこのオッサンたちの試合無駄だよ」

そのまま死んだ魚よりもひで顔してやがつたくせに。

同じことを思つたのだろう。オリオが、微妙ににやけながら怒つた。

「くあらクソガキ！ オレアーッだッ！ オッサンじゅねえつつのー！」

ひらひらと手を振り、キルアは部屋を出て行つた。

「つたぐ、クソガキめ」

そうレオリオはぼやくが、口調は柔らかかった。何はともあれ。

「それでは、試験終了じゃな」

ネテ口会長が宣言し、ハンター試験が終わった。

説明会（前書き）

Bがしな空氣あり。氣になる方は見ないでください。

説明会

合格者に説明会が開かれた。教壇があり、学生みたいな机がある。こういう空気、眠くなるんだよなあ。半分以上聞き流しながらその場にいた。

しかし。

広い部屋の中で、机は多数、聞く人数は少数。座る場所はいくらでもあるつづーのに、両隣はヒソカとイルミだ。ここだけやたら人口密度が高い上に、何だか吸い込んだら5分で肺が腐りそつた障気が漂っている気がする。

そんな俺たちの周りにや人が来ねー来ねー。レオリオとクラピカも遠いぜ。お前らダチじやねーのかよちくしょー。

嫌気がさす説明会の途中に、ゴンが来た。皆がゴンに注目する。

部屋のドアを思い切り開けて入室したゴンは、一点のみに視線を向け、ずんずん真っ直ぐ歩いて来る。俺の隣、イルミの真横でピタッと止まつた。

「ゴンの視線を受けながら、前に立つネテロ会長を我関せず見たまま動かないイルミ。瞬きもない。思つんだが、宇宙人つてのは目がかわかねーんだろうか。

イルミを険しい顔で見ているゴン。「りや、遅かったな、とか隣に座れよ、とか軽口を叩く空気じやねーな。俺は宇宙人や変態と違つて空氣の読める男だぜ。

黙つて成り行きを見守つていると、ゴンが口を開いた。

「キルアにあやまれ

（どうやらイルミとキルアのやり取りを誰かから聞いてきたようだ。）
だが無駄だぜ、ゴン。こいつはお前の考えが理解できない。宇宙人
とは価値観が違う過ぎるからな。

案の定、ゴンに視線を向けたイルミは心底不思議そうに聞き返した。

「あやまるへ、何を？」

「そんなこともわからないの？」

「うん」

「もうあやまらなくていいよ。キルアのところに案内してくれるだ
けでいい」

イルミと自分との間に、越えられない価値観の壁があることじ
ゴンは気付いたようだ。

「やしてどうする？」

「キルアに、オレたちはずちゃんと友達だつて言つ」

「キルに友達はいらない」

「それを決めるのはお前じゃない！ キルアだ！ オレはキルアを連れ戻す。自分の意思をもてないとこになんか、キルアをいさせられない」

「いさせられない、ね。あいつは自分の足でここを出て、自分の意思で帰つていったんだよ」

「でも自分の意思で行動を決められない。お前たちに操られているんだから監禁も同然だ」

そう。だからそれを打開するため、けじめをつけにキルアは帰つた。

だが、兄貴でさえどうにもできないキルアが、兄貴以上らしい家族相手にどうにかできるとは思えねー。だから、俺も後からキルアのところには行くつもりだった。

初めから一緒に行くなんて過保護なことあしねー。それじゃあいつが一人で立てなくなっちゃうから。

俺が行くのはキルアを連れ戻すためじやない。あいつに協力するためだ。そのところは、ゴンとは少し意見が違う。

「もしも今まで望んでいないキルアに無理矢理人殺しをさせていたなら、オレはお前を許さない」

望んでいたかそうじやないか。おそらくキルア自身、殺人をどうも思つていなかつただろう。それはキルアが知らなかつたからだ。人を殺さない生き方を。

だが、キルアはゴンに会った。そして知った。明るい光が差す道を。

だから、ここから先があいつの望まない殺人になるのだろう。頭に刺さる、己を操作する念の針にキルアが逆らえるとは思えないからな。その際の葛藤で、あいつの精神がどうにかなつてしまふんじやないかつてのが俺は心配だ。

「許さないか。で、どうする？」

「どうもしないわ。お前たちからキルアを連れ戻して、もう会わせないよ」とするだけだ

ま、確かに一時的にはそれでいいかもしんねーが、それじゃ解決にならねーぞ。

さりにイルミを掴む手に力を込めるゴンに、イルミが手を伸ばす。悪意のふんだんに籠る、念針を持つて。

俺が止める前に、ゴンは野生の勘でイルミから手を離し、背後に飛びのいた。いい判断だ。

「ゴン、座れよ」

こんなところでイルミと言い合つても不毛なだけだ。それがわかつていたからゴンを促した。それに、ゴンに対しても言つてやりたいことがある。

頬杖をついたまま、俺はゴンに視線を向けた。

「余所ノチには余所ノチのルールがある。おめーの価値観を押し付

けんな」

「う……でも…」

「これはキルアの問題だ。てめーでケリつけなきゃいけねェんだよ。それをお前が邪魔すんのは筋が違エだろ」

「ゴンが視線を落として唇を噛み締めた。自分にも当たて嵌まるものがあつたんだらア。頑固だけど素直だねエ。」

だが、と続きを口にする。

「ダチが難解な問題にぶち当たつて、それを解決するのに協力するのは、ダチなら当たり前だと思わねエか？」

「ゴンの顔が上がる。それにニッと笑いかける。

「キルアの話はまた後だ。見る。今は説明会の真っ最中だ。みんな待つてんだぜ」

合格者たち、試験官たち、ネテロ会長、皆の視線が一いつ丸りを見ていた。

「……あ。」「めんなさい」

やつやつて謝るあたりの素直さがいいよな。合格者たちも、笑つて頷いていた。いやつやつて眞に受け入れられるあたりがゴンの人徳か。

「ゴンは素早く空いている席に座った。

「さて、よひしいかな」

ネテ口会長の仕切りなおしに皆が頷く。

「それでは、説明会を再開します」

説明を始めたのは、ちつこい豆みたいな人間……でいいのか？
妖怪といわれた方が納得できる生き物だった。名前は姿のことく、
マーメンといいうらしく。

「謹さんにお渡ししたこのカードがハンター免許証です」
ライセンス

俺の手にあるが、見た目は地味なカードだ。だが、このカード
には偽造できないようあらゆる最高技術が施されているらしい。硬
貨とかお札みたいなもんか。

「公的施設の95パーセントはタダで使用でき、銀行からの融資も
一流企業なみに受けられます」

公的施設ってどんなところだ。図書館しか浮かばねーな。でもあり
や元からタダだな。ん？ つかあれは公共施設か。なんだかわけわ
かんなくなつてきただ。

「売れば7回くらい人生遊んで過ごせますし、持っているだけでも
何不自由なく暮らせるはずです」

7回くらい遊んで過ごせる、ねえ。頭に浮かんだのはゾルディック
の年収だ。隣に座る宇宙人なら、ライセンス売ったところではし
た金とか言いそうだ。腹立たしい。

「それだけに紛失・盗難には十分気をつけてください。再発行はいたしません」

このハンターライセンス、統計じゃあ5人に一人は1年以内に何らかの形でカードを失っているらしい。

プロになつた俺たちの最初の試練が、カードを守ることだと。うむ、腹巻ン中入れとか。確かパスポートとかそやるつて聞いた。

「次にハンター協会の規約についてですが」

規約。なんだか小難しい話になりそうだ。そつ思つた途端にまぶたが落ち。

「……というわけで、説明を終わりしたいと思います」

の言葉で目が覚めた。見事に中抜けだ。まったく聞いてなかつた。ま、何とかなんだろ。

「あとはあなた方次第です。試練を乗り越えて、自身の力を信じて、夢に向かつて前進してください。ここにいる8名を新しくハンターとして認定いたします!」

その宣言で説明会は終わつた。

「ユースケ、ヒソカ、イルミ、ちとおいで」

説明会が終わつたところでネテロのじーさんに呼ばれ、三人揃つて別室に連れていかれた。そこは最終試験の面談が行われたネテロ

のじーさんの部屋で、俺たち三人は並んで座布団に座り始めた。

じーさんもテーブルの向こう側にあぐらをかいて座る。

「じーさん、茶と茶菓子は？」この間くれるつづつたじやねーか

「ほつほつほ、今回もすぐ終わる話ゆえ、茶も茶菓子もなしじや

胸を張つて約束破られた。このじじい。

「まあ冗談はさておき」

「俺ア本気だつた」

「三人の共通点についての話じや

無視しやがつた。

共通点だア？ 宇宙人と変態と俺の共通点などさ、鼻と田と口と耳の数くらいしか浮かばねーわ。

ネテ口のじーさんの言葉に、すぐ正答を弾き出したのはソソカだつた。

「念能力、だろ」

あ、なーる。確かに共通点だ。

ネテ口のじーさんが頷いた。

「その通りじゃ。飴をやるわ」

ヒソカの前にイチゴ飴が一つ、ぽんと置かれた。思いも寄らないガキ扱いに、差し出された飴を見て目を見開くヒソカ。おかしくて俺ア噴いたね。

「さて、なぜ念能力者のお前たちを呼んだと思つ?」

衝撃から立ち直れないヒソカより早く、イルミが答えた。

「ハンター裏試験のことだる。父さんから聞いた」

ハンター、裏試験?

疑問符が浮かぶ。

ネテロのじーさんはまた一つ頷いた。

「正解じゃ。飴をやるわ」

イルミの前にもイチゴ飴が一つ、ぽんと置かれた。ヒソカの後で予想できていたからだろう。イルミはテーブルに置かれた飴を一警しただけだった。

「では、ハンター裏試験とはなんだと思つ?」

ネテロのじーさんの問い掛けに、じーさんの視線も、ヒソカの視線も、イルミの視線も、全て俺に向けられる。俺が答える番といつのか決まっていたらしい。

いや待て。始めにヒソカが答えたやつならまだわかるが、これは
いくら考えてもわからんねーよ。

と思つていたら、左右からヒントがくる。

「ボクたちの共通点はなんだっけ?」

「ハンターの仕事は何だと思つ?」

「念能力者、戦うことが仕事。戦う相手が念能力者の場合があるってことか。

それなのに、俺たち以外の受験生は念能力者じやなかつた。

「そのままじゃハンターとして危険だ。それはつまり。

「念能力を使えるようになる」とが裏ハンター試験つてことか?」

ヒソカが拍手をくれ、イルミは。相変わらずの宇宙人発言で俺を褒めた。

「正解じゃ。飴をやるわ」

俺の前にもイチゴ飴が置かれた。こつやぢつも。袋を破り、ポイッと口の中に放り込む。

「うむ。コースケは念についてもう少し学んだ方がよむつじやの

「

ネテ口のジーさんが俺を見て呟く。

「まあとにかく、お前たちは既に念を使用できてる。ところがわが
で、裏ハンター試験も合格じゃ。じゃがの？」

飴をカリッと噉んだ瞬間、飴から何らかの念が吹き出し、体に浸
透した。

「おえッ 何だこれ！」

飴をペリと吐き出す。テーブルに吐き出した飴から、念を感じた。
わざまで何も感じなかつたのにビックリした。

「ここのよひ、食べ物に念をこめる念能力者もある。見えるからと
いって、逆に見えないからとこつて油断はできるのじゃよ」

ウンウン、と頷くじーさんの皿せんをかけていた。

「じてやつたりなツリヒトをじやねハヤガルア。てめ、何しやがつ
た？」

じーさんの前に震みのように移動し、テーブルの上から便所ボーラー
ズでガンつけた。本職、あるいは妖怪でもえびじる俺のガンつけ、
じーさんは飄々と笑う。

「なに、たいしたものじゃない。ただ、今回合格した受験生に念を
教えられないようにしただけじゃ」

「じつこいつとだ？」

知らぬ一とマズイなら、教えなきゃ駄目だろうが。

「合格者には心源流の師をつける。それで念につけ基礎から学んでもらひ」

「つまり、プロの教師をつけるから、アマの偏った余計な知識を『教えるな』ことか?」

「やうこいじじやな」

「教えようとしたらどうなる?」

「昔からいわゆる口達者な子供に『言つてやつは決まつておる。口めにチャック、じや』

「言つたとしたら、口が開かなくなるのか」

「じーさんがあつむ」と頷いた。

「念の効力がある期間は半年、対象は同期の合格者である」と、飴の念について正しい知識を伝えること。これがこの飴の制約「じや」

じーさんは嘘をついていない。ま、そんなうたいしたもんじやないか。

再び座布団に座った。

それや、と不機嫌に呟つたのはヒソカだ。

「食べない。つて言つたらびくの~」

ま、確かに念が籠つていると知つていながら食つのも嫌だよな。
特にヒソカは強制されるのは嫌そうだ。

「食わんでもいいぞ。ただ裏ハンター試験が合格にならず、ハンターライセンスがクズになるだけじゃからな」

「ぶつ、ははは。食えないじーさんだ。内心笑う俺と違い、ヒソカはキレた。

「本当、殺したくなるじーさんだね」

ヒソカが絡み付くような濃厚な殺氣を放つ。だが、じーさんは何事もないかのよいに受け流した。

柳に風のような手応えのなさにびっくりしたヒソカは、凶悪なツラで言った。

「あんたがボクとやつてくれるならいいよ」

そこにKU、空氣知らないイルミが口を開いてしまった。

「聞いた、ユースケ。こういうのを節操なしつていうんだ。何だけ、こういう奴って穴があればチクワもいいんだよね。もうヒソカが何を言つてもまともに聞いたらいけないよ」

空間がひび割れた。

「……イルミ。ボク、さすがにチクワは無理だよ。ボクのピーの方
がチクワの穴より大きいもの」

「シツ ハリセモヒニコのかお前

精彩を欠いたどこかずれている反論をするヒソカに、堪えきれず突つ込む俺。

「萎えちゃったよ。もういいや。これ食べればいいんだろ」

ヒソカは袋を破り、餌を口に入れた。傍らではイルミがいつの間に食べたのか、ガリガリ餌をかじっている。強制とか、あんまりこだわりないらしい。

餌を食べた俺たちに、ネテロのジーさんは言った。

「それから、わかってるとは思うが、念は秘匿されるもの。一般の者に念を向けたり、気付かれたりするようなことがあつてはならぬぞ」

誰でも留得できるものじゃないからこそ、争いの起つる原因となる。

もつとも、既に一般人をトランプで殺したり、殺し屋やつてたりする奴にその忠告は意味ねーよな。ま、ジーさんもわかつてるだろうが。

「それでは三人とも、毎日精進せよ。口を過信することなかれ。未知は警戒すれども恐るべからず。まあ、行きなさい」

ネテロのジーさんの言葉が、幻海ばーさんの言葉と重なつた。

自然と口元が緩む。

「じゃあな、ジーちゃん！」

ネテロのジーさんが頷いたのを横田は、俺たちちは部屋を出た。

部屋を出ると、ゴンたちとメラードや名刺交換をしていたポックルやハンゾーがサアツと逃げていった。俺ではなく、俺の両隣にいる変態と宇宙人が怖かつたんだろう。そう信じてる。

俺たちに気付いたゴンは、イルミの正面に来て言った。

「キルアのいるところを教えて」

「聞いてみる？」

「友達に会って行くのに行こう理由はないだろ」

「ゴンの主張に、イルミは思つたより簡単に教えた。

「ククルーマウンテン。その頂上にオレたちは住んでこる」

驚いた。おめーンか、ちゃんとこの星にあったのか。けど山の頂上ならなるほど、宇宙に近いもんな。納得だ。

「殺し屋がそんなに簡単に自分の住み処を教えぢやつていいのかい？」

？」

隣に立つヒソカが面白そうに突っ込んだ。

「構わない。地元じゃ有名だしね。それに、家に着くのは無理だろ

「う」

宇宙船使えってか。

イルミの言葉に、ゴンが噛み付いた。

「家に着くのが無理つてどうこうことだー！」

「ユースケ、オレこの後仕事なんだ」

「お前、人の話を聞けよ！」

話の途中で急に俺に話しつけだしたイルミにゴンが怒る。違うぜ
ゴン。こいつは話を聞いてないんじゃない。自分の話を優先して
だけなんだ。

「イルミ、まずはゴンに答えてやれや」

「だいたい一ヶ月くらいで戻れるから、家で待つてくれるだろ」

「何でためーを待たなきやなんねーんだよ。つか、ゴンを見ろ」

「わざわざ父さんたちには連絡しどいたから大丈夫だよ」

「どにも大丈夫の要素が見出だせねエ。何の話だ」

繰り出されるトマトボールに嫌な予感しか感じない。苛立ちを募
らせたゴンが声を上げかけたとき。

「どうして家につけないか、行けばわかる。ユースケが家にいない

と準備できないだろ。オレとコースケの結婚式

空気が凍つた。

思考が凍つたまま、口だけ解凍したのはレオリオだった。

「おおおお、お、お、こけつ、け、け」

「落ち着けレオリオ、結婚式だ。それでは二ツトリだぞ。国によつて鳴き声は違うのだが、コケコツコーと鳴くのはジャポン式じ二「いや、お前も落ち着けクラピカ。

「え、おめでとうございま、す？ あれ、でもコースケはヒソカと？」
え、じゃコースケはキルアのお兄さん？」

大混乱だなゴン。ついにまだヒソカのことで誤解してやがるのかよ。

これだけ周りが混乱してくれると、逆に冷静になれるもので。よし、ここは一発、言つてやるぜ。

「はつあつ言つがな、俺アおめーと結婚するつもつはかけらも

「じゃ、一ヶ月後に」

ない、と言つ前に艶のある黒い長髪をなびかせ、宇宙人は立ち去つた。ああ。急いでたのはわかったとも。だが。

「話を聞けッ……」

俺の心からの叫びを、横にいたヒソカだけが爆笑する。ハツ挡た
りでヒソカを蹴り飛ばしたら悦びやがつた。

俺ア魔王のはず。なのに、なんでこいつも思に通りにならねーんだ！

笑いながらヒソカが言つ。

「ククク。うん、さすがイルミ。ちやんと受け答えしてはいたと思え
ば、途中で言いたい」とができるとそつち優先だからね」

「あのヤロー、会話中に芋田から受信しやがるんだ。迷惑過ぎるだ
ろー！」

「仕方ないよ、イルミだから」

「それで納得できちまつのが嫌だ」

去り行くイルミの姿を見ながら文句を言いまくる。ゴンたちは未
だに恐々俺を見ている。なア。俺が一体何をした！？

フツフツはらわた煮え繰り返らせていると、ヒソカが話し掛け
てきた。

「とこりで、どうするんだい？ ゾルティックで一ヶ月待つの？」

「待つわけねハだろ。キルアんとこ行つて、一ヶ月たつ前に何とか
して、後はトンズラだ」

「ふーん。イルミだけならまだしも、ゾルティック一家相手にどう

にもならなくなつたらボクを呼びなよ。逃げるの手伝つかうわ」

「人間相手にどうにもならなくなる状況が思い付かねーよ」

「それもやうか。キミ、魔王だもんね」

「おひめ」

胸を張ると、薄笑いを浮かべたヒソカが右手の手の平を俺に向ける。手の平が閉じ、再び開いたときには、そこに名刺が一枚あつた。じこつ。名刺出すへりこ普通に行動できねーのかよ。常に怪しそぎる。

「これ、ボクのメールアドレスね。携帯買つたらメールくれよ」

メールねエ。

手渡された名刺を見て、鼻を鳴らす。

「空メールでよければな」

「おや。キミはシンデレなの?」

「意味わかんねーよ。じゃなくて、俺この文字読み書きできねー

もん」

「ああ、やついえばそうだつたね。じぱんく『ンたちと行動するんだ。その間に読み書き覚えなよ。読み書きできないのは不便だよ」

まあその通りだな。タワーン中でもイルミに聞かなきゃ わからんな

かつたし、イルミの指先に現れた文字もわからなくてヒソカに聞いたんだつけ。

つかイルミとこぬときに読めないのが厄介なんじゃねーか。イルミと一緒になきや問題ねーんじゃね?

いやいや、でも看板読めなきや飯も食えねえよな。こつまでいるかわからないとはいえ、読み書きはできるにこしたことはなさそうだ。

「もうだな。日常の読み書きはもうよつにならねーとな

「うん。それじゃ、ボクも用事があるからこれで失礼するよ。携帯手に入れたら空メールでいいから送ってくれよ。じゃあね」

足どりも軽く、口のまま立ち去つてくれりやあいのものを。

思い出したように足を止め、キモい顔で戻ってきたのはゴンの前。肩をガシッと掴む。脂汗を流しながら、ゴンは何事かと真っすぐヒソカを見た。

田を細め、ニマアと笑うヒソカ。青ざめ、脂汗が滝のように流れルゴン。危険信号が点滅する。

ヒソカはゴンの鼻先でつゝと呟いた。

「よく成長するんだよ、ボクの青い果実」

瞬時にゴンを奪い取り、背後に隠す。

「なんだい、ユースケ。ボクがゴンに構つたからって嫉妬しなく

「ゴンに近寄るな」の変質者が！ 通報すつぜ「ゴルアツ！…！」

両手を広げてゴンを背後に庇つと、クラピカとレオリオがすかさず駆け寄る。

「ゴン！ 無事か！？」

「いいか、ゴン！ 3秒ルールつーもんがあつてな、3秒以内ならなかつたことになるんだ！ お前は今、触られてギリギリ3秒以内にユースケに助けられてたぜ！ だから大丈夫だ！」

「3秒ルールか。レオリオもたまには良いことを言うではないか。それには根拠がある。とある大学の教授が3秒以内と3秒以上につく細菌の数を調査し、そのルールが正しいと証明したらしい。だから安心したまえ」

「う、うん。ありがと」

俺を盾にし、口々にゴンを励ますクラピカとレオリオ。3秒ルールを持ち出したレオリオより、さりげなくヒソカを細菌扱いするクラピカ。やっぱおめーが一番酷エわ。

「ククク。キミたちボクを何だと思つてるんだひつね。殺しちゃおうか」

殺害予告に、背後で硬直するレオリオたちの気配がした。

胡散臭い笑顔でトランプを出しかけるヒソカを「待て待て」と止

める。

「おめー用事あんだる。もう行けよ」

「まあいいか。いつでも殺せるしね。じゃ」

大人しくトランプをしまい、すばやく身を翻した。そこまで本気じゃなかつたらしい。というより、俺が止めなきやマジでさくっと殺して行つただろうから、あいつの[冗談と本気はいつでも紙一重だ。

ため息でヒソカを見送り、振り返る。そこには、まだ張り詰めたままの3人がいた。

「おら。固まつてねーで行くんだる。キルアン

すぐに我を取り戻したゴンが、頬もしく頷いた。

試しの門

クラピカが電腦ページツリーので調べたところによると、ククルーマウンテンはパドキア共和国のテントラ地区ツリー所にある、富士山よりでつけエ山らしい。そんな頂上に住んでんのか。さすが宇宙人だ。

飛行船で三日、そつから電車で山の麓まで来た。ちなみに俺の交通費はクラピカに払つてもらつた。俺ア一文無しだからな。そして、返すつもりは鼻糞ほどもねH。

本当は金ねーし、体動かしてーしでゴンたちが乗る飛行船追っかけて走つて行くつつつたんだが、クラピカにもレオリオにもやめてくれと言られた。まだ常識を失いたくないんだとか。

そんなわけで交通機関を使って麓についたといひ、キルアンちまでは観光バスが出ていると露店のオバチヤンが教えてくれた。観光バスつて。あいつんちは世界遺産か。

観光客に混じつてツアーバスに乗ること数時間。キルアンちの門に来た。巨大で威圧感があり、血しづきがついていそうな門だ。

そんなまがまがしいところで、観光客は写真を撮つている。心靈写真が撮れそうだ。

ぼーっと見ていたらカツプルに写真を頼まれたので、俺の顔を自分撮りしておいた。けつけつけ。喜べ、魔王のご尊顔じゃ。

「……ユースケ、子供ではないのだから」

クラピカに奢められ、俺の代わりにゴンが撮つてやつていた。で
きた弟分だ。

写真を撮り終わり、カメラをカッブルに返したゴンがガイドに聞
いた。

「中に入るにはどうしたらいいの？」

「んー？ ぼうやわたしの話しを聞いてたかしら？ 中に入つたら
一度と出てこれない、黄泉へのト・ビ・ラ、つて言つたのよ？」

ガイドが青筋を立て、笑顔で答えた。

「うん。でも」

言い募るゴンの後ろから、ガタイのいい男が一人出てきた。

「そんなのハツタリだろ」

「誰も見たことがない幻の暗殺一家。写真だけで一億ジユニーの懸
賞金が懸かってるって話だ」

「ただ噂が独り歩きしてるだけで、実物はたいしたことねえってオ
チだな」

顔写真に一億ジユニー。写真撮つときやよかつた、と嘆くレオリ
オに激しく同意だ。今度一枚撮らせろつてあの宇宙人に要求してみ
つか。よしそうしょ。」

しかし、おめーらにあの宇宙人が倒せるかつたらまあ無理だな。顔からしてモブだしな。

モブ顔の男たちは、門の横にある守衛室を襲撃し、中にいるオッサンから通用口らしき扉の鍵を強奪した。守衛のオッサンを放り投げ、モブたちが中に入る。

地面に倒れるオッサンにゴンが駆け寄り、声をかける。なんてい子なんだ。

「あたしは大丈夫だよ。ありがとうぼうや。おーいミケ！ ご飯以外の肉を食べちゃ駄目だよ！ 太っちゃうよー。」

ゴンに礼を告げると、守衛のオッサンが門の内側に向かって叫ぶ。

ミケ？

円を広げると、内側にデカイ動物がいた。魔界にやじるじろいる大きさだが、人間界にいたらM78からヒーローを呼びたくなる大きさだろう。

そのデカイのがモブたちに近づくと、モブたちの靈気が消えた。デカイ動物に食われた。

デカイのは門に近寄り、扉を少し開けるとガイコツを捨てた。さつきのモブだ。

門の外で、観光客が悲鳴を上げる。すぐさまツアーバスに逃げ込む観光客たち。

「おー！ あんたらも早くバスに乗って！」

動かない俺たち4人にも声がかけられるが、ゴンがあつさり断つた。

「オレたちここに残るんで、行つていいですよ」

俺もひらひら手を振ると、観光客たちは化け物を見る目で俺たちを見て、走り去つた。

「といひで、君らはビリして残つたんだい？」

尻についた砂を払いながら、守衛のオッサンが立ち上がる。ゴンが答えた。

「オレたち、キルアの友達なんだ」

守衛のオッサンの目が丸くなる。

「キルアほっちゃんの？」

「うん。会こに来たんだ」

まっすぐ見て告げる門に、オッサンがにっこり笑う。

「やうかい。じゃあこちこちでおこで。お茶でも出やつかね

モブ顔の襲撃により壊されたドアから、小さな守衛室の中に案内される。守衛のオッサンは俺たちに茶を煎ってくれた。

オッサンの話によると、さつきのモブみたいな奴らは始終来るが、友人が来るのは初めてのことらしい。

やはりあの宇宙人にはダチがいなかつたか。だからあんなに変になるんだよ。ダチはいた方がいいぜ。

初めて来た友人の俺たちにオッサンは喜んだ。だが、門の中には入れられないといつ。

「さつき君らも見たでしよう。でかい生き物の腕。あれはミケといってゾルディック家の番犬なんですがね、家族以外の命令は絶対にきかないしなつかない。侵入者は全員かみ殺せ。その命令を忠実に守っている。ぼっちゃんの大事な友達をミケに食い殺させるわけにはいかないから、あたしはあんた達を中には入れられないね」

オッサンの言葉に何を思ったのか、クラピカが口を挟んだ。

「守衛さん。あなたは中に入るんでしょう。中に入る必要がないのなら、鍵を持つ必要もないですからね」

オッサンが鍵を持つてるつちゅーことは、このオッサンは中に入ってるのに、ミケに食い殺されてないってことか。クラピカのこの冷静さが戦馬っぽいよな。ぐれぐれもぽい、で止まつとけ。腹黒の道に進むなよ。

オッサンは、半分は当たり、と口にした。

「中には入るが、鍵は使いません。これは侵入者用の鍵なんですよ」

侵入者はたいてい正面から乗り込んで来る。だが、扉が開けられ

ないと守衛のオッサンから鍵を奪い、脇の門から入り、ミケに食い殺される。オッサンは守衛じゃなく、ミケの掃除夫だと告げた。

「つまり、本当の門には鍵がかかっていない、ということか」

クラピカが突き止めたのはそんな解答だった。そしてそれは正解らしい。

レオリオがすぐさま門に向かい、門をぐつと押した。汗を垂れ流し、全力で押した。が、びくともしない。押しても引いても、左右にも開かない。

「くそっ 開かねーじゃ ねーか！」

「頑張つてレオリオ！　あ、もしかして上に上げるんだつたりして」

全力で押すレオリオと、それを励ますゴンに、守衛オッサンが教える。

「単純に力が足りないんですよ。まあ『らんなさい』この門の正式名称は、試しの門。この門さえ開けられないような輩は、ゾルディック家に入る資格なしということです」

オッサンは上着を脱ぐと門に向かう。体から出る靈気が膨れ上がり、そのままの状態で門を押した。重い門が音をたてて開く。

それを見せ付けると、オッサンは門から手を離した。たちまち門が閉じる。汗を流すオッサンは、俺達を見て言った。

「ふう。『じりんの通り、扉は自動的に閉まるから、開いたらすぐ中

にはいることだね。ここから入れたらミケは問題ない。試しの門を開けて入ってきた者は攻撃するな。ミケはそう命令されてるんですよ。さうやつ、1の扉は片方2トンあります

「……1の扉は、だと？」

レオリオの疑問に、オッサンは頷いて門の方を指差した。そこには徐々に大きくなつていく扉が全部で7つあった。

「一つ数が増える」とに重さが倍になるんですよ。力を入れれば、その力に応じて大きい扉が開く仕組みです。ちなみに、キルアちゃんが戻ってきたときは3の扉まで開きましたよ」

ヒュウ。やるじゃねえか、キルア。 2×3 の一一分で。

「12トン!」

先にゴンが答えてくれた。そつか12トン。へえ、そんなもんを開けたのか。

感心していたら後ろから呆れた声が聞こえた。

「……1の扉が2トンの2つ分で4トン。2の扉が2の2倍で4トン、その2つ分で8トン。3の扉は4トンの2倍で8トン、それが2つ分だから16トンだよ、ゴン」

クラピカが教えてくれた。先に言わなくてよかつたぜ。

「おわかりかね。敷地に入るだけでこの調子なんだ。住む世界がまったく違うんですよ」

守衛のオッサンが、扉を開けた疲れを見せながらそう呟げた。

まあ確かに面倒な家だな。人間界にある桑原ンちも藏馬ンちも呼び鈴一個でオッケー、それが普通だ。よく遊びに行つた茧子ンちなんか、メシ屋だから来るもの拒まずの実にオープンな家だし。

それと比べたら住む世界が違つた。

だけエ扉を見上げていると、ゴンの身体から怒りが沸き起つた。

「そんなの変だ」

「何が？」

「ゴンの怒りがこもる主張に、俺は聞き返す。皆の視線がゴンに向かれた。

「友達を試すなんておかしい。それくらいなら、オレは侵入者でいい。おじさん、カギをちょうどいい

「ちょ、待てやゴン！」

守衛のオッサンに向かつて手を差し出すゴンを、レオリオが焦つて止める。

「もしカギをくれなくとも同じ」とだよ。塀をよじ登るから。絶対そんな門からは入らない

ゴンの田は、いつも決めたらテコでも動かない頑固な田になつていた。こいつマジでおもしれーよなア。

意志の固いゴンに、守衛のオッサンは困ったように頭をかいた。

「困ったねえ。むざむざ坊ちやんの友達をミケのHサにさすわけにはいかないし。ちょっと待ってくださいね」

オッサンは守衛室に戻ると電話をかけはじめた。で、粗暴に怒られ、ペコペコしながら電話を切った。聞かなくてもわかる。失敗だ。

「屋敷に電話してくれたの？」

ゴンの質問に、オッサンは執事室にかけたのだと答えた。

「屋敷への連絡は全て執事室を通すんですよ。家族まで伝わる」とは滅多にありません」

そらまた徹底してんなア。

ゴンはオッサンから電話を受け取り、今度はゴン自じ嘲ちよう語を持った。

執事にあしらわれて終わった。

「ゴンがブチ切れた。」

無言だが、ゴンの身体から、凄まじい怒りの靈氣があふれる。そのまま門に向かい、釣竿を振った。

「待て待て待てゴンッ！」

慌ててレオリオが再びゴンを押さえる。

仕方ねーなア。

俺が声をかける前に、オッサンが決意を感じさせる声を放った。

「わかりました。侵入者用のカギを『ゴン君』に渡します」

ゴンがぴたつと止まつてオッサンを見た。ただし、ヒオッサンは続ける。

「あたしも一緒に侵入者用の扉から入ります。もしかしたらミケがあたしのにおいを覚えていて止まつてくれるかもしれない。まあ100パーセント殺されるでしょうがね。坊ちゃんの友達をただ殺されるよりはずつといい」

その言葉を聞いて、ゴンは釣竿をおさめた。そして、『めんなさい』、と謝った。

「おじさんのこと、全然考えてなかつた」

しゅんとすむゴン。オッサンの死を覚悟した固い気配も和らいだ。

沈んだかわいいガキの頭に、俺はポンと手を置いた。大きなどんぐり目が俺を見上げる。

「オッサンの立場もそうだが、おめーは侵入者の立場でいいのか?」

「え?」

「キルアは3の扉を開けたんだろ。なのにおめーはその扉すらあけられねエで、それでちゃんとキルアのダチって胸張つて言えんのか？」

ダチなら対等じゃなきゃいけねーんじゃねエか、と俺は思つわけだ。

対等じゃなきゃダチになれねーんじゃねエか、と思つわけだ。
試される云々タジヤない。キルアとレベルが違つていいのか。
そういうこと。

俺の言葉に、ゴンは首を横に振つた。

「言えない。それじゃオレ、友達なんて名乗れない」

「だな。せめて1の扉くれエ開けねーとな」

「ふふ、と頷ぐゴン。

状況が落ち着いたのを見取つたオッサンが、ゴンに声をかけてきた。

「それならあたしらの所で特訓していきませんか

思わぬ提案に、オッサンへと視線が集まる。オッサンは朗らかな表情で説明した。

「試しの門から入つて少しのところ、あたしら使用人の家があるんですよ」

何でも、その家は特訓に適した空間らしい。「ゴンたちは躊躇つことなく頷いた。

話が決まったところで、クラピカがコースケ、と俺の名を呼んだ。なんだ、と田で促す。

「試しの門だが、レオリオが無理だったのだから、私にも開けるのは無理だろう。だが、君なら開けられるのではないか?」

そう言われて試しの門を見る。開くか開かないかで言つたら開くだろう。キルアでさえ3の扉だ。開かなかつたら魔王の座は捨てた方がいい。

「開くと思つぜ」

「ここまで開くかわからないが。

「本当、コースケ!?

「マジかよ! いやお前なら有り得そつだが

ゴンが期待に満ちた眼差しを俺に向け、レオリオが化け物を見る態度で引いた。てめエ桑原2号、タコ殴るぞ。

「ねえ、コースケやってみてよー お願ひ!」

俺が開けた門から入ろうといふんじゃなく、ただ純粹な好奇心だろ? おねだり上手な弟分におねだりされたら、そりややらざるをえないってもんだ。

「よつしゅ。フの扉までズドンと開けてやれ!じゅねHか」

気合いで十分に、拳を反対の手の平に打ち付ける。ガンバレー！
と跳びはねて応援する門の前だ。いいとに見せねHとな。

「兄さん、無茶しないでくださいよ。ああ、あんな細い身体で怪我
しなきゃいいけど」

「ああ、いや。コースケは大丈夫だ」

「たとえ扉が壊れてもコースケは無事でしょう」

心配そうにするオッサンの言葉に、レオリオとクラピカが太鼓判
を押す。扉が壊れてもってクラピカ。おめーはビーヴィしてそう一言多
いんだ。さすがにただ押すだけじゃ壊さねーよ。

俺は試しの門の前に立ち、扉に手を置いた。シン、と静まり返る。
さすがに全力で念まで使つたら開くんじゃなく、門が粉々になつ
ちまつよつな気がする。

念を使わず、力だけで押すならたぶん全部開けられるんじゅねー
かな。今までいくかはやつてみねHとわからねーが。

手の平に集中し、俺は少しばかり全力で扉を押した。

あんまり感覚がなかつた。あれ、と疑問を感じたとき。

轟音が響き、砂埃が立ち。

門が吹っ飛んでいた。

門があつた場所には、何もなくなつた。

やべへ。やり過ぎた。

「ギャアアアアアツ！…」

レオリオの絶叫がこだました。

「す、す」「おおおい！… コースケす」「よシ！…」

ゴンが俺のシャツの裾を引っ張つて歓声を上げる。

「ありえない。この扉は256トン。それを吹き飛ばすことなど人間に可能なのか」

クラピカは何やらマジな顔でブツブツ言つてゐる。

オッサンに至つては田も口も開けたまま微動だにしない。

「ワリ。まさか飛ぶとは思わなかつたぜ。ちょっと待つてろ。直すから」

門があつたところから敷地に入り、飛んだ扉まで進む。ゴンは俺のシャツを掴んだまま引っ付いてきた。こうじつ弟、マジほしい。

扉に近寄ると、音もなく巨大な生き物が近づいてきた。犬を巨大化させたような、そんな生き物。たぶん、ミケ。

闇を映す感情のない虚無の皿に、元気なヒツジの声を上げた。

殺す。

それだけしかない機械みてエな生き物。でも、機械じゃない。機械ではなく生き物ならば、本能が必ずある。

虚無の皿が、俺を見た。

それにニイ、と笑いかけた。

「食つまうだ」

一撃で首を落とし、むしって、焼いて、食つ。

俺にかかるつたら、それがおめーの末路だ。明確な殺意を伝えた。

本能があれば、「己の死は恐怖するもの。

齧しなどではない本氣を、生き物はちゃんと読み取った。そして、恐怖したのだろう。

生き物はその場に伏せ、頭を垂れた。皿はもつ合せようとしない。服従したい。

「イツにはもう、俺を害そとする意思は残つちやいないだろ。生き物に背を向け、倒れた扉に手をやる。そのまま持ち上げようとしてしゃがむと、シャツが引っ張られた。硬直したままのゴンだ。

「ゴン、危ねHからちょっと離れとけ」

「で、でもコースケ、あの生き物に背中向けるなんて」

「アーツは俺に完全服従した。獣は一度上下を決めたら従順だぜ」「生き物に視線をやつたまま、ゴンは唾を飲んだ。じっくり生き物を観察する。

生き物からのプレッシャーに脂汗を流すゴンは、たぶん動物の生態に詳しいのだろう。生き物の状態を正確に読み取った。

「……本當だ。こいつ、コースケを上だつて認めてる」

「だろ。俺の身内だつてわからせときや、襲われはしねーよ」

ゴンの硬直した手をシャツからばがし、俺は門を持ち上げ、肩にかついだ。

巨大な門を軽々と肩にかづぐ俺。

その姿を、唖然とした顔でレオリオたちが見る。その様子に、ふと数年前の暗黒武術会のことを思い出した。

そういう戸愚呂が破壊された闘技場の代わりに、隣の会場から闘技場を肩にかついで持つて来てたつけ。

そうだよ。あの闘技場が何十トン、何百トンあつたんだかわからねエが、B級妖怪だった戸愚呂がアレを軽々持つたんだ。魔王の俺ならこのくらいの扉、少し力を込めたらそれだけで飛ばしちまうの

は当たり前だつた。もう少し手加減するべきだつたな。

扉をかついで元の場所に置き、元通りに嵌め込んだ。どうか倒れませんように。いや、試しの門つて名前なくらいだ。根性で立て。

なんとか元に戻し、未だ静かなメンツを見る。ゴン以外全員、硬直していた。

俺が近寄ると、3人は顔を引き攣らせてブツブツ呟いた。

「有り得ねえ有り得ねえ有り得ねえ。そつかあの扉は木の板に代わっていたんだ。そうに違いねエ。よしオレの常識力ムバツク……！」

「おかしい。明らかに人類が持ち上げることのできる重さの限界を軽く超越している。そつか、そろそろ朝なのか。夢から覚める時間が。いつの間に私は寝ていたのだろう」

「ああそつか、夢だつたか。そつだよねえ、坊ちゃんところに友達が遊びに来るなんてやつぱり夢だつたんだ」

おーい、帰つてこーい。

現実逃避する3人を余所に、「ゴンだけが満面のキラキラした眼差しで俺を見た。

「ユースケす」こーい！ カツコイイ！」

ああ。やつぱにこつこつ弟ほしいな。

俺は「ゴンの頭を撫でて答えた。

「俺ア魔王だからな」

「シシ、ヒ笑うと、ゴンは真面目な顔で頷いた。

「魔王って本当にすごいね」

普通は「冗談にされまう俺の真実を、最初から真実であると理解したのは、そういうやゴンだけだったな。ホント、将来が楽しみなガキだ。

「ンなマジな顔で言ひなよ。照れちまうだろ」

「だつて本当にすいんだもん。オレじゃ試しの門も開けらんないし、あの生き物も怖いだけだつた。ユースケだったら、ヒソカにも勝てそう」

そういうやゴンの中で強いヤツつたらあの変態なんだっけか。なんだかハンター試験のときあつたらしく、ヒソカにプレートを突き返したいようだ。

「ヒソカねエ」

ガチでやつたら瞬殺だが、アイツの念能力を引き出してじっくり戦つたら厄介な気はするな。

俺とヒソカが勝負したときの結果より、ゴンが気になつているのは自分とヒソカの差だろつ。微笑ましいねエ。その思いのまま、俺は言った。

「おめーなら、将来的にはヒソカにも勝てるぐらい強くなれるぜ」

「ホント！？」

パツと表情が輝く。クク。撫で繰り回したくなるんだよなア、こいつ。

「ホント。ま、おめーがこれから努力すればの話だな」

あと、いい師に巡り会うのも大事だ。その辺は、ネテ口のじーさんが念の師匠を付けるつづってたからなんとかなんだ。

「オレ、頑張るよ」

「おひ」

決意のこもる真っ直ぐな眼差しに、頷きで応えた。
にしても。

こんないい場面だつちゅーのに、なぜクラピカたちは未だ放心中
なんだ。

仕方ねーなア。

フン、と鼻息を吐き、俺は3人に声をかけた。

「ゴンたちは守衛のオッサンが寝泊まりする使用人の家で、特訓を始めた。」

オッサンの家は、玄関の扉が200キロあり、食器も椅子みたいな動かして使う家具も、全てが重い。

おもしれーんだが、ここで特訓しても俺アなあ。試しの門壊しちまつた俺にこの特訓はいらねーだる。

そんなわけで一足早く、俺はキルアと会いに行こうとした。

「キルアに、オレたちが会いに来てるって伝えてね」

屋敷へ向かおうとする俺に、ゴンがそう言った。かわいい弟分にお願いされたら答えは決まっている。

「任せろ。俺が戻つて来る前に、お前らは試しの門から入れるようになつとけよ」

「うん！ がんばるよ！ ユースケいつてらっしゃい！」

笑顔で送り出された。

守衛のオッサンは屋敷まで行つたことがないらしい、この道を辿れば着くはず、と山奥へと続く道を指差した。

「ユニア門だけで規格外の家だ。何があるかわからんから気をつけ

るよ

「そうレオリオが心配するのを、ため息混じりにクラピカが言葉を放つ。

「レオリオ。コースケはその規格外の門を破壊した男だぞ。そんな規格を超越したコースケが危機に陥るなど考えられない」

確かに、と頷く面々。そうだなア、俺が危機つつたら、黄泉や飛影だとか魔界の深部に住まうJ級妖怪以上の奴らの技をガチでくらうことくらいか。うむ。ククルーマウンテンくらいの山なら、更地にした上にえぐつちまつな。

「ま、心配はありがてエが、俺のことより自分らの心配しどいた方がいいだろうな。じゃ、俺ア行くぜ」

3人と守衛のオッサン、ゼブロのオッサンに手を振り、俺は屋敷を田指した。

屋敷までの道のりは天気もよく、まるでハイキングでもしているかのようで、なかなか気持ちがいい。青空と風と緑が心地好くて、俺はゆっくり歩いて屋敷へと向かった。

数時間歩いた頃、石垣が見えてきた。一ヵ所だけ通れるよう道がある。

そこに、力エルみてエなツラしたガキが立っていた。直立不動のそのガキは、スーツを着て、手には鈍器を持っている。凹凸のない体つきだが、髪形から女だろ?と推測する。

少女は俺を見ると、無表情に行つた。

「リリは私有地よ。ただちに立ち去りなさい」

「私有地なのは知つてんだよ。俺アキルアに用があつてね。呼んでくれつか?」

「そんな話は聞いていないわ。即刻立ち去りなさい。そもそも」と

少女は無表情まま、鈍器を俺に向けた。

「強制的に排除するわ」

「強制的に排除、ねえ。

見たところ、実力的にはゴンのちょい上、くらいか。うむ、ドングリの背くらべ過ぎてわかんねーな。まあ、その鈍器で殴られたところで俺にやノーダメージな上、鈍器が折れるだろ?」

「ガキをいじめる趣味はねーんだわ。キルアを呼んでくるか、通してくんねーかな」

笑いながら念で圧力をかけてみた。途端に少女はガタガタ震える。震える額からツー、と汗が流れた。

すぐに念を引っ込める。少女は尻餅をつき、その体勢でじりじりとあとずかつた。顔面蒼白で、ものすげい冷汗だ。声も出ないらしい。

あひや。いじめ過ぎたか。

近寄つて田の前にしゃがみ込み、少女と田を合わせた。少女の口から、ヒツ、と鋭く悲鳴が上がる。

「なあ。俺アよ、ここを通りうと思えば通れるんだわ。わかつただら

る」

俺の確認に、少女はガクガク震えながら、首を縦に何度も振る。

「だが、おめえにも役目があんだけだから、おめえが何らかの行動をするくらいは待つてやる。俺をこのまま通すなり、キルアを呼びに行くなり、それはおめえに任せる。だが、おめえが何の行動も取らず、まだ通さねえつづーんだつたら、俺はおめえを無視して通るぜ」

さて、どうする。

問い合わせると、少女は震える声で、必死に言葉を紡いだ。

「しつ、執事ちよ、長こつ、聞いて来ますっ」

「了解。ここで待つてつから、浦飯幽助がキルアに会いに來たつて伝えてくれよ」

少女は再び首を縦に振ると、不自然な動きで立ち上がり、歩いて行く。あの動き、なんか芸人がやってた気がすんだよな。何だつか。生まれたばかりの子馬か子鹿だったか。ちょっとばかし、怖がらせ過ぎちまつたかな。ま、いいべ。

待つこと数分、黒服の男たちが一列にやつて来て、ずらりと石垣

の前に並んだ。

長身の中に一人だけ小さいのがいると思えばやれやせびの少女だった。女は少女だけらしい。

黒服の中から一人、眼鏡をかけた男が柔軟な表情で前に出る。

「ゴースケ・カラメシ様とお伺いしました」

「おひ。 あんたは?」

「当家の執事をまとめております、『ゴト』と申します」

「ゴト」という男が恭しくお辞儀すると、他の執事も寸分の狂いなく一斉に頭を下げた。

「ゴトさんね。 よろしく」

「ゴトとお呼びください。イルミ様よりもてなすより、おおせ付りました。客人として、我ら一同、ゴースケ様をおもてなし致します」

イルミ様から、ねエ。嫌な感じだ。イルミの野郎が俺のことを連絡していたらしいが、あのイルミだ。どんな連絡をしたのか、もんのすごい不安しか覚えないんだが。

まあとうあえずこの先に進めるようだし、金持ちのオモテナシつーのに興味も感じるしで、俺はゴトに案内されるままに着いて行つた。

案内された場所は屋敷ではなく執事室で、俺は首を傾げた。まあ人間界にあるウチと比べりや、執事室でも十分屋敷っちゃ屋敷だ。天井やけに高Hし。トランポリンできんじやなかろつか。

「HJでオモテナシか?」

「いいえ。正式な場所は屋敷なのですが、そちらは現在準備中のため、申し訳ございませんが、もう少々こちらでお待ちください」

「トートーが貼り付けたような柔軟な表情で答えた。

準備中、ねH。一体なんの準備してんだか。

高そうなソファに腰を下ろすと、すぐにお茶が運ばれてきた。もちろん茶請けつき。

お茶が入ってるこのカップも、茶請けがのってるこの皿も、もしや人間界でいう有馬やウエッジなんとかみてHな有名な食器なんだろつか。だからといって躊躇するような纖細さの持ち合わせはないが。

むんずと掴んで飲食する前に、以前ネテロのジーさんに出された飴を思い出した。

Hの茶と茶請けに念が込められている可能性はあるか?

……。

面倒臭H。いちいち出されるモノに警戒するなんてやつてらんねーよ。念入りならそんديいいや。

紅茶っぽい色とにおいのお茶をズズッとする。茶請けのクッキーをバリバリ食つて、じっくん。またお茶をすすり、口直しをする。

お茶もクッキーもなんつーか金持ちの舌用なのか、あんまし俺の口には合わないような氣がするぜ。人間界で食つてたヤツと、味が違う。こつちのは俺が今まで食つたことのないモンが、一味加わってるような。

考えながら貪り続けていると、正面に立つゴトー、その他同じ部屋にいる執事数人、皆の視線が俺に集まっていた。一様に啞然とした顔をしている。なんだこいつら。

「もーもー」とたぶん超高級クッキーを食い続ける俺に、ゴトーが柔和な表情は変えずに、目だけマジに言った。

「さすがイルミ様のお選びになつた方ですね。その紅茶にも、クッキーにも、超大型の獸でさえ一滴で致死量の猛毒が含まれています」

ブツ

俺の口から、唾液混じりのクッキーの粉が飛び散つた。

すかさず一人の執事が拭き取つてくれたが、その顔面にはガスマスクのようなものをつけ、拭う手には金属纖維の手袋が嵌められている。拭き取つた手ぬぐいはポリ袋に入れられ、金属製のダストボックスに手袋ごと廃棄された。

その後、スプレーで何らかの液体を吹き掛けると、執事たちは俺に一礼し、下がつた。

ちよ待てや。

「……毒？」

「はい。イルミ様から、『自身が』帰宅されるまで、コースケ様を家に留めておいてほしいと望まれまして。コースケ様は恥ずかしがり屋なので、何もせずにいると逃げてしまつたため、昏倒させておくようご指示です。また、通常の毒では効かなうなので、屋敷で最も強い毒を盛るよつとも」

あんの宇宙人め。

頭が痛いのは毒のせいじゃないと思いたい。

「そんで俺が死んだらビースト氣だよ」

呆れて突っ込むと、ゴトーはにっこり笑つた。

「死体処理には定評がござりますので安心ください」

なかつたことにそれるらしき。

やっぱあの宇宙人の家だよ。うくなもんじゃねーわゾルディック。

「ま、人間に効果のある毒じゃたぶん死なねエけどな」

何せ魔界の空気が既に猛毒だ。それに慣れきつた体が、人間の毒^ビときでどうにかなるとは思わねー。

「そのようですね。今度はより強毒を手配しておりますので、少々

お待ちください。ああそつだ。屋敷の方の準備がまだ整つておりませんので、もうじまくらべの間、ゲームはいかがですか」

ゲーム、と口にしたゴトーが出したのは、一枚のコインだった。パドキア共和国に来るまでに使ったからわかる。1ジヒー「コインだ。

ゴトーは俺の返事など聞かず、コイントスをすると高速で両手を動かし、片方の手の中にコインを隠した。なかなかのテクニックだが、あくまで人間の速さ。

「さて、どちらの手に入っているでしょうか

俺の皿には、動きがスローモーションのよつに見えていた。迷わず左だと答える。

「正解です」

「ゴトーが左手を広げると、しつかりージョニーがあつた。

「では、レベルをあげますよ」

「ちよい待ち。それ、俺にもやらせりよ

手を差し出す俺。ゴトーは一瞬止ましたが、すぐに俺の手にコインをのせた。

「よく見てろよ」

さう忠告し、俺はコインを高く投げた。

高く。

高く高く。

トランポリンができそつなくらい高い天井へ。

ゴトーの目だけではなく、他の全ての執事たちの視線が天井へ向かうコインに集まる。

その隙に部屋を出た。

飯に毒を混ぜるような奴らのオモテナシの準備なんか待てつかよ。そつとキルアんどこに行くべ。

突然消えた俺の姿に、執事たちが騒ぎ出すのはもう少し後。

カルト（前書き）

獵奇的な表現あり。

ゾルディックの兄弟や家族について、設定や性格に捏造あり。

以上の違和感に納得できない方は読まないでください。

カルト

執事室から出ると、さらに奥に城が見えた。あれがキルアんちだ
わい。

道に沿つて城に向かつて行くと、叢に人間の気配がした。脇道だ
が、ちょっとくら見てみつか。

叢をかきわけて中に入つていいくと、小さな姿がしゃがんでいるの
が見えた。黒いオカツパ頭に黒い着物を着た、小学校低学年くらい
の少女だ。

何してんだ、としゃがみ込む少女の背後から見下ろすと、少女の
手元が真っ赤に染まっているのが見えた。

少女の血ではない。その小さな手に、猫みてエな動物がグチャグ
チャになつているから、血はその小動物のものだろつ。

切り刻まれ、耳が取れ、内臓がはみ出しながらも、小動物はまだ
ピクピクと反応していた。心臓の音もする。まだ生きている。

その首を、少女は握りしめ、とどめをさした。愉快そうな気配。
そうか。この小動物をここまで痛め付けたのはこのガキか。

「うへえ。イイ趣味してンな」

上から声をかけると、少女はその場を飛びのいた。猫みたいな目
が驚愕の眼差しで俺を見上げる。

「誰！？ なぜここにいる！？」

「JのJ。 Jのオーラ。 少女が誰か、なんとなくわかつちまつたぜ。

「俺ア、 幽助だ。 わめーの兄貴、 キルアのダチみてHなもんかな」

「キル兄様の？」

訝しげに目を細める少女が言つたのは、 キル兄様。 やつぱ兄弟だつたか。 当たりだ。 オーラが似通つてゐるもんな。

「どうやつてJまで来たの？ 試しの門は？ ミケは？ 執事たちはどうしたの？」

口速に質問を繰り出す少女に、 俺は答えた。

「ちゃんと試しの門開けて入つたぜ。 ミケは大人しく通してくれたし、 執事たちも快く送り出してくれたな」

門は開けたつか壊して入り、 ミケは脅し、 執事たちは騙した。 なんて言わない。

「そんな細い体での門開けたんだ。 見た目よりやるんだね」

「まあな。 俺ア魔王だからな」

「ふーん。 電波系？」

そりやおめーの一番上、 かわからんが、 トマトキヤツチボールが得意の兄貴に言えや。

とりあえず、このガキはやつぱあいつらの兄弟だぜ。失礼なあたりに残念な遺伝を感じる。

「おめーの名前は？」

「僕はカルト。カルト・ゾルディックだよ」

僕。

僕？

「あ。ありや何だ？」

空を指差すと、カルトは指差された空を見た。その隙にさつとチエックした。

股間にふくらみ。手に慣れた感触。

おオ。

「コイツ男か。」

空を確認して何の異変もなかつたことを知り、視線を再び俺に戻す少女、もとい、女装少年。

「何？ 何もないよ？」

「あー。おかしいな。なんか円盤みてエなモンが見えたんだが気のせいだつたか」

「本当に電波なんだね」

冷たい眼差しながら、俺の行動には一切気付こちやしない。ふふふ。気付かれるべマはしないぜ。

「で。カルトはなんでそいつ殺したんだ？」

握りしめている手を指差すと、カルトはそれを放り棄てた。

「コレ？ 飽きたから。だつて弱いんだもん。何？ 説教？ 僕のペツトをどう扱おうと僕の自由でしょ」

」の腹立たしい物言い。さすがあの兄弟だ。

弱いから氣まぐれに勝り殺した。そういうことか。

「いや、と唇の両端を上げると、俺はカルトに向けて小さく殺氣を放つた。

「……ッ」

俺の殺氣を受けた小さな体がガタガタ震える。顔面は蒼白で、脂汗が流れた。

「弱虫なア。飽きちまつた。殺そつか」

冷めた口調で言つてやると、カルトは腰が抜けたよつて、ペタリと地面にしゃがみ込んだ。それに立つたまま田線を合わせ、告げる。

「弱^ヒから殺すンなら、自分が弱かつたら殺されてもいいって」ひたな。快樂で生き物殺すンなら、快樂で自分が殺される覚悟じろよ」

そのまま放置して去りうとしたら、異臭とジヨー、といづ音。あ、もしかして。

「……っく、えく、も、もれちゃつた……」

嗚咽とともに血^{レバ}母^モ告^シびうせ。

水音がしていたから近くに川があるのはわかつていた。

泣きじやくるガキを放つておくわけにはいがず、俺は仕方なく川に連れて行き、ガキを川に突つ込んだ。丸洗いじゃ。

「ほれ、着物脱げ」

「……ヒクッ……ショタコーン?」

「沈めつぞ」

カルトは素早く着物を脱いだ。そんなややこしい着物をちゃんと自分で脱げるんだからたいしたもんだ。脱げね一つ一つたら代官脱ぎさせてやるが。お代官様あーれーつて带引っ越し張つて回転させるアレだ。

脱いだ着物を受け取り、濡れたまま木の枝にかける。

「ここまでやつてやりや もういいだろう。

「家、近くだる。どうせおめーんちの敷地内だ。そのまま家帰れん
だろ」

「野外露出プレイ？」

「誰だ、それ教えたの？」

「ひつ み、ミル兄様でしゅ！」

ミル兄様？ どつかで聞いたような。……イルミが言つてたヤツ
か。たしかミルキ。イルミに無駄知識を教えた死刑野郎か。

「いいが、カルト。その単語は忘れる。いらねえ知識だ」

「あい！ わしゅれまちた！」

恐怖で舌が回つてねーし。さつきのクソガキと同一人物だと思つ
とおもしれーな。

俺は着ていたシャツを脱ぐと、素つ裸のカルトに着せた。

これ、元はクラピカのシャツなんだが、裾も袖もやはりカルトに
は大きかつたよいで、裾はスカート丈だし、袖は手が出ない。

シャツを身に纏つたカルトが眉をしかめて呟いた。

「……汗くさい」

「文句言つなら返せ」

「『めんなさい。ありがとうございます』

「よし」

クラピカに借りてから一切洗つてねーしな。まあ臭いだろう。だが、借りる立場のくせにそりゃ言わせねエ。

「送つてつてやるから案内しろよ」

「はい！」

いい返事だ。キルアに続き、ゾルディック家一人目の調教完了。

一番厄介な宇宙人野郎こそ調教してやりてエが、アレは無理だ。諦めた。関わらねエのが一番だ。

力チソコチソの状態でカルトは俺の僅か前に立ち、案内し始めた。と思つたら石に躓いてこけそうになる。どじつ子かよ。

首ねっこを掴んで助けてやつた。しううがねエな。

「ほれ、手出せ」

「切り落としましゅか！？」

「『けたぐらい』でんなことすつか。どうなつてんだよゾルディック。手、つなぐんだよ。こけねーように」

猫目をキヨトンさせたカルトの小さな手を、呆然としている内に握る。

「ほら。案内」

「……はー」

やけに神妙に、カルトは歩き始めた。

しばらく無言で歩く。微妙な空氣だ。なんか会話すつか。

質問を考えたら、知りたいことが出てきた。

「なあカルト」

「ひやいッ！」

いや怯えすぎだろ？

「お前らって何人兄弟なんだ？」

「はい！ 一番上がイル兄様で、二番目がミル兄様、三番目がキル兄様、四番目がアルカ、五番目が僕です！」

おでれエた。あの宇宙人が長男かよ。兄弟多い家の長男つてもんは、もつとしつかりしてて常識あるヤツだと思つてたぜ。

「イルミルキ、キルア、アルカ、でおめーがカルトね。なるほど。しりとりか。で、5人兄弟でみんな男か？ むさ苦しいねH」

「はい！ むさ苦しいです！」

はきはきとしたおづむ返しの即答に思わず吹き出しちまった。かわいいじゅねーの。

「まあ、キルアやカルトみてHのならそんなむき苦しきはねーか」

黒髪のオカツパを、繋いでいない方の手でぐりぐりと撫で回す。

「え、あ、あの」

皿を皿黒させているカルト。小動物彌り殺すようなクソガキだが、こんなところはまだかわいげがある。

「おめーの兄ちゃんたちって、おめーから見たらどんなん?」

「兄様たちですか。イル兄様は、……ちょっと変わった人?」

「ちょっとで済むのかアレ」

俺が今まで出会った中でトップの宇宙人だぞ、おめーの兄ちゃん。

「ミル兄様はブタで」

「どう突っ込んだらいいんだそれは」

「キル兄様はおもしろいから好き」

「そつか」

弟に好かれてるなんて良かつたじゃねーの。微笑ましいねH。

「アルカは人間なのかすらよくわからない」

「待て待て待て」

どうなつてんだよゾルディック。人間なのかわからないのが他にもいるのか。ちなみにイルミは人間じゃない。

「あんま突っ込むとドッボにはまる気がする。なら父ちゃんと母ちゃんはどんなんだ?」

「母様はヒステリーで、父様は強くてかっこいい」

ヒステリーって。確かにキルアに刺されて喜んだ母ちゃんだよな。さすが宇宙人の母ちゃん。一癖も二癖もありそうだ。

「へえ。親父をかっこいって言えるのはいいな。俺の親父はロクデナシばっかだからなア」

俺の言葉に、カルトはキヨトンと俺を見上げて聞き返してきた。

「ユースケ様には父親がたくさんいるんですか

様ア!?

気持ちの悪い敬称に、ブツと吹き出した。その呼ばれ方は気持ち悪い。

「様はいらねー。幽助でいいぜ」

「じゃあユースケ」

「ん。俺の親父は一人いたんだが、一人は女子供殴るカスで、一人

は。そうだな、とんでもねエ大馬鹿野郎だ

何せ「腹減つた」が最期の言葉だ。本当に馬鹿な親父だった。

「大馬鹿野郎なのに、コースケはその人が好きなの？」

カルトの黒い猫目が、不思議そうに俺を見上げていた。俺ア大馬鹿野郎つて罵つたはずなんだが、なぜ好きなんてことになつたんだ？

そう聞いたら、カルトは答えた。

「だつてコースケ、なんだか優しい顔だつたから」

どんな顔してたんだ俺。俺がアイツを好きだつて？

「さアてね。ま、ああいつ大馬鹿野郎は嫌いじゃねーな」

「難しい。嫌いじゃないなら好きなんじゃないの？ 好きつて言えばいいんじゃないの？」

「そうだな。そういうスペックと一択つてのは大好きなんだが、気持ちつづけの一択じゃねーらしいんだわ。俺にもよくわからん」

「ふうん。あ、……一択じゃないつていうの、わかるかも」
カルトはちらりと俺を見た。

「僕、コースケが怖い。怖いって嫌いの方でしょ。でも、服を貸してくれて、こうやって手をつないで、頭撫でてくれて、話を聞いてくれるコースケは好きだと思うんだ。怖いけど、好き」

なんだか絶叫系とかホラー映画を好きかと聞かれたヤツの返事みたいだな。怖いけど好き。そりやお前、怖いのが好きなんだろ。

「そうか。俺も、小動物斃り殺しやがるとんでもねークソガキだと思つてたが、こいつやって怖がりながら一生懸命話すおめーはかわいげがあつてけつこう好きだぜ」

そう言つてやつたら、カルトがうれしそうに頬を赤らめて笑つた。
かわいいねえ。じついう弟も悪かない。いや、やっぱ小動物斃る弟
はいらんな。

カルトは会話をしている内に緊張を緩めたらしい。口調が崩れ、
表情も和らいだ。

「キル兄様は、今ミル兄様のお部屋にいるんだよ。ミル兄様が刺された仕返しに拷問してるといふ」

それをさうつとこいつのか。じつなつてんだよゾルティック。

「んじゃあ、そこに連れて行つてくれよ」

「うん。いいよ」

軽く応じたカルトは、俺の手をぎゅっと握つて前に進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6806v/>

魔王の壁越え

2012年1月5日21時46分発行